

長野県松本市

KAWANISHI-KAIDEN

川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ

—松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

古代・中世編



2002.3

松本市教育委員会

長野県松本市

KAWANISHI-KAIDEN

川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ

—松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

古代・中世編

2002.3

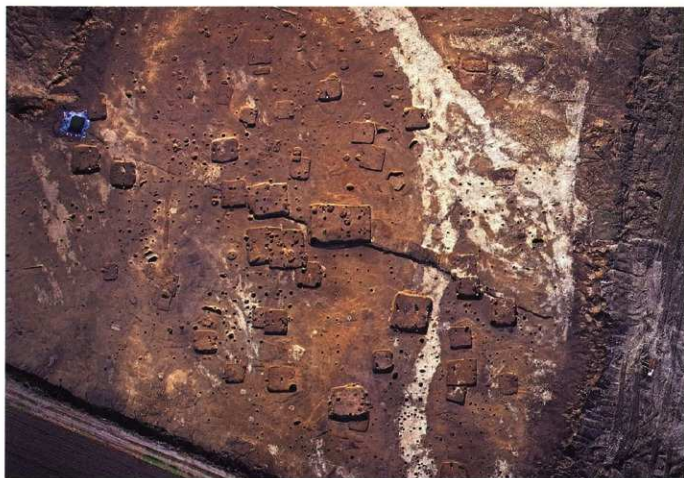
松本市教育委員会



川西開田遺跡3C区全景



川西開田遺跡3C区全景(東から・工場手前に三間沢川が流れる)



川西開田遺跡3C区中心部の遺構群



236 (37住)

757 (63住)



1342 (98住)

1336 (98住)



川西開田遺跡出土灰釉陶器(S=約1/2)



川西開田遺跡出土銅製品(S=約2/3)

序

川西開田遺跡は松本市の南西部に位置し、その範囲は神林地区・今井地区にわたります。本遺跡は以前から埋蔵文化財の包蔵地として知られており、平成7年に初回の発掘調査が行われています。

このたび当地に新松本臨空産業団地建設事業が計画されたため、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成10年4月から平成11年10月にかけて行われました。長期間にわたる調査となりましたが、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、縄紋時代から中世にかけて、様々な時代の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われまます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

例 言

- 1 本書は平成10年4月20日～翌年1月6日及び平成11年4月5日～10月5日にかけて実施された、松本市神林字竹田道6172-1地に所在する川西開田遺跡の緊急発掘調査報告書(全3冊)のうち、弥生時代及び古代・中世を扱った第1分冊である。
- 2 本調査は松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査であり、平成12・13年度に行った整理・報告書作成作業とともに松本市教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡は過去に2回の発掘調査が実施されているため、本調査は平成10年度のを第3次(Ⅲ)、11年度を第4次(Ⅳ)とした。第3次にはA～Cの3地点、第4次はA・Bの2地点があり、調査点名と組み合わせで呼称した(例：3A、4B等)。なお、本書で対象とする弥生時代及び古代・中世は3C、4B地点及び3A地点の一部が該当する。
- 4 本書では遺跡の性格を正しく把握するために、本調査に並行して実施された川西開田遺跡第5次調査(V；平成11年8月20日～10月4日実施、報告書は松本市文化財調査報告№150)で検出した遺構・遺物についても扱っている。5次調査の範囲は本調査4B区の西縁に続く三間沢川に沿った細長い範囲である(第3図参照)。従って調査に際しては具体的に両者を分けなかったため、本報告書中では4B区に一括し、特に5次調査区については明記しなかった。
- 5 本書の執筆はⅠ：事務局、Ⅱ-1・2、Ⅲ、Ⅳ-3、V-1-(2)・(3)：竹内増長、Ⅱ-3：赤羽裕幸・竹内増長、Ⅳ-1・2、V-1-(1)・(4)、V-3、Ⅵ：竹原 学、V-2：太田圭都が行った。
- 6 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄 百瀬二三子	遺物保存処理・注記・復元 五十嵐周子、内澤紀代子、酒澤文江
遺物実測 太田圭都、菊池直哉、清水 究、	竹内直美、竹平悦子、酒沢文江、松尾明恵、八坂千佳
遺構図整理・版組み 石合英子	トレース 窪田瑞恵、太田万喜子
遺構写真 現場担当各職員	航空写真 (株)ジャステック
総括・編集 竹内増長	

- 7 図中で用いた方位記号は真北を指している。
- 8 遺構図中の土層名は下記により記号化している。

表記法	土色(混入物・量)	混入物量	a 少量	b 中量	c 多量
土 色					
1 褐色	6 黄褐色	11 暗灰色	16 黄色	21 砂	
2 暗褐色	7 茶褐色	12 黒灰色	17 暗黄褐色	22 砂 礫	
3 黒褐色	8 灰褐色	13 赤灰色	18 暗茶褐色	23 緑灰色	
4 明褐色	9 橙褐色	14 黄灰色	19 黒 色		
5 赤褐色	10 灰 色	15 青灰色	20 焼 土		

混入物

A 小 礫	F 炭化物塊	K 茶褐色土粒	P 砂粒	U 灰色土塊
B 礫	G 炭化材	L 黄色土塊	Q 黒色土粒	V 灰色土塊
C 焼土粒	H 黄色土粒	M 黄褐色土塊	R 黒色土塊	W 赤褐色土粒
D 焼土塊	I 黄褐色土粒	N 橙褐色土塊	S 暗褐色土粒	X 赤褐色土塊
E 炭化物粒	J 橙褐色土粒	O 茶褐色土塊	T 暗褐色土塊	Y 鉄分

- 9 弥生および平安時代の出土土器についてはページ数の都合から観察表を掲載しなかった。そのため最低限必要な観察事項については図中に付記した。その内容は以下のとおりである。

<弥生土器>

土器拓影・実測図面に施紋要素を下記の略号で、また図№下には器種・部位をそれぞれ記した。

条→条痕紋 太樫→太樫状工具による櫛掛紋・条痕紋 縦(横)羽→縦(横)位羽状条痕紋 繩→繩紋

刺→刺突紋 キザミ→刻目紋

<平安時代の土器・陶器>

土師器：断面白 黒色土器：断面白・黒色部網掛け 須恵器：断面黒 軟質須恵器：断面黒・遺物№に「NS」

と付記 灰釉陶器：断面黒・遺物№に「K」を付記 緑釉陶器：断面黒・遺物№に「R」を付記

文字以外の器面の痕痕、タール等の付着は網掛けで範囲を示した。

- 10 本書の作成にあたっては次の方々からご教示、御協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

網原 健、佐々木明、笹本正治、野村一寿、原 明芳、樋口昇一

- 11 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒399-0823長野県松本市中山3738-1 Ⅱ0263-86-4710)に収蔵されている。

目次

巻頭図版

序

例言

目次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経過	
2	調査体制	
II	調査地と遺跡の環境	3
1	調査地の位置	
2	遺跡の地形・地質	
3	遺跡の歴史的環境と周辺遺跡	
III	調査の概要	9
1	調査次・調査地点と調査方法	
2	調査方法	
3	調査結果の概要	
IV	発見された遺構	
1	弥生時代の遺構	18
2	平安時代の遺構	18
3	中世の遺構	24
V	出土した遺物	
1	土器・陶磁器・土製品	83
2	石器	125
3	金属製品	130
VI	調査のまとめ	140
付編	川西開田遺跡4B区出土炭化材の放射性炭素年代測定	145
図版		
報告書抄録		

插图目次

第1図	調査地の位置と周辺道路	2	第54図	中世の遺構(15)	74
第2図	土層柱状図	3	第55図	中世の遺構(16)	75
第3図	調査区の配置	7	第56図	中世の遺構(17)	76
第4図	A区全体図	10	第57図	中世の遺構(18)	77
第5図	3C・4B区全体図	11	第58図	中世の遺構(19)	78
第6図	3C区遺構配置図(1)	13	第59図	中世の遺構(20)	79
第7図	3C区遺構配置図(2)	14	第60図	中世の遺構(21)	80
第8図	3C区遺構配置図(3)	15	第61図	中世の遺構(22)	81
第9図	3C区遺構配置図(4)	16	第62図	中世の遺構(23)	82
第10図	3C区遺構配置図(5)	17	第63図	平安時代の土器・陶器(1)	88
第11図	弥生時代の遺構	31	第64図	弥生時代の土器(1)	90
第12図	平安時代の遺構(1)	32	第65図	平安時代の土器・陶器(2)	91
第13図	平安時代の遺構(2)	33	第66図	平安時代の土器・陶器(3)	92
第14図	平安時代の遺構(3)	34	第67図	平安時代の土器・陶器(4)	93
第15図	平安時代の遺構(4)	35	第68図	平安時代の土器・陶器(5)	94
第16図	平安時代の遺構(5)	36	第69図	平安時代の土器・陶器(6)	95
第17図	平安時代の遺構(6)	37	第70図	平安時代の土器・陶器(7)	96
第18図	平安時代の遺構(7)	38	第71図	平安時代の土器・陶器(8)	97
第19図	平安時代の遺構(8)	39	第72図	平安時代の土器・陶器(9)	98
第20図	平安時代の遺構(9)	40	第73図	平安時代の土器・陶器(10)	99
第21図	平安時代の遺構(10)	41	第74図	平安時代の土器・陶器(11)	100
第22図	平安時代の遺構(11)	42	第75図	平安時代の土器・陶器(12)	101
第23図	平安時代の遺構(12)	43	第76図	平安時代の土器・陶器(13)	102
第24図	平安時代の遺構(13)	44	第77図	平安時代の土器・陶器(14)	103
第25図	平安時代の遺構(14)	45	第78図	平安時代の土器・陶器(15)	104
第26図	平安時代の遺構(15)	46	第79図	平安時代の土器・陶器(16)	105
第27図	平安時代の遺構(16)	47	第80図	平安時代の土器・陶器(17)	106
第28図	平安時代の遺構(17)	48	第81図	平安時代の土器・陶器(18)	107
第29図	平安時代の遺構(18)	49	第82図	平安時代の土器・陶器(19)	108
第30図	平安時代の遺構(19)	50	第83図	平安時代の土器・陶器(20)	109
第31図	平安時代の遺構(20)	51	第84図	平安時代の土器・陶器(21)	110
第32図	平安時代の遺構(21)	52	第85図	平安時代の土器・陶器(22)	111
第33図	平安時代の遺構(22)	53	第86図	平安時代の土器・陶器(23)	112
第34図	平安時代の遺構(23)	54	第87図	平安時代の土器・陶器(24)	113
第35図	平安時代の遺構(24)	55	第88図	平安時代の土器・陶器(25)	114
第36図	平安時代の遺構(25)	56	第89図	平安時代の土器・陶器(26)	115
第37図	平安時代の遺構(26)	57	第90図	平安時代の土器・陶器(27)	116
第38図	平安時代の遺構(27)	58	第91図	平安時代の土器・陶器(28)	117
第39図	平安時代の遺構(28)	59	第92図	平安時代の土器・陶器(29)	118
第40図	中世の遺構(1)	60	第93図	平安時代の土器・陶器(30)	119
第41図	中世の遺構(2)	61	第94図	平安時代の土器・陶器(31)	120
第42図	中世の遺構(3)	62	第95図	平安時代の土器・陶器(32)	121
第43図	中世の遺構(4)	63	第96図	平安時代の土器・陶器(33)・土製品	122
第44図	中世の遺構(5)	64	第97図	中世の土器・陶磁器(1)	123
第45図	中世の遺構(6)	65	第98図	中世の土器・陶磁器(2)・弥生時代の土器(2)	124
第46図	中世の遺構(7)	66	第99図	石器(1)	128
第47図	中世の遺構(8)	67	第100図	石器(2)	129
第48図	中世の遺構(9)	68	第101図	金属製品(1)	136
第49図	中世の遺構(10)	69	第102図	金属製品(2)	137
第50図	中世の遺構(11)	70	第103図	金属製品(3)	138
第51図	中世の遺構(12)	71	第104図	金属製品(4)	139
第52図	中世の遺構(13)	72	第105図	集落の変遷(1)	143
第53図	中世の遺構(14)	73	第106図	集落の変遷(2)	144

1 調査の経緯

1 調査に至る経過

松本市は昭和62年から和田西原地籍に臨空工業団地を造成し企業に工場用地の分譲を行ってきたが、その南隣の神林地籍約14haに平成11年度から新臨空産業団地を造成し、新たな企業誘致を図ることとなった。しかし、造成予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地「川西開田遺跡」が存在し、工事範囲内の遺跡は壊滅を免れない状況となった。そこで、松本市教育委員会は開発担当である松本市商工部と協議を進め、開発範囲内の当該遺跡に対し全面的な緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることで合意した。また、記録保存が必要な面積は非常に広大になることが予想されたので、平成10・11年の2ヵ年を現地調査にあてることとした。

平成10年度の発掘調査(第3次調査)は4月20日に現場作業を開始、平成11年1月6日に実質的な作業を終了した。大きく3地点(川西開田3A、同3B、同3C)を調査し、3月26日付けで発掘調査終了届と埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管証を提出。4月7日付けで埋蔵物の文化財認定通知を受けた。

平成11年度(第4次調査)は4月5日に作業開始、10月4日に実質的な作業を終了した。2地点を調査し(4A、4B)、平成12年1月14日付けで発掘調査終了届と埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管証を提出。1月31日付けで埋蔵物の文化財認定通知を受けた。

整理・報告書作成作業は平成12年度(弥生時代及び古代・中世)、平成13年度(縄紋時代)の2ヵ年にわたり実施し、平成13年度に第1分冊(古代・中世編：本書)を刊行した。平成14年度に第2分冊(縄紋編)を刊行する予定である。

2 調査体制

調査団長 松本市教育長 守屋立秋(～H10.6.30) 舟田智理(H10.7.1～10.15) 竹瀬公章(H10.11.1～)

調査担当者 【10年度】 竹原 学、横山和明、村田昇司、百瀬秀俊

【11年度】 竹原 学、小山高志、赤羽裕幸、櫻井了、米久保治郎、加島泰祐

調査員 野村一寿、望月 映、松尾明恵

協力者

(発掘調査) 青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、飯島由次、飯田三男、石井脩二、市場茂男、今井太成、入山正男、白井英明、大月八十喜、加島泰祐、上條道代、神田栄次、清沢智恵、久保田登子、河野清司、小松正子、斎藤政雄、芝田とり子、清水陽子、下黒千代子、下条ちか子、鈴木幸子、鷺見昇司、高桑 望、高桑 悠、高橋登喜雄、鶴川 登、寺嶋 実、中上昇一、中西 唯、中村地香子、中村安雄、中谷高志、中山白子、林 武佐、比嘉 仁、福島 勝、二木一男、布野行雄、布山 洋、待井敏夫、真々部まさ子、丸山喜和子、三枝明廣、御子榮長寿、道浦久美子、南山久子、宮田美智子、三代沢二三恵、村山牧枝、夔 國成、百瀬二三子、百瀬義友、山崎烈友、横山 清、吉野節子、吉田 勝、米久保治郎、米山慎興、渡辺順子
(整理作業) 荒井留美子、五十嵐周子、石合英子、内沢紀代子、開嶋八重子、菊池直哉、窪田瑞恵、河野清司、竹内直美、竹平悦子、中谷高志、林 和子、廣田早和子、福島 勝、布山 洋、洞沢文江、待井敏夫、百瀬二三子

事務局 教育委員会文化課 木下雅文(文化課長、～H13.3.31)、有賀一誠(同、H13.4.1～)、熊谷康治(課長補佐)、村田正幸(文化財担当係長、～H11.3.31)、松井敬治(課長補佐、H11.4.1～)、直井雅尚(主査)、久保田剛(主任)、近藤 潔(主事、～H11.3.31)武井義正(主任、H11.4.1～)、酒井(上條)まゆみ(嘱託、～H12.6.30)、渡邊陽子(同、H12.7.1～)



第1図 調査地の位置と周辺遺跡

II 調査地と遺跡の環境

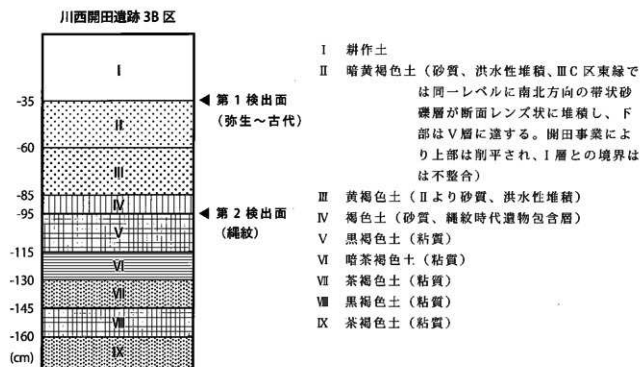
1 調査地の位置 (第1図)

本調査地は松本市大字神林字竹田道6172 - 1地に位置する。標高は644 ~ 649m、北北東に緩やかに傾く沖積堆積層面にあり、平均傾斜は10.8/1,000を示す。一帯は松本市の南西部、神林・今井地区と東筑摩郡山形村が境を接する鎮川西岸域にあたり、近年まで桑園や松林が広がっていた。この地域が現在のような整然と区割りされた水田・畑地帯となったのは昭和30年代以降の開田事業によるもので、少なくとも近世以降大規模な耕地開発が行われたり、集落が営まれた形跡はほとんど窺えない。地名にみても古くまで遡る、耕地や建物などの土地利用を示す字名が残されていないことがそれを裏付けている。この地の開発や居住が進まなかった理由のひとつには季節風などの厳しい気候風土と水利の問題が考えられる。

2 遺跡の地形・地質 (第2図)

鎮川の西岸、三間沢川下流域は両河川による扇状地と梓川系統の扇状地の接点にあたり、その境界を三間沢川が流下している。三間沢川と鎮川の間には鎮川による沖積低地が広がっており、その堆積層は粘土やシルトが整然とした互層をなしている。これに縄紋時代後期以降と推定される鎮川起因の氾濫性の砂泥や礫が覆い、鎮川寄りでもより厚く堆積している。また、かつての鎮川や三間沢川の旧流によると思われる大小の河川跡が幾筋も観察され、開田以前は窪地と微高地の連続する地形であったらしい。

一方、こうした沖積低地が形成される以前の、ローム層に覆われた後期更新世の扇状地(台地)の広がり、三間沢川より北では三間沢川左岸遺跡を東限とし、南では境塞遺跡の西から南側で沖積層中に没している。また、それ以南では鎮川による明瞭な河岸段丘をもって区切られ、上流に向かうほど沖積低地が幅を減じ、段丘崖も発達する。



第2図 土層柱状図

発掘調査の結果から本遺跡一帯の三間沢川右岸下流域の地形変遷を考えると、元来は鎖川とその支流である三間沢川の影響を常に受けやすい低地地形だが、縄紋時代中期ないし後期の前葉頃までは砂質土や粘質土が徐々に水平堆積を繰り返し、黒色の間層を数枚挟む比較的安定した離水域であった状況が窺える。しかし、縄紋時代後期前葉以降には鎖川の活動が活発化し、氾濫による堆積や浸食の影響を強く受け、網状の自然流が幾筋も形成された。弥生時代に入ると西岸側への大規模な氾濫は落ち着き、自然流路に挟まれた微高地上では再び安定した地表が形成される。平安時代以降、鎖川や三間沢川の位置は次第に現在の位置に固定され、これらから発する網状流も埋没が進んだと推定された。また、鎖川により近い地点では近年に至るまで氾濫の影響を絶えず受け、その堆積物に厚く覆われている。

3 遺跡の歴史的環境と周辺遺跡 (第1図)

(1) 過去の調査等

鎖川西岸域における考古学的調査は市街地に比して大きく立ち遅れ、昭和30年代の開田工事や製瓦用粘土の採掘の際の出土遺物などから遺跡の存在が知られるにとどまっていた。昭和32年には三間沢川左岸遺跡とその東隣の神林川西遺跡の境界付近で瀬戸美濃産鉄釉茶入れと孔雀文壺(昭和34年国重文指定・日本民俗資料館蔵)が出土している。しかし、昭和62・63年の臨空工業団地造成事業に伴う三間沢川左岸遺跡の調査を皮切りに大規模な調査が始まり、平成7・8年の神林再々場整備事業で川西開田遺跡の第1次・2次調査と境窪遺跡の第1次調査が、また平成10・11年には本報告の川西開田遺跡第3・4次調査、同じく平成11年には泉宮三間沢川河川改修事業により松本市側で川西開田遺跡第5次調査と三間沢川左岸遺跡第3次調査、山形村側で境窪遺跡第2次調査が行われた。これらの調査により縄紋時代から中世に至る営みの変遷が辿れる、遺跡の稠密地帯であることが判明しつつある。

(2) 縄紋・弥生時代

川西開田遺跡の周辺で旧石器時代に遡る遺物は、今井地区の上新田遺跡から尖頭器、古池原遺跡からナイフ形石器、山形村の三夜塚遺跡で局部磨製石斧が発見されている。

縄紋時代の遺構・遺物が発見されている遺跡・調査としては、今回調査(川西開田遺跡3・4次調査)の他に平成7年の境窪遺跡1次調査(後期土器)、同年の川西開田遺跡1次調査(中期後葉の埋甕を伴う住居址)、翌年の同2次調査(後期畑之内Ⅰ式土器と石器の遺物集中)、昭和62年の和田西原南遺跡(中期中葉の堅穴住居址1軒)を挙げることができる。山形村では昭和55・56年と平成13年に発掘調査が行われ、中期の遺構遺物を大量に検出した三夜塚遺跡が知られる。

弥生時代は前記の境窪遺跡1次調査で中期前葉の住居址・建物址計30棟、墓址2基等とそれに伴う多量の遺物が出土している。また、平成11年に行われた境窪遺跡2次調査(山形村分)でも同時期の遺物集中が検出されている。しかし、これに後続する遺跡は発見されておらず、中期後半から後期全般にかけて空白の時期となっている。

(3) 古代・中世

古墳時代の遺構・遺物はきわめて希薄で、川西開田遺跡1次調査で平安時代の遺構中から前期の土器がまとまって出土しているのみである。近在に小規模な該期集落がある可能性を認めたい。

奈良時代の遺構・遺物は認められないが、平安時代になると三間沢川左岸遺跡の1・2次調査で計257軒の9世紀から10世紀代の住居址が検出され、川西開田遺跡の1・2次調査でも同時期の住居址16軒が発見されている。それに今回調査の78軒を加えると、この2遺跡だけで350軒を超える住居址が存在したことになり、9

～10世紀代に本遺跡一帯に極端な居住の集中、すなわち大規模な開発が行われたことがわかる。

(4)近世以降

近世以降は、調査時には遺構・遺物は発見されていないが、文書資料等から調査地点周辺の歴史について概観してみたい。

江戸時代に入るとこの地区は鎖川の西、三間沢川を挟んで水代(溝代)村、その北に南和田村、鎖川の東側が上神林村と分かれていた。集落は別の地域にあり、遺跡周辺の土地は畑地あるいは山林地として利用されたと思われる。ともに松本藩領内であったが、元和3年(1617)、高遠藩主保科正光に和田郷の5千石分が増され、後の南和田村にあたる地域は高遠藩領となる。寛永13年(1636)に「和田八か村庄屋」の記述があり、このころ和田郷が和田八村に分化したと推定できる。元禄2年(1689)、高遠藩主鳥居忠則が改易されるとそのまま5千石分は幕府領となった。正徳3年(1713)から享保10年(1725)までは幕府と笹部水野氏との相給(共同の領地)であったが、それ以後は幕府領和田組として明治維新に至る。また、水代村・上神林村も享保12年(1725)に水野氏が改易になった際、下神林村の一部とともに幕府領となり、戸田氏が松本藩に入封した後の寛保3年(1743)、松本藩預地とされてそのまま明治を迎えた。

南和田村、水代村は梓川と鎖川に挟まれた地域に位置していたが、水利には恵まれていなかった。鎖川・三間沢川は水面の標高が低いため利用できず、梓川から引いた神林堰が唯一の水源であった。神林堰は現在の波田町字上赤松を揚水口として和田、神林地区の村々の農業・生活用水として使われ、一説には12世紀に成立したとも言われる。波田町三溝の分岐点から和田へ流れる方を大井堰(のち和田堰)、神林へ流れる方を神林堰と呼んだ。神林堰はさらに和田太子堂の辻堂で上横切・下横切に分かれ、下横切は北東へ向かって梶海渡・寺家・下神の用水となり、上横切は鎖川を南東方面に渡って川西・川東・南荒井などの用水となった。鎖川を渡す際は牛枠と呼ばれる仮堤防を使って河原の中を通したという。これらの堰によって和田、神林でも一応水田耕作が可能になった。また、この地域は地下水位が低く井戸の設置が困難で、堰は生活用水としての機能も兼ねていた。

和田・神林堰は梓川に対し、水揚ノ口と呼ばれる本流締切の絶対権を持つ等、他の取水口に比して優遇されたが、それでも漏水を避けることはできなかった。特に上横切は堰の末流であったため水勢が弱く、慢性的な水不足で水争いが頻発した。また、神林堰以西で現在の西原開田、川西開田にあたる地域は、鎖川によるたび重なる氾濫で砂礫地化しており水田耕作には適さず、畑作が行われていた。

水代村には浄土宗三神山専称寺があったと言われている。専称寺は永禄元(1558)年に幸譽上人によって開かれたという伝承があり、大水害に遭って移転し、現在は新村に位置する。寺が創建されたとする場所は小坂道の字寺畑地籍で、神林開田の際に無傷の鬼瓦や布目瓦が出土し、寺の存在を裏付けた。またこの地籍の北隣からは3.5cmの観音像も出土している。

明治維新、廃藩置県を経て明治7年、水代村・上神林村を含む神林4村は合併して神林村となり、南和田村を含む和田八村も合併して和田村となった。

明治に入っても水田地帯は和田・神林堰以東までで、山形村近くの西側は「くろべ」と呼ばれ、黒味を帯びた腐植土が広がっており、桑を中心とした畑作が行われていた。川西区では1町～1町5反くらいが平均的な耕地面積だったという。養蚕業はさかんで、旧水代村に住む筒井浜十郎は明治36年7月の、松本平「夏秋蚕種製造人百家選」に名が挙がっている。

明治24年、南和田区委員10人が神林川(堰)西辺へ新堰を開き、およそ4町歩の開田をしたいと申し出、明治34年に完成した南和田開田などの開発はあったが、堰による農業用水の供給は通常でも不足がちであったため、大規模な開田事業は不可能であった。明治の中頃には山形村内に溜池を作り、鎖川を渡して中の島

へ引水する計画もあったが実現しなかった。既設の水田にしても地主は別地区の者、という場合が多く、さらに額川による水害が頻繁にあり、村の暮らしは楽ではなかったという。

太平洋戦争が始まると食料増産への動きが活発化し、昭和16年に竣工された南水寺開田をきっかけとして、昭和17年には神林押込・山の神を中心とする地域で神林村川西開田工事が始まった。農業用水は和田太子堂にあった筒井製材の脇で神林堰からポンプを使って上げた。エア抜き等技術的な部分で失敗を繰り返しながらも昭和18年、14町歩の新田が開かれた。

戦後もこの地域では桑・とうもろこし・大豆などの畑作が中心だったが、しばしば干害に襲われ、また、昭和33年から藪価格が暴落したこともあって、開田事業への期待は高まった。昭和33年8月に神林開発委員会が設立され、34年には開田組合となり、35年4月に土地改良区を設定し、認可された。水利権の問題から、主に神林堰下流域を中心とする反対の声も強かったが、揚水技術の発達により既設田の余水で新田開発は可能として昭和34年から約147.5haの神林開田工事が行われ、37年8月、最終的に完成した。既設田の最上流にある神林川の水門脇に揚水機を設置し、開田地帯まで1,500m余の送水管で送水し、10a区画に整理した水田の支線水路へ張りめぐらせた。和田でも昭和35年から38年まで西原開田工事をを行い、160ヘクタールの水田を開いて10a区画に整備した。

新開田地域はポンプによる揚水で耕作していたが、さらに充分な農業用水を補うためには自然流下水による水源転換が必要と判断され、神林・和田・西原・川西・太子堂南水寺の各開田合計360ヘクタール分用の新堰を作ることとなった。この堰は新和田神林堰と呼ばれ、梓川右岸幹線の波田町押出を起点として西原開田の幹線と並び流下し、神林川田の吐出まで6,253.9mを通すものだった。途中三間沢川はサイフォンを使って横断した。工事は昭和43年に着工し、総経費3億1,630万円で昭和47年3月に完成した。

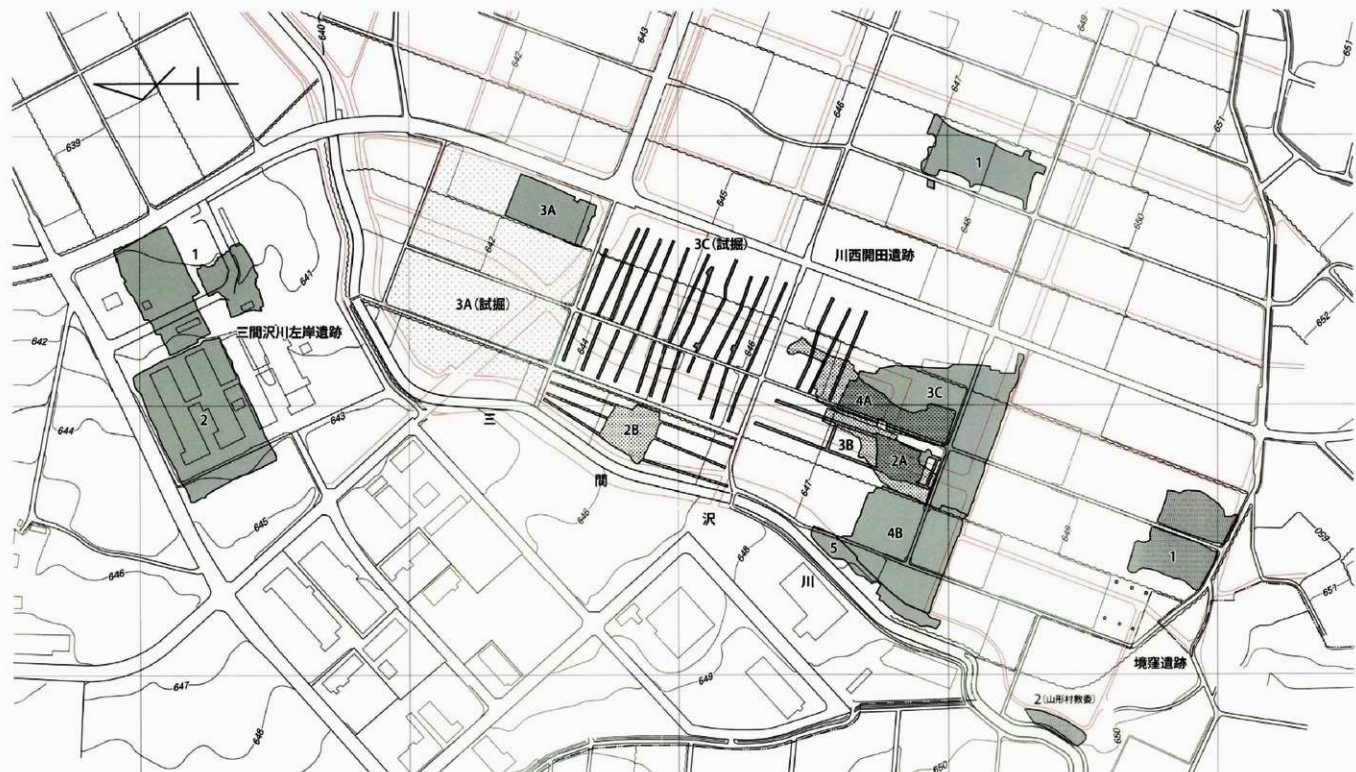
近代以降も生活用水は和田・神林堰に依存していたが、戦後になると衛生面などから、上水道敷設が求められるようになった。そこで和田・神林・新村の三か村が協力しての水道敷設事業が計画され、神林川西で掘られた深井を水源地として、毎日約3,000m³の水を確保することとなった。昭和30年に工事が起工、三期にわたる工事を経て昭和31年に完成した。その後、松本市の人口増加に伴ってさらなる水道拡張事業が計画され、再び川西地区に昭和45年から深さ110mの深井戸が2本掘られ、毎日約6,000m³の水源が新たに確保されるようになった。

昭和57年、松本市工業系市街化区域として松本空港より北西の和田・神林地籍の100haを設定するという計画が持ち上がった。県外から付加価値の高い工業の立地誘導による工業力の拡大をはかるものだった。神林地籍の同意を得ることができなかつたため、西原土地改良区を中心とする約60haの土地で昭和62年、松本臨空工業団地として分譲が開始され、全企業の操業にはいった。

昭和57年から神林地区の果實土地総合整備事業の竣工が開始された。このうち旧川西開田(戦時中の開田分)を中心とする川西区の旧字名目間沢南・山の神・押込・夏目畑14.4haは第14工区とされ、昭和63年に竣工し、新字名は目間沢南・山の神として平成5年に完成した。

参考文献

- 1 郷土誌「かんばやし」刊行委員会 1986 「かんばやし」
- 2 松本市和田地区歴史資料編纂会 1995 「和田の歴史」
- 3 松本市 1994 「松本市史 第4巻 旧市町村篇Ⅱ」
- 4 松本市 1994 「松本市史 第4巻 旧市町村篇Ⅲ」
- 5 松本市市民俗部門編集委員会・松本市史編さん室 1994 「松本市市民俗編 調査報告書 第3集—神林を中心として—」
- 6 長野県土地改良史編集委員会・編 1999 「長野県土地改良史 第2巻 土地改良区誌篇」
- 7 松本市土地改良区竣工記念誌編纂委員会 1995 「竣工記念誌 —神林川土地改良区—」
- 8 筒井慶太郎 1995 「郷土を語る」
- 9 山形村教育委員会2001 「塊窪遺跡Ⅱ-三間沢川河川改修工事に伴う緊急発掘調査報告書—」
- 10 竹原学 2000 「三間沢川下流の原始・古代・中世—地形の変化と集落—」『松本市史研究』第10号
- 11 松本市教育委員会 1988 「三間沢川左岸遺跡(Ⅰ)平安時代集落址の緊急発掘調査概報」
- 12 松本市教育委員会 1998 「松本市文化財調査報告No.130 塊窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ—緊急発掘調査報告書—」



第3図 調査区の配置

II 調査の概要

1 調査次・調査地点と調査方法 (第3図)

平成10年度の調査を第3次調査(調査時の標記はⅢ)、11年度を第4次調査(同Ⅳ)とした。いずれも、上層は弥生時代以降の遺構検出面となるが、ベースとなる黄褐色シルトの下には縄紋時代の生活面が広がり、同一位置でも上下2層の調査を行った場合は、それぞれ別の調査地点名を付した。

第3次調査にはA～Cの3地点があり、それぞれ3A、3B、3Cと呼称した。3Aは今次最も北よりの地点で平安時代の溝状遺構を確認、3Cは2A地点(平成8年度調査、松本市文化財報告№130)の隣接地で弥生～中世面、3Bは2Aの下層で縄紋時代面である。第4次調査にはA・Bの2地点があり4A・4Bとした。4Aは3C下部の縄紋面である。4Bは3B・3Cに西接する平安～中世の面で、下層に縄紋の生活面は見られない。

2 調査方法

調査手順は、まず大形建設機械で遺構検出面までの耕土・基盤土を除去、人力で遺構検出を行い遺構の位置や範囲を確定した。遺構を掘り下げ、土層図を作成するとともに、遺物等の出土状況と完掘後を平面図と写真で記録した。また、調査地点ごとに作業終了の時点で航空写真撮影を行った。測量作業は、第2次調査時に任意に設けた基準点(NS0・EW0)から真北に振り出した基線により設定した3m方眼のグリッドですべての調査地点を共通の座標で覆って、オフセット測量を実施した。遺構番号は基本的に2次調査に連続させたが、地点や時代がかわった場合、区切りの良い数字から始めているものもある。

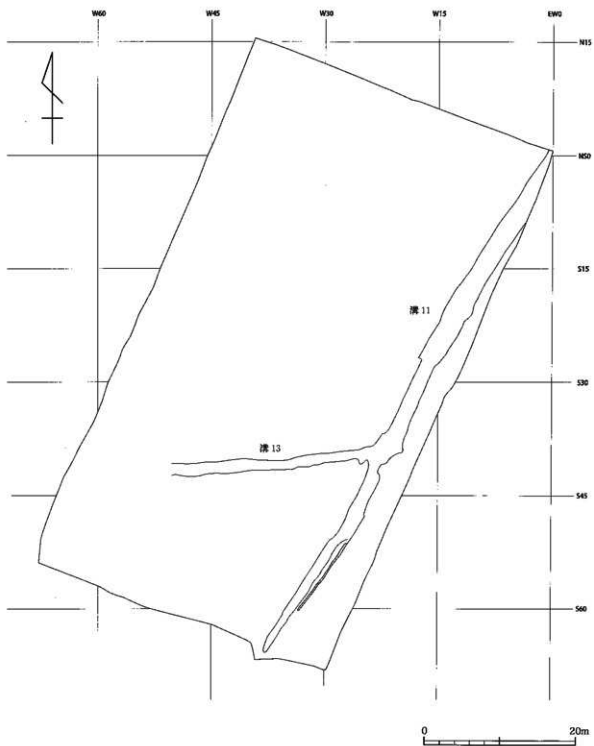
なお、本書は「古代中世編」として古代・中世及び少数検出された弥生時代の遺構と遺物を対象としたため、当該時期が主体であった3A・3C・4B地点について扱っている。3A・3B・4A地点の詳細は別冊の「縄紋編」を参照されたい。

3 調査結果の概要 (第1表・第5～10図)

3・4次調査の概要については下表の通りである。

第1表 調査概要

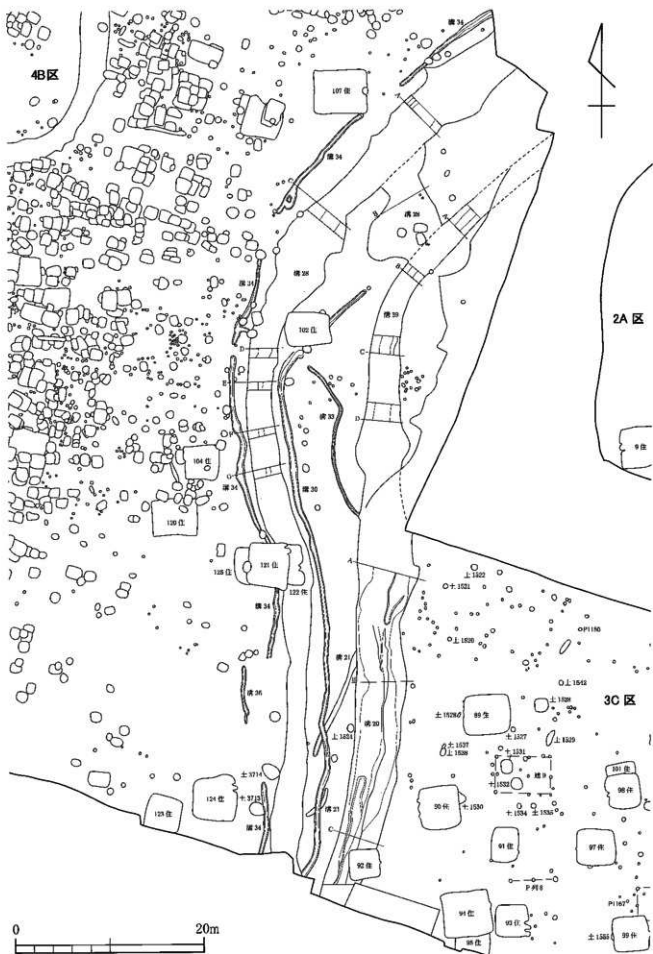
編号	調査期間	面積	発見した遺構	出土した遺物
3A	10.4.20 ～ 10.6.5	(㎡) 15,300	平安：溝2	縄紋：土器、石器 平安：土器・陶器(土師器・須恵器・灰釉陶器)
3B	10.6.10～ 10.8.31	3,960	縄紋：竪穴住居址、土坑 ※詳細は「縄紋編」参照	縄紋：土器、石器 ※詳細は「縄紋編」参照
3C	10.9.5～ 11.1.6	13,300	弥生：土坑 平安：竪穴住居址69、土坑316、掘建 柱建物址15、ビット列17、ビット 1422、溝10 中世：土坑1	縄紋：石器 弥生：土器、石器 平安：土器・陶磁器(土師器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器)、鉄器(刀子・鋸先・釘・鏝)、 銅製品(飾金具・銅板・金銅製品)、石 製品・石器(巡方・磁石・礫石錘)、鉄滓、 獣骨、炭化材 中世：土器、銭貨
4A	11.4.5～ 11.6.19	5,250	縄紋：竪穴住居址、土坑 ※詳細は「縄紋編」参照	縄紋：土器、石器 ※詳細は「縄紋編」参照
4B (5倉)	11.6.20～ 11.10.4	9,600	平安：竪穴住居址10、溝6 中世：土坑1762、ビット572	平安：土器・陶器(土師器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器)、銅製品 中世：土器・陶磁器(土師質土器・瀬戸美濃系 陶器・青磁・白磁・香白磁・内耳土器)、 鉄器(釘)、銅製品(銭貨・刀筭具)、石 器(磁石・石臼)、木製品(漆碗)、骨、 炭化材、炭化種子
計		47,410		



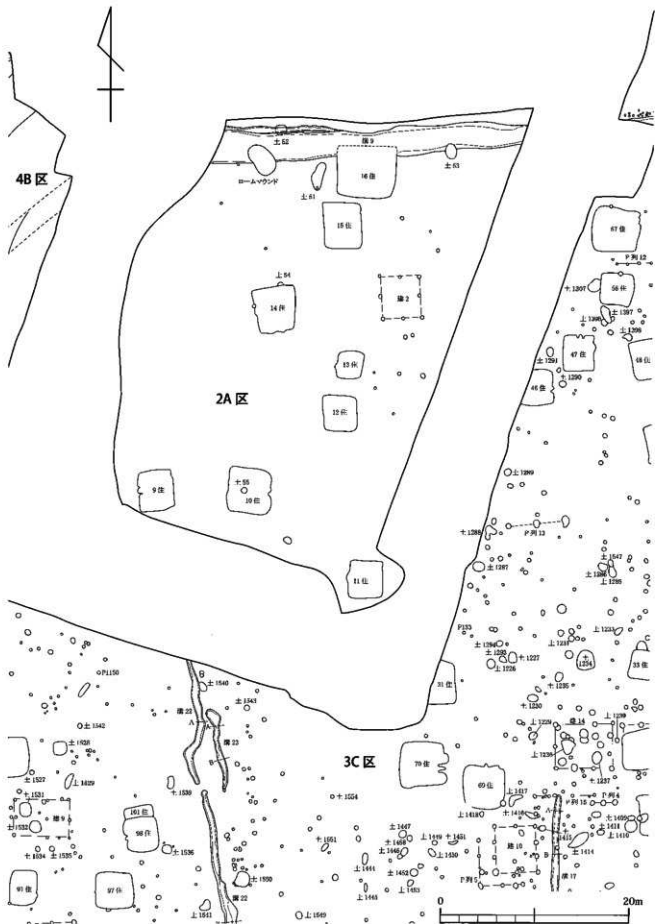
第4図 A区全体図



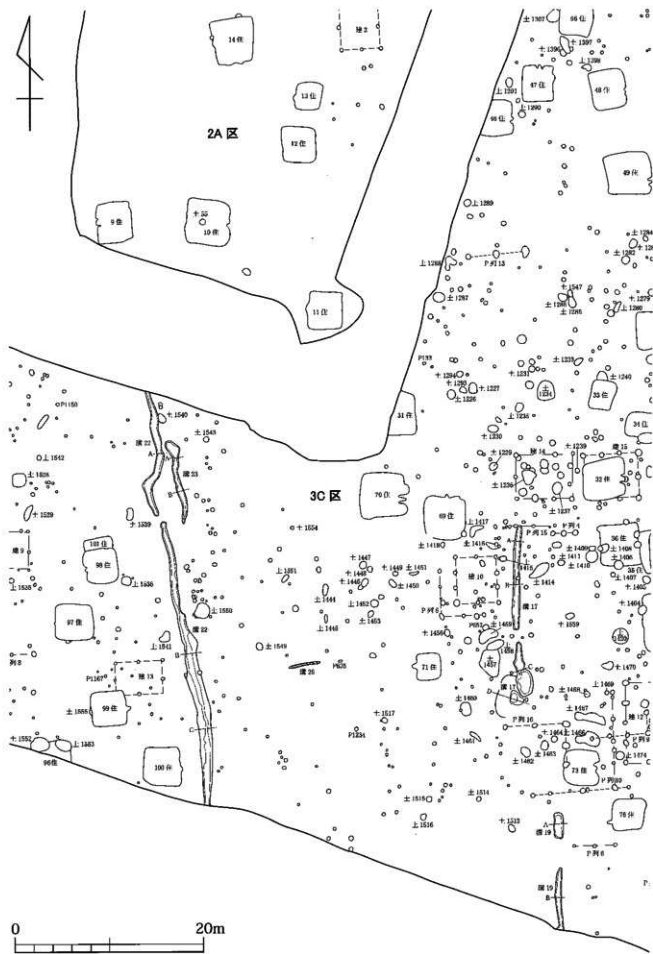
第5図 3C・48区全体図



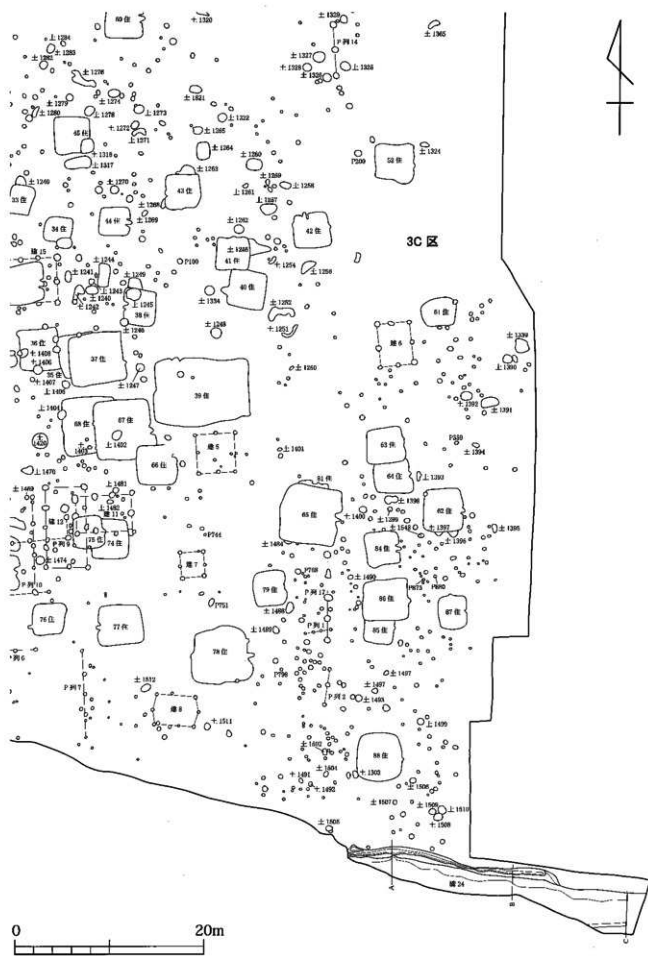
第6図 3C区遺構配置図(1)



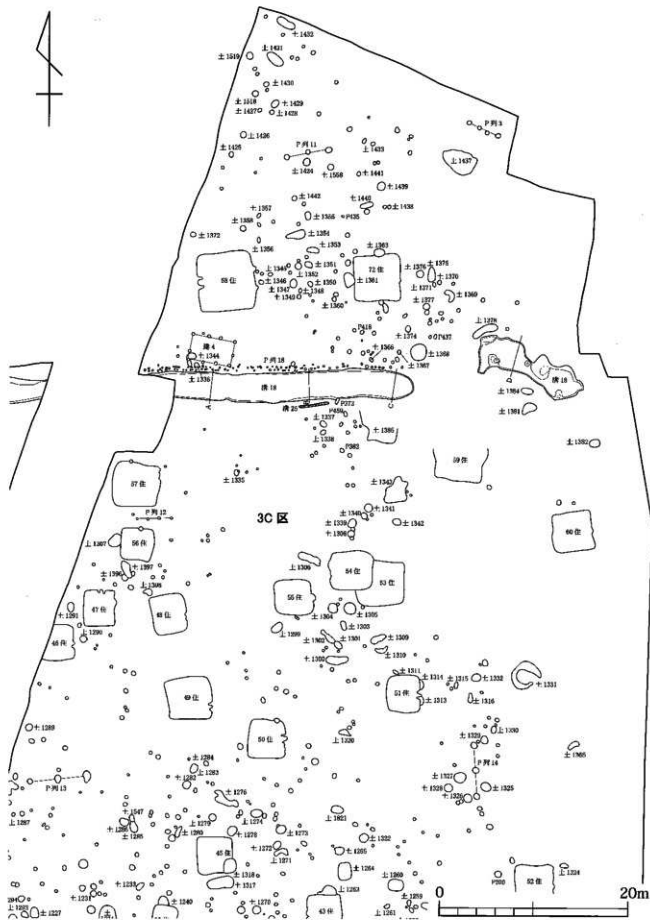
第7図 3C区遺構配置図(2)



第8図 3C区遺構配置図(3)



第9図 3C区遺構配置図(4)



第10図 3C区遺構配置図(5)

IV 発見された遺構

1 弥生時代の遺構 (第11図)

弥生時代の遺構は、3C地区からのみ発見されている。遺構の種別は土坑のみで、26基が確認された。これらは弥生土器や石器が出土することで峻別されたが、形態や覆土の特徴から古代の遺構と明確に区別することはできない。遺構は3C区中央部に散在して分布し、その検出面は平安時代の遺構と同じ黄褐色土層面である。土坑の平面形は、楕円形あるいは不整形円形が多く、その規模は、長径0.5～2.7m、短径0.5～1.85mのものが主体である。不整形形態を呈する土1354・1378等はいわゆるロームマウンドと考えられる。遺物は覆土中から弥生土器片、石器類が出土している。時期的には中期前半に帰属し、南接して位置する境窟遺跡の集落址と同時期のものである。今回発見された土坑群は、集落の中心部からは大きく北に偏るものの、その一部を構成する遺構群と捉えられる。

2 平安時代の遺構

平安時代の遺構は、3C区の全域と4B区の溝28から東側にかけて分布がみられる。発見された遺構の種別は、竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑・ピット・溝である。以下、遺構の種別ごとに分布と特徴を記述する。各遺構の詳細なデータは一覧表に譲り、ここでは種別ごと、時期ごとに遺構を概観することとしたい。なお、竪穴住居址・掘立柱建物址の分類については文献1に従った。

(1) 竪穴住居址 (第2表・第12～29図)

竪穴住居址は、3C区68軒、4B区8軒の合計76軒発見された。

ア 分布状況

住居址の分布は溝との位置的関係が強く、4B区の溝28を西限としている。また、北限は1次調査区から3C区にまたがる溝18(1次溝9)である。南限は調査区の外にあるため状況は不明だが、3C区南東隅でみつかった溝24であると考えられる。住居址の分布も調査区南端部では希薄であり、それを示している。分布域の東限は、調査範囲に溝はみあたらないものの、遺構の分布状況や試掘の所見からみて、ほぼ調査区の東縁と考えて大過ないと考えられる。この東縁部では住居址の分布が途切れるのと対応して、地山も礫層に移行している。

このように、3方向を溝で画された範囲に住居址群が分布する傾向をうかがうことができるが、一方でこれらの溝を切る、あるいは溝より外側に存する住居址も少数ながら存在しており、集落の継続期間のすべてにわたって溝がその領域を規定していたわけではなさそうである。しかしながら住居址と溝は全く無関係に分布する傾向はみられず、空間としての認識が常に存在したものと考えられる。

イ 形態と規模

今回検出された住居址の平面形はすべて当該期に特有の方形基調のものである。そのうち全形の判明する72棟についてみると、78%を占める56棟が方形で、残りの16棟が長方形(長辺/短辺が1.1以上)である。さらに前者には隅丸のもの(30棟)とそうでないものがある。また後者には長辺より長く、短辺の1.15倍以上となるものが11棟存在する(39住等)。

次に平面規模について。当該期の住居址の規模について、文献1では一辺3m程度の小型、4m強の中型1類、5m程度の中型2類、6m程の大型1類、6.5～7m程の大型2類、8mを超える超大型に分類されているが、今回

調査した住居址群についても同様な傾向が窺え、各規模のものが存在する。規模の判明する71棟の構成は、小型(床面積5.5～6.4㎡)：4棟(5.6%)、中型1類(8～12.4㎡)：23棟(32.4%)、中型2類(11.4～19.2㎡)：31棟(43.7%)、大型1類(17.8～27.8㎡)：7棟(9.9%)、大型2類(25.7～34.3㎡)：5棟(7%)、超大型(55㎡)：1棟(1.5%)となっている。このうち小型は7・8期にのみみられ、唯一超大型に属する39住は10～11期の所産である。長辺が10m・床面積55㎡と群を抜き、その平面形も特異である。

ウ カマドと柱穴

今回検出された住居址の大半には屋内施設としてカマドがみられた。また、必ずしも十分な追求ができなかったが、柱穴は有するものとそうでないものが存在した。

カマドを有さないものはその有無が明らかな71棟のうち、わずか2棟(1.4%)に過ぎず、いずれも7・8期の所産である(33・36住)。

カマドの構造は大半が平安時代に通有の石組カマドで、煙道が短く立ち上がるものである。これに少数だが、7・8期に属する住居址に焼室が壁外に張り出すものや粘土土袖のものがある(40・56・65・71住)。また、カマドは廃絶時の破壊や崩壊・削平により天井部が完存するものは皆無であるが、煙道側の石材のみ残すものが少数ある(32・42・44・55・62・64・78・88・93・99・122住)。このうち78住では土師器甕の大型破片を構築材に併用している。天井のほか側壁もすべて失い、火床面のみ残存しているカマドも多い。住居の改築・拡張等に際し位置を変えてカマドを再構築しているものもある(48・49・57・74住)。

カマドの方向は北壁に設置され焚口が南に向くもの、西壁で東を向くもの、東壁で西を向くものがある。その構成が確認できた69棟の内訳は、北壁6棟(8.7%)、西壁20棟(29%)、東壁43棟(62.3%)である。次に壁上のどの位置にあるかをみると、各壁の中央にあるものが7割を超し、50棟(北壁5棟・西壁14棟・東壁31棟)を数える。残る19棟は端に寄るもので、北壁のカマドは西寄りのみみられ、それ東西壁のカマドは北寄りと南寄りの両者が半々で存在する。カマドの方向と位置について、时期的な傾向はあまり顕著ではないが、位置が隅に寄るものは時期が下ると多くなる傾向が窺える。

柱穴を有する住居址は少数で、有無を確認できる73棟のうち、確実なものは12棟(16.4%)に過ぎない(37・39・58・65・66・67・70・72・89・90・94・98住)。时期的には9期以降のものが10棟と大半を占めている。住居址の規模との関係は、小型には該当がなく、7棟は大型に属するものである。

柱配置は4本主柱を基本とし、2本柱穴と見られるものが1棟存在する(98住)。主柱穴の配列は方形ないし長方形で、その配置は四隅に小柱穴が配されるもの(65・72・89住)、カマド側またはその反対側、あるいはカマドと直交するどちらかの壁に2本が接するよう、プランの中心からはオフセットされるものがある(37・39・58・66・67・70・90・94住)。この場合、床面にさらに2本の補助柱穴が伴うものがある(39・58・67住)。

エ 覆土と遺物出土状況

各住居址の覆土は単一層である場合が多く、時に大小の土塊を含む。また、中下層に礫が集中的に伴う例があり(37・39・42・65・73住等)、その分布状況がカマド～床面中央に偏在し、時に集石と呼べるほどに集中する場合もある(39・73住等)。これらの状況から考えて、住居の廃絶後、人為的な礫の投棄と埋め立てが行われた場合が多いのではないかと考えられる。この礫の中には熱を受けカマドの一部を構成していたとみられるものもあり、意図的に破壊され床面に廃棄されたような状況を呈していた(65住)。

遺物は覆土中に土器類の破片が満遍なく含まれるが、完形あるいはそれに近い状態のものはカマド内やその周辺、壁下に偏在する傾向が窺える(39・47・65・78・121住等)。特にカマド内には土師器甕類の大破片が集積し、カマド周囲の床上や貯蔵穴様のピットには皿・杯・椀などの食器類が多く残される。これらは生

活時の姿を留めるというよりむしろカマド廃絶時における祭祀行為等の結果とみられる

オ カマド・柱穴以外の屋内施設

カマドや柱穴以外の屋内施設として普遍的なものはないが、遺構によってはカマド脇に貯蔵穴様の楕円形の大型ピットや張り出し部を伴うもの(39・42・46・47・51・54・58・70・76～78・89・90・93・94・98・99・102・104・107・旧120・121・124住)、性格は不明だが壁に挟り込みを有するもの(78住)、壁溝や床間に間仕切り状の溝を伴うもの(37・42・43・46・47・49・50・53・57・58・65・66・70・72・77・85・86・89・93・94・97・100住)等がある。また、覆土～床面より鉄滓が出土する遺構が39棟あり、特に37住からは15点計1,722gも得られているが、特に鍛冶遺構と呼べるような施設は見当たらない。

カ 住居の類型と時期別分布

出土遺物、他遺構との重複関係から概ね帰属時期がわかる遺構は76軒ある。これらの時期別内訳は7～8期38軒、9～10期21軒、11期～12期15軒、13期以降2軒である。確実に7期より古い遺構は見出されない。また、15期まで下るものも同様にみられない。時期的な分布傾向から集落の中心となる時期は7・8期ととらえられる。

文献1では上述ア～ウの傾向に基づき、住居の類型化が行われている。本遺跡の検出遺構についてもそれに当てはめて時期的な住居の分布を概観する。

ア) 7～8期(9c後半)

33～36・40・44～47・53～56・60・64・65・67・68・71・73・74・75・78・79・81・84～86・93・95・99・104・120旧・120新・121～123・125住の38棟が該当する。

A群(カマドが存在しないもの)2棟(33・36住)、B群(方・長方形プランでカマド・支柱穴をもつもの)2棟(65・67住)、D群(方・長方形プランでカマドを有し支柱穴をもたないもの)25棟(40・44～47・53～56・60・64・68・71・73～75・78・79・84～86・95・99・104・122・123住)、E群(住居の隅にカマドを有し支柱穴をもたないもの)5棟(34・93・旧120・新120・121住)がある。B群の2棟はいずれも大型2類の方形住居である。

イ) 9～10期(10c初頭～中葉)

31・32・37・38・48～50・58・59・63・69・70・72・76・90・91・96・97・98・100・101住の21棟がある。B群6棟(37・58・70・72・90・98住)、D群11棟(31・32・38・48・50・63・69・76・96・97・100住)、E群2棟(49・91住)がある。B群はいずれも方形で大型1・2類を主体に中型1・2類2棟が加わる。

ウ) 11～12期(10c後葉～11c前葉)

39・41～43・51・52・62・66・77・87～89・94・102・124住の15棟が該当する。B類4棟(39・66・89・94住)、D類9棟(41・43・51・52・62・77・87・88・102住)、E類2棟(42・124住)がある。B群は超大型の39住に加え、中型2類・大型1類で構成される。D類のうち77・87・102住の3棟は長方形2類である。

エ) 13期以降(11c中葉以降)

57・61住の2棟が該当する。長方形2類でA群の61住と方形・D群の57住がある。

(2) 掘立柱建物址 (第3表・第30～32図)

掘立柱建物址は、3C区から12棟が検出された。形態は3間×2間の側柱式建物、2間×2間の側柱式建物、2間×1間の側柱式建物、その他の形態が見られ、それぞれ7棟、4棟、1棟、1棟を数える。

掘立柱建物址の主体をなす3間×2間の側柱式建物は建4・10～12・14・15が該当する。

その形態・規模は桁行3間(5.7～6.4m)×梁間2間(4～4.6m)、面積23.4～27.6㎡、梁：桁=1：1.3～1.5の長方形が主体的に存在し、建12は北側に庇を有している。これらに加えて、狭長で小型の建4、方形やや小型の建10が加わる。柱穴はいずれも円形基調で、大半が直径50～80cmであるのに対し建4のみ40cm以下と小さい。建物の長軸方向は建14・15が東西、他は南北にほぼ正確に向くが、建4のみ軸方位が他とずれている。また、これらの分布域も建4を除き3B区の南部、32住・69住・73住・74住を結んだ範囲に集中する傾向が明確に窺える。

2間×2間の側柱式建物は建5・6・9・13が該当する。このうち建9は東側に2間×2間の張り出し部ないしは庇を有している。形態的には桁行2間(4～5m)×梁間2間(3.5～4m)、主屋部分の面積15.5～17.3㎡、梁：桁=1：1.3以上の長方形プランとなるものは建13のみである。規模的には3間×2間建物の3分の2程度といえる。柱穴の規模・平面形は3間×2間建物と同様である。分布は3間×2間建物とは重複することなく、東側に2棟、西側にやや離れて2棟が存在している。

2間×1間の側柱式建物は建7が該当する。非常に小形で、その位置は3間×2間建物の東にあたる。

その他の形態としては建8がある。この遺構は2間×2間の長方形側柱形態だが、桁・梁の中間の柱穴が外側に配置され、一直線とならないものである。

これらの掘立柱建物址の帰属時期は直接的な出土遺物が少ないため明確に示すことはできないが、住居址との重複関係等を考慮すると、7～8期に並行するものがほとんどではないかと考えられる。一般的に松本平では9期以降に下る掘立柱建物址については確実な例が少なく、その様相は判然としていない。

(3) ビット列 (第4表・第33～35図)

3C区にのみ見られ、主として南半部に集中している。調査時に柱穴列としたものに加え、柱穴と呼ぶには浅いものながら、直線的に配列するものも積極的に捉え、これらをビット列として扱うこととした。

形態的には直線状のもの、L字状ないしT字状に屈折するもの、多数の小ビットが直線状に群集するものがある。前者は南北または東西に軸を振り、3B～3C地区の広い範囲に分布しつつも、3間×2間建物群付近に集中する傾向が窺える。これらの中にはビット列5のように建10に伴う柵状の付属施設があり、建12とビット列10も同様な関係と考えられる。

小ビットが群集するビット列18は溝18北縁に平行し、同遺構に付属する柵等の施設が長期間にわたり改築・改修を重ねた結果と考えられる。この溝18は2A区の溝9へと連なるものであるが、2A区ではビット列は確認されておらず、3B区西側で程なく遺構が切れるものと捉えられる。

このほか、ビット列11は浅い土坑状の掘り込み底面に複数の礫が渠石状に存していた。浅い土坑状のビット列は概して3B区中・北部に見られ、その規模も2間である場合が多い。

ビット群からの出土遺物は大変わずかで、詳細な帰属時期を決定するには至らない。

(4) 土坑・ビット (第6～9・37図)

住居址の分布域と重なって土坑316基・ビット1,422基が検出された。遺構の検出段階では両者は概ね直径50cmを境に区別した。従ってビット=柱穴とはならない。これらのうち、その後の検討により掘立柱建物址とビット列を構成するビットと捉え直したものがある。報告段階ではそのまま欠番とせず表示した。

本報告では建物址等に伴わない土坑のうち、遺物が伴うものを中心に27基を図化提示した。あまり特徴のない円ないし楕円形のものが多い。

図化したものうち、土1240は小形で浅い楕円形土坑であるが遺物を多含し、土師器杯・椀、黒色土器椀等17個体を図化提示、9期の一括資料を得た。隅丸長方形の土1260も比較的遺物が多く、土師器杯5・

灰釉陶器皿1点など10期の一括資料を得ている。土1343は不整形で大形の浅い土坑で、南東隅に礫が集積する。また北寄り底面には黒色土器A杯・皿、須恵器杯、灰釉陶器碗、土師器甕などが集中していた。7～8期の遺構と考えられる。土1406は長径1mの楕円形・すり鉢状の土坑で、底面より若干浮いて須恵器甕体部上半が逆位で据えられたように遺存していた。その内部にも同一個体の破片や墨痕のある灰釉陶器碗、土師器耳皿、穿孔のある土師器底部(耳皿か)他9～10期の土器・陶器類が数多く残されていた。

(5)溝状遺構 (第13～16・36・38・39図)

住居址、掘立柱建物址に次いで特徴的な古代の遺構である。調査後の検討で同一の遺構と判明したものもあるが、調査段階では3A区で2基、3C・4B区で15基を確認した。これらは遺構のあり方から見てすべて人為と捉えられるもので、平安時代の居住域の外縁や内部を区画する意図を有していたと考えられる。

ア 3A区

3A区における平安時代の遺構は2基の溝状遺構のみである。これらは3C区と同様、黄褐色シルト層上面で確認され、遺構の底面は下層の黒褐色粘質土層まで達する。

溝11はA区をN-31°-E方向にほぼ直線的に走る溝状遺構で、調査範囲での延長は76m、さらに南北に続く長大な溝状遺構の一部と考えられる。調査区中央部付近では西からN-86°-Eに走る溝13が合流する。これより南側では検出面を黒褐色粘質土層上面まで下げたため、上端輪郭は失っている。遺構の幅は2.6m内外を測り、断面形は整然とした逆台形を呈する。いずれも各地点で一定し強い規格性を窺わせ、さらに底面は粘土を施した形跡も見られる。底面の両側縁には小溝があり、これも溝13との合流点以南では侵食により乱れるが、おそらく意図的に設けられたものと考えられる。検出面から底面までの深さは0.5m内外で、南→北の比高は-0.5mである。覆土は底面に砂が堆積し、侵食が見られることからある時期に水流があったことが窺える。

溝13は溝11より幅の狭い遺構で、検出面での幅1.7m・深さ0.5m内外、断面形はV字状を呈する。調査区内での確認延長は27mで、西端部は製瓦用粘土採掘により失われている。

これら2基の溝状遺構は、底面から須恵器杯、軟質須恵器杯、黒色土器A杯・同碗、灰釉陶器碗、土師器小型甕、甕が出土しており、食器類は完形品も得られている。これらの遺物の様相から7期～8期頃に存した遺構と考えられる。

なお、溝11の北側の延長については調査対象範囲外となるため確認できていないが、おそらく調査区から200m程の地点で三間沢川に連していると考えられる。南側の延長については3C区にかけての試掘調査により3C・4B区方向に延びていることが確認され、4B区の溝28に接続するものと考えられる。両者はシルト質土壌により短期間に埋没している点に共通性があり、期的にもほぼ整合している。溝13は製瓦用粘土採掘によりその延長は確認できていない。

イ 3C・4B区

居住域の外縁を区画するものに溝18・20・21・24・28・30・34・39がある。溝18・20・39は調査区ごと別々に命名しているが、一連の同一遺構と捉えられる。

溝28は居住域の西縁を南北に区切る2基の溝状遺構のうち外側に存するもので、調査範囲での延長は直線で116mにわたる。その走向は大きく蛇行しながら北→北西へと向きを変えている。遺構の埋没状況および断面形は6本のトレンチ調査により概ね判明し、幅2.2～4.3m、断面形はV字状をなす。トレンチA～Gの比高は北→南へ-0.7mを測る。覆土は砂・シルトからなる水性の堆積物からなり、最終的には褐色シルトに

より短期間に埋没したと捉えられる。

なお本遺構の両側には細く浅い溝30・34がほぼ平行に走っている。これらは幅0.4～0.9m・深さ0.1～0.4mで、溝28とは0.2～2.2mの間隔をおいている。その状況から両者は同時に機能していたものと考えられる。調査区南寄りの溝36は溝34と関連する遺構とみられるが両者は接続せず、位置的にも溝34より外側に配されている。

溝20(39)は溝28の東側2～7mの位置をほぼ平行に走る。幅2.3～5.3m・深さ0.2～0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。南北の比高は北→南で0.7mである。この遺構は調査区北寄りの溝39A・Bトレンチ間で溝28に接続する溝と東北方向、2A区溝9(=3C区溝18)に続くと推定される浅く平坦な底面の溝に分岐する。これらの覆土は溝28と同様、水流性の細砂・シルトが堆積し、同じような過程を経てほぼ同時に埋没したと考えられる。両遺構の接続部は最終埋没の際に浸食を受けたためか、外形が不自然に膨らむ。

溝18は幅2.6～2.7m・深さ0.1～0.3m、2A区調査範囲までN-89°E方向に直線的に走る。また底面もほぼ水平で平坦な面をなす。東は3C区で末端となるが、さらに東にも溝状の落ち込みがあり、覆土や底面の状況から溝18の延長の可能性も考えたが平面形状は不整な弧状を呈している。先に触れたように本遺構は2A区の西で溝39に接続するものと推定される。

溝24は居住域の南を区切るものと考えられる。調査範囲の延長31.6m・幅4.2m以上、深さ0.8m内外を測る。断面形は逆台形で、覆土は黒色土が上層を覆う。溝28のような水性の堆積物はあまり見られない。溝の北縁には幅0.4～0.5m・深さ0.3m内外の小溝が並走している。遺構の確認当初は溝24の範囲として捉えたが、掘り下げの結果別の遺構であることが確認された。従って両者の間は周囲より一段低く距離も非常に狭い。これらは溝28と両脇の小溝の関係と性格的に共通するものと考えられよう。

以上の居住域を区画する溝状遺構の帰属時期であるが、溝28は重複する住居址がいずれも新しく、それらの中で最も古い121・122住が8期の遺構であるのでそれ以前と考えられる。溝20は出土物に古手の底部ヘラ切りの須恵器杯A、8期以前の黒色土器A杯がある。また溝20と28は調査区北部で接続しており、同時期に存していたものと推察される。溝24は黒色土器杯Aが出土しており、形態・技法的に見て7～8期に位置づくものである。遺構のあり方から見ても溝28等と同時期であろう。溝18は出土物がなく判然としない。2A区では溝9が9期の16住を切るかと判断しているが、この切り合い部分の溝内から出土した延喜通寶・円盤状銅製品・1対の鏝の吊金具の出土状況を再検討した結果、溝9の埋没後に構築された16住に伴うものとみなされ、溝は9期以前の遺構であったと判断される。覆土の状況等と照らし合わせた結果として、これら居住域周縁の区画を目的とした溝状遺構は大半が8期までに洪水性の堆積により短期間に埋没したものであると考察される。その構築時期はわからないが、集落の中で最も古い7期の住居址より以前まで遡る可能性も考えなければならないであろう。

次に居住域内にある溝状遺構だが、3C区の溝22・23は幅0.5～1.4m・深さ0.1～0.2mを測り、若干蛇行気味に調査区内をN-8°-W方向に貫く。覆土は暗褐色土が堆積し、水性の堆積物は見られない。居住域外縁の溝状遺構とは異なる。遺構内からは9期に帰属する土師器杯・椀、灰釉陶器椀・皿、緑釉陶器片などがまとまって出土している。溝17は溝22の東約32mにある。北側はビット列15に接して切れる。南側はビット列16の北で切れるが、この付近では溝幅が土坑状に膨らみ、他とは様相が異なっている。溝に伴う何らかの施設があった可能性がある。溝17の南には溝19がある。途中途切れているものの、両者は一連の遺構の可能性がある。両遺構共に幅0.6～0.7m・深さ0.1～0.2mを測り、一連のものと捉えたと溝22とほぼ平行になる。溝17からは土師器杯・灰釉陶器椀・緑釉陶器皿が出土しており、8期以降の遺構と考えられる。

その他の溝状遺構として幅が狭く短い溝25・26がある。溝26は溝18に関連するものと考えられる。

3 中世の遺構

中世の遺構は、明確に分布の偏りがみられ、4B区にのみ検出されている。発見された遺構は、大半が土坑で、他にピット・溝がみられる。ここでは遺構の種別ごとに概略を記述するとともに、遺構の詳細データは一覧表(『資料編』に収録)に譲った。

(1)土坑(第40～62図)

ア 分布

土坑は、総数1,749基発見されている。これらは土3345を除き、すべて墓址と考えられる。これらの分布は、すべて溝28の西側に集中している。各土坑の分布状況を見ると、単独1基のみで存在するものはほとんど見られず、3～10基以上が重複して検出されたものが大半を占める。重複した数基の土坑群が多数集まって1つのグループを形成し、そのグループが多数集まって墓域を形成しているものと考えられる。

イ 平面形態

平面形態は、隅丸長方形を呈するものが最も多く、806基みられる。以下、楕円形272基、隅丸方形237基、円形176基、長方形22基、不整隅丸長方形12基、不整形9基、方形8基、不整楕円形3基、不整長方形3基、不整隅丸方形2基、不明208基である。この結果から、平面形態では圧倒的に隅丸長方形を呈するものが多い。

ウ 種別

墓の種別は、大別して火葬墓と土坑墓に分けられる。集石墓・土坑墓がみられる。火葬墓は、掘り込まれた壁面や底面が被熱しており、覆土中から焼土や炭化材、焼骨が出土するものを分類した。これに該当するのは、土2420・土3046・土3320のみで、全体のわずか0.2%にすぎない。集石墓は、覆土中に円または亜円礫や意図的に破砕された礫が多量にみられるもので、土2364・2380・2411・2423・2710・2707・3033・3034・3038・3155・3218・3221・3228・3254・3277・3278・3585・3586・3614・3637・3653・3658・3662・3664・3678・3758・4026・4035の28基(1.6%)が該当する。これら以外は、すべて最も多くみられるのは、土坑墓で、1,718基(98.2%)を数える。

エ 遺物出土状況

土坑内から遺物が出土する例は非常に少なく、1,748基のうち252基の土坑(14.4%)しか確認されていない。残りの1,496基からは、全く出土遺物が得られなかった。出土内容のみをみると、陶磁器のみが出土した土坑は、90基、銭貨のみが出土した土坑が73基、銭と陶磁器の双方が出土した土坑は12基みられる。また、不明金属製品が出土した土坑は、89基ある。

今回の調査では、1,748基もの墓址を調査したが、墓標・五輪塔・卒塔婆などの墓の上部にあったと考えられるものの出土は一切みられなかった。

オ 時期

出土遺物等から、判明した土坑の帰属時期は、12世紀末-16世紀初頭までの長期間にわたっている。

(2)その他の土坑(第62図)

4B区の北東部に検出された土3345は墓址とは異なった様相を呈している。その形態は隅丸長方形を呈し、

南西隅が丸く張り出す。また、北壁中央には入口部と考えられる突出部が取り付く。中軸線上での規模は南北5.28m（突出部含む）×短軸3.65mである。検出面から底面までの深さは85cmで、壁は直に立ち上がる。突出部底面は緩いスロープ状を呈している。

本址の覆土中からは炭化種子や炭化柱材、炭化屋根材などが多量に出土した。炭化材はスギ材・ズギの樹皮・クリ・コナラ・ヤナギ・クルミ・カエデ・クスギがみられるが、スギ材が最も多い。炭化種子は、アワ、ソバ、オオムギ、モモ、クルミがみられる。このうちソバは、他の穀類とともに団子状になって出土した。出土遺物では、炭化材とともので漆器の小片、ロクロ成形の中世土御器、銭貨（嘉祐通寶・聖宋通寶・天聖通寶・開元通寶・その他不明数点）がみられる。また、炭化した建築材が出土していることから、建物としての上部構造が存在し、焼失して埋没したものと考えられ、堅穴建物址と捉えるべきものであろう。本址の所属時期は、年代を特定できるものが少ないため不明だが、土器類や炭化木材の放射性炭素年代測定の結果から総合的に判断して16世紀初頭、すなわち4B区の墓址群形成の終息期の遺構である可能性が高いと考えられる。

参考文献

- 1 (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1・総論編-」

第2表 竪穴住居址一覽

遺跡名	2P平面 北緯・東経	面積×高欄(㎡) 床面積(㎡)	竪穴の形状	遺構状況	備考
31	不明 N-89°-E	450×288×32 <9.1>	東壁中央 石組	西半部は土取りにより破壊される。カマドは袖の一部を残す。カマド脇に残りビットが存する。遺物は非常に少ないが竪穴陶器製の破片が出土。	10期
32	隅丸方形 N-83°-E	446×412×32 14.0	東壁中央 石組	P55に切られる。壁の立ち上がりはなだらかである。カマドは両袖を残す。遺物はカマドから北東隅にかけて多い。緑釉陶器片3点・銅鏡片・不列銅製品・釘2点・鉄滓6点が出土。	9期
33	隅丸長方形 N-11°-E	292×248×10 6.4	なし	土1240を切る。カマド、柱穴等はみられない。遺物も非常に少ない。	7～8期
34	隅丸長方形 N-92°-E	298×264×42 5.8	東壁北端	土1557に切られる。カマドは火床面を残すのみで、石材の抜き置き方と考えられる。P2が両側に存し、構築材の確が周辺に散乱。遺物はカマド周辺から少量出土、特殊なものとして鉄練土1点がある。	7～8期
35	隅丸方形 N-11°-W	448×416×28 (16.8)	不明	36住を切る。37住、P62・63・64に切られる。37住により大半を失い、カマドその他の施設は不明。遺物は少ない。鉄滓1点が出土。	8期
36	隅丸長方形 N-6°-W	460×408×40 15.9	なし	35住、土1406、P44・62・63・501・502に切られる。遺物は少ない。鉄滓2点が出土。	8期
37	方形 N-83°-E	572×562×50 27.8	東壁西寄り	35住を切る。P65に切られる。カマドは火床面および煙道の立ち上りを残す。ビットは16点が検出され、柱穴の可能性のあるものを含むが、その配置は特殊と見られる。釜土中には全体的に薄く、遺物はカマド周辺と壁面～西壁にかけて食器類が散在し、状況で多く出土。特殊なものとして黒磁土7点、緑釉陶器片・重銅11点、耳環5点、板瓦5点(火黒1点)があるほか、金属製品として円盤状の金刺製品、刀子、鍔2点、鉄滓15点がある。	9期
38	隅丸方形 N-82°-W	380×340×20 10.2	西壁中央	土1246・1246・1249に切られる。カマドは火床面および両袖の基部のみ残す。遺物は食器類を中心に多く、特殊なものとして黒書土器1点、緑釉陶器4点、不明鉄製品1点、鉄滓2点がある。	10期
39	長方形 N-6°-W	1000×720×68 55.0	北壁西端 石組	P72・358に切られる。カマドは天井部を失い、両脇に貯蔵穴と思われる大形ビットがある。柱穴は豊饒と配置され、P1・24・25・26の4基が主柱と見られる。その他、主柱間に2基、壁下に桁行5間×梁間4間で配列する副柱穴が認められる。遺物はカマド両側のビット内を中心に多数で、黒書土器2点、緑釉陶器器片、機・重銅4点、黒色綿密安山岩製灰瓦、鉄鍔、貯金鉢、鉄滓2点などの特殊遺物がみられる。	10～11期
40	隅丸方形 N-81°-W	392×388×22 13.1	西壁北寄り 狭り出し	41住に切られる。カマドは天井部を失う。遺物は少ない。	8期
41	方形 N-3°-E	362×352×20 11.0	北壁中央	40住、土1255を切る。カマドは火床面のみに残る。構築材を含むカマド前部の床下に散乱。遺物はカマド内および両端に多く、特殊なものとして黒書土器1点、鉄滓が出土。	12期
42	隅丸方形 N-7°-W	392×376×44 11.3	北壁西寄り 石組	南東隅を掘乱される。南壁下に周溝がみられる。カマドは両袖と支柱石を残す。カマド脇には基部のビットがあり、1基は西壁外に突出している。ともに埋め込まれた。遺物はカマド内と床下に多くみられるほか、南壁～西壁にかけて食器類が大量に検出されている。中央部の床面から壁土下層には埋め集まる。特殊なものとして北東隅より鉄滓が出土。	11期
43	隅丸方形 N-95°-W	380×356×36 10.1	西壁中央 石組	土1263・1268を切る。壁の立ち上がりは緩やかである。南壁下に周溝がみられる。カマドは両袖を残し、構築材と思われる石材が手前の床下に散乱する。	11期
44	方形 N-87°-E	326×300×18 8.0	東壁中央 石組	カマドは両袖を残す。天井構築材と考えられる石材が右側のP15に散乱。四隅のビットは位置的にみれば柱穴の可能性もあるが、大形のP1は貯蔵穴と捉えるのが妥当か。遺物はカマド内外から食器類、炭灰が出土。鉄製品として釘が存する。	7期
45	隅丸方形 N-90°-E	400×380×16 11.7	東壁中央	土1318に南東隅を切られる。カマドは火床面のみに残し、構築材と思われる床が床中央に散在する。遺物は非常に少ない。	7～8期
46	隅丸方形 N-89°-E	372×(348)×20 (10.5)	東壁中央 石組	区域外にかかる。北・南壁に周溝あり。カマドは火床面と袖基部のみ残す。カマド脇には貯蔵穴状の浅いビットがある。遺物はカマド周辺、ビット内を中心に食器類が少量出土。鉄製品として鍔が得られた。	8期
47	隅丸長方形 N-0°	380×336×28 10.5	北壁中央 石組	南～西壁に周溝あり。カマドは天井部を失うが、袖・支脚石が良好に残る。カマドおよび東壁下には貯蔵穴状の浅いビットがみられる。内部には遺物が多いが特殊な遺物として黒書土器1点が出土。	7期
48	隅丸方形 N-84°-E	420×372×30 11.6	東壁中央	カマドは火床面が残るのみである。床下には大形のビットが置かれて多数の存するが形状は不明。中央部の壁土下層には埋め集まる。遺物は食器類を中心に多く、特殊なものとして緑釉陶器片2点のほか、鉄滓2点、刀子2点、鉄練土1点も出土。	9期
49	隅丸方形 N-87°-E	488×456×20 18.4	東壁南端 石組	北・南壁下に周溝あり。カマドは火床面と袖基部を残す。構築材と思われる石材が手前に散乱する。また、西壁下には旧カマドと推られる火床面が残る。遺物は少ないが、黒書土器片1点、珉文のある黒色土器片1点、刀子、鉄滓が出土。	10期
50	隅丸方形 N-92°-E	415×400×36 12.6	東壁中央 石組	P26に切られる。床面、ビット4基、南東隅に周溝あり。カマドは両袖を残す。西壁寄りに円形のビット4基がある。遺物は少ない。	9期
51	隅丸方形 N-89°-E	400×356×24 11.1	東壁中央 石組	土1313・1314を切る。4壁はだらだらと立ち上がり。カマドは天井と両袖を失う。カマド左脇には貯蔵穴状のビットが存する。鉄滓2点出土。	11期
52	方形 N-90°-E	416×408×14 13.7	東壁中央 石組	南東隅は隅丸で、南壁側が外方に膨らむ。カマドは天井と袖の大部分を失い、構築材が壁き口前に散乱する。遺物は少ないが、カマド内より銅2銅片が出土。他に釘、鉄滓が出土。	10～11期
53	隅丸方形 N-0°	520×484×36 20.7	西壁中央	54住に切られる。南壁下に周溝がみられる。カマドは火床面のみに残す。黒書土器3点、緑釉陶器片1点、刀子2点、鉄滓2点が出土。	8期

遺跡番号	平面形状 基礎形状	長径×短径(2例(50)) (南東隅(河))	2014年度調査 発掘	遺物・土器		備考
				遺物	土器	
54	隅丸長方形 N-90°-W	468×408×28 15.0	西壁中央 石組	53住を切る。カマドは火床面のみ残る。覆土柱には全体に礎が散在する。遺物は北半部を中心に出土するが量は少ない。壺蓋土器1点、不明鉄製品が出土。	8期	
55	隅丸方形 N-90°-E	404×380×36 12.4	東壁中央石 組	P349を切る。ビット5高のうち4基は4隅にあり、位置的に往穴の可能性も否められぬが、カマドは天井と壁の大形を欠く。遺物はカマドを中心に発掘が多く出土。他に礎、不明鉄製品各1点が写された。	8期	
56	方形 N-4°-E	352×344×28 9.6	北壁中央 張り出し	カマドは壁外に大きく張り出す。遺物はカマド内外に発掘のみみられたほかほとんどないが、針状の銅製品が出土している。	7～8期	
57	隅丸方形 N-94°-E	490×480×36 19.2	東壁北端 石組	P1330に切られる。南壁および北壁下に周溝のみみられる。床中央および西壁下のP6には炭化物の集まりが認められる。カマドは両端を残し、手前から右端にかけて構築剤その他の礎が埋積する。遺物は灰輪陶器を主体とする食器類が多く出土。特殊なものとして緑釉土器1点、鉄片、銅製品がある。	12～13期	
58	隅丸方形 N-95°-W	632×632×24 33.5	西壁中央 石組	P391・392・393・394に切られる。東壁中央を除く壁下に周溝がめぐり、ビットには高が主往穴と捉えられ、入り口部と指定されるP7～P8間の床土にも周溝するビットがある。カマドは天井部を欠く。焼石が以前の床土に散見する。遺物はカマド周辺から出土した食器類のほかは少ない。他に不明鉄製品、鉄片2点がある。	9期	
59	不明 N-6°-E	572×424×10 <16.1>	不明	北半部を覆乱で失う。家寄りの床土に礎土がみられるがカマドが穴かは不明。遺物は少ないが、鉄鍔1点が写されている。	10期	
60	方形 N-83°-E	420×412×16 14.8	東壁中央	カマドは火床面のみ残る。南壁中央下には半円状に床の高まりが認められる。遺物は非常に少ない。	7～8期	
61	隅丸長方形 N-10°-W	372×300×12 8.2	不明	P697に切られる。平面は不整形な方形をなす。東壁中央下の床土に遺物・礎が集中し、この付近にカマドが存在した可能性も考えられるが礎土はみられない。遺物は少なく食器類が中心である。	14期	
62	方形 N-90°-E	448×416×44 15.9	東壁中央 石組	土1396・1397を切る。P544に切られる。カマドは天井を失う。西北隅および東壁下の西壁下の隅形ビットが写される。遺物は食器類が中心に多い。カマド築込にはほぼ北壁の土器群が埋積していた。特殊なものとして西壁下より出土した礎土と壺蓋土器1点がある。	11期	
63	方形 N-85°-E	408×368×28 12.0	東壁中央 石組	調査段階では64住に切られると判断したが出土土器の種類は本家構が古い。西壁下にビットが集中する。カマドは両端の基部と火床面を残す。遺物はカマド内から北隅部に集中する。特殊遺物は壺蓋土器1点、緑釉陶器各1点、鉄鍔2点が出土。	9期	
64	隅丸長方形 N-86°-E	420×364×36 12.0	東壁中央 石組	調査段階では63住に切られると判断。カマドは天井を失うが、煙道は良好な保存状況である。遺物はカマド内外から発掘。家伏し銅が多く出土。	7～8期	
65	方形 N-100°-E	632×624×60 29.9	東壁中央 粘土	81住、P753を切る。土1484に切られる。カマドは天井を失う。カマド両端および南～西壁下の隅形ビットは往穴と認められる。カマド内部には礎が埋積するほか、東半部を中心に覆土柱の礎が写される。遺物は、手前～西壁にかけての覆土中に多量に分布。特殊遺物は壺蓋土器1点、鉄輪陶器5点、刀子1点、鉄鍔4点がある。	8期	
66	隅丸方形 N-90°-E	432×428×34 13.9	東壁北端 石組	67住、土1501を切る。北東隅を覆乱に失う。南壁下に周溝。床中央に南北走する間仕切り溝あり。カマドは覆乱により片端を失う。東壁および西壁寄りには隅形ビットが存在する。遺物は比較的数量が少ない。	12期	
67	方形 N-87°-E	644×644×32 34.3	東壁中央 石組	68住、土1501を切る。66住、土1402、P519に切られる。カマドは火床面と両端の基部を残す。主往穴はカマド両端から内壁上に8基の配列が認められる。カマド内部には貯蔵穴状の隅形ビットがあり、当該部分のみ外側に張り出す。遺物は非常に多い。食器類は腰高の土器品が出土。特殊なものとして印花文のある灰輪陶器蓋付便器、鉄鍔(礎・鉄片)、石皿、板状の土製品がある。	8期	
68	方形 N-1°-W	612×560×28 (31.0)	不明	土1403、P518を切る。67住、土1404に切られる。特殊なものとして壺蓋土器2点がある。	7期	
69	隅丸方形 N-0°	452×440×36 15.8	北壁中央 石組	P464に切られる。覆乱にあり。カマドは火床面のみ残る。カマド右端には貯蔵穴状の隅形ビットが壁外に張り出し存在する。遺物はカマドおよびカマド脇のビット、南寄りの床土に食器類の欠片品が遺存する。他に鉄片1点が出土。	9期	
70	隅丸方形 N-94°-E	512×488×44 18.2	東壁中央 石組	西壁下および南壁下の一部に周溝のみみられる。カマド両端は礎が半円形状に張り出す。また南西隅にはテラス状の張り出しがみられる。位置的にP49・P5・P6の礎を往穴とみないが、いずれも往穴。遺物はカマド周辺から北壁寄り、西壁寄りの床土から食器類を中心に多量に出土した。特殊なものとして緑釉土器2点、壺蓋土器1点、刀子1点、鉄鍔5点がある。	10期	
71	隅丸長方形 N-90°-W	288×256×16 6.0	西壁中央 張り出し	覆乱にあり。東壁下に周溝がある。カマドは煙道、火床面、袖基部が残る。遺物はカマドから北西隅にかけて食器類、礎類が埋積されている。	7～8期	
72	方形 N-91°-E	500×490×36 22.1	東壁中央 石組	土1361・1363、P428・432に切られる。北壁を除く各壁下に周溝のみみられる。カマドは火床面のみ残り、構築剤の礎がその上に散在する。4隅には柱礎の認められる隅形ビットがあり、往穴とみられる。遺物はカマド周辺に集中し食器類が多い。特殊遺物として壺蓋土器、飯用鉢、不明鉄製品、鉄鍔7点がある。	10期	
73	隅丸方形 N-92°-E	396×380×32 11.4	東壁中央 石組	カマドは天井部を欠く。南東隅から南壁下、南西隅には礎状の落ち込みがある。遺物は、主としてカマド周辺より出土し、遺物の中央部からかまどにかけて多量の礎が埋積される。遺物はカマド周辺を中心に多く出土。壺蓋土器、飯用鉢(1点は壺蓋)、不明鉄製品、鉄鍔7点などの特殊遺物がある。	8期	
74	方形 N-90°-W	404×388×36 13.6	西壁中央	75住に切られる。建11と重複するが断層関係は不明。カマドは火床面のみ残る。東壁中央下には隅形カマドの火床面が残る。遺物は少ないが緑釉陶器片が1点出土。	7～8期	

調査 番号	平面形 注：断面	長軸×短軸×高 (cm) 注：断面	主な位置 形状	遺物内容	調査 年度
75	隅丸方形 N-86°-E	344×332×28 8.7	東壁中央	層11・12と重複するが新出は不明。7住を切りP1287に切られる。カマドは西壁のみ残す。構築材と思われる礎はカマドの前にもためられている。遺物は少ない。	8期
76	方形 N-90°-W	360×332×26 9.4	西壁南寄り 煙道64cm	カマドは火床面と煙道のみ残す。カマド蓋(南西隅)には煙の溜った貯蔵穴状のピットがある。北東隅にも同形ピットがみられる。遺物はカマドから南西隅のピットにかけて食物類や鉄製品が出土していた。	9期
77	長方形 N-91°-W	492×424×24 17.7	西壁中央 石碁	北壁下に間溝が存在する。カマドは初層面に西壁基部を残す。カマドから床中央にかけて礎が散在する。南西隅に隅形ピット、南東隅にも隅丸方形の大型ピットがある。遺物はカマド周辺から西壁面に多い。特殊な遺物として貯蔵穴の銅製品、刀子・箸など鉄製品6点が出土している。	11期
78	隅丸方形 N-87°-E	664×600×70 25.7	東壁中央 石碁	P801に切られる。掘り込みの深い遺構である。カマドは天井を失うが煙道が良好に残り、土製陶器片で天井を構築している。北壁中央および南西隅にはタラス状の段がある。また、西壁の2面所には床面に平円状に掘り出すタラスの残まりがあり壁面も掘りこんでいる。北壁のものについては礎土下層に火床面が残った。ピットは彫形が不鮮であるが、P7・9・12・13・14等に柱穴の可能性を残す。P6・15は遺物を伴い、一部礎を掘りこんでいる。遺物は覆土下層から床面にかけて多く出土。主として東壁のカマド周辺に集中する。その主体は炭類で、特殊な遺物として黒漆土器が1点、刀子2点、釘1点、鉄滓2点がある。	7期
79	隅丸方形 N-86°-E	380×356×44 9.5	東壁中央 石碁?	北壁下に間溝が存在する。カマドは火床面と袖基部を残す。カマド両脇には煙道、大きい貯蔵穴状のピットがある。遺物はカマドから南東部に集中していた。	7期
81	不明 不明	<324>×<56>×20 <0.6>	不明	65住にほとんどを切られ、北壁のみ残存。遺物も豊前と等しい。	8期以前
84	方形 N-86°-E	368×364×34 10.8	東壁中央 石碁	カマドは両袖および天井の一部が残る。築き口には天井石が積たれる。北東隅には浅い隅形の大形ピットがある。遺物はカマド内から出土した炭類を除いて数少ない。	7～8期
85	隅丸方形 N-92°-E	(336)×308×28 (8.4)	東壁中央 石碁	86住に切られる。床・南壁下に間溝がある。カマドは火床面と左礎を残し、構築材と思われる礎が手前の床面上に散乱する。遺物は非常に少ない。	7期以前
86	方形 N-87°-E	464×440×32 18.0	東壁中央	85住、P870を切る。遺跡にあう。カマドは両袖の基部を残す。北東隅に段を設ける。南東壁には火床面がある。遺物は少ないが、カマドから南壁沿いに食物類、炭類が散在し、他に、鉄滓6点がある。	7期
87	隅丸長方形 N-89°-E	360×296×22 8.2	東壁中央 石碁	カマドは天井面を失う。構築材の礎が手前に散在。北壁下に浅い隅形ピットがある。遺物は少ない。カマド周辺に食物類が残存していた。特殊なものとして黒漆土器、緑釉陶器、鉄滓がある。	10～11期
88	隅丸方形 N-90°-E	516×468×52 17.8	東壁中央 石碁	壁面はなだらかに立ち上がる。カマドは袖の基部から煙道にかけて構築材が良好に残る。遺物はカマド周辺と西壁下から食物類、炭類が出土した。特殊なものとして黒漆土器、鉄滓がある。	11～12期
89	隅丸長方形 N-91°-W	492×416×40 18.1	西壁北寄り 石碁	P1074を切る。中央・南半部に結床が残る。カマドは火床面のみ残存し、西壁に積り残っていた。カマド蓋の上部がP7～4住に柱穴で掘り出すとあらわれ、西壁・南壁下に炭類あり。遺物は西半部の煙道いから中央にかけて、食物類を中心に充形資料が多く出土。特殊なものに礎3点、鉄滓1点がある。	11～12期
90	隅丸方形 N-86°-W	456×436×36 17.9	西壁中央 石碁	土1530を切る。カマドは火床面のみ残存し、構築材石がカマドから手前の床上に散乱していた。カマド脇から北壁隅には貯蔵穴の大形ピットがある。カマド脇の壁および東寄りの床には主柱穴4個が存在する。遺物は食物類を中心に出土。	10期
91	隅丸長方形 N-92°-E	376×284×16 8.3	東壁南端 石碁	P1105に切られる。北壁下にタラス状の段がある。カマドは天井面を失い、礎石も火床面に倒され取位置を留めていない。遺物は非常に少ないが、銅製品1点出土。	9～10期
92	方形 N-89°-E	336×312×12 8.7	東壁中央	溝20を切る。カマドは火床面のみ残り、構築材石と思われる礎が北東隅にかけて散乱していた。遺物は豊前と等しい。	9期以降
93	方形 N-88°-E	356×336×24 9.8	東壁南端 石碁	西壁および南壁下に間溝がある。カマドは両袖を残し、大井石も現状に良好で残存していた。カマド脇の南壁には壁外に掘り出すとあらわれ、西壁の貯蔵穴状のピットも残っていた。遺物は少ない。カマドから南西隅にかけての壁沿いに食物類が残されていた。他に同金具等の鉄製品、鉄滓3点がある。	8期
94	方形 N-7°-W	504×492×36 22.3	北壁中央 石碁	95住を切る。北壁下および南西隅には間溝がある。カマドは両袖と一部の天井石を残す。カマド左脇には貯蔵穴状の隅形ピットがあるほか、北西隅や南東隅にも浅いピットが存在する。主柱穴は規則的に並ぶ6基が認められる。P11・11は別荘から移すと考えられるが、本荘と重複する可能性もある。遺物はカマド内から羽釜など、カマドの周囲からは多数の食物類が出土した。注視すべきものとして緑釉陶器、鉄滓、刀子2点、鉄滓等がある。	11期
95	不明 N-89°-W	360×<236>×32 <5.6>	西壁 煙道30cm	94住に切られる。区域外にかかる。カマドは短い煙道と火床面を残し、構築材石は手前の床上に散乱する。遺物は少ない。	7期
96	不明 N-5°-W	412×<172>×20 <3.5>	西壁中央?	土1552・1553を切る。北・南半部は区域外にあるため全体は明らかでない。カマドは西壁中央にあると考えられ、間溝範囲内に構築材の礎がみられる。遺物はカマド脇の貯蔵穴状のピット内から食物類がまわって出土した。	9期
97	隅丸方形 N-91°-W	412×392×40 13.6	西壁中央 石碁	P1152を切る。北・南壁に間溝あり。カマドは両袖の基部が残り、構築材石が隅隅に散在。隅の隅形ピットは柱穴と認められる。遺物はカマド内から食物類、銅製品が出土した。特殊な遺物は緑釉陶器片4点、飯用碗、釘巻4点の鉄製品、鉄滓5点がある。	9～10期
98	隅丸方形 N-94°-W	376×364×24 10.0	西壁南寄り 石碁	101住を切る。カマドは両袖を残す。その間溝には貯蔵穴の大形ピットがある。床中央の隅形ピット2基は本地の柱穴と捉えられる。遺物はカマド脇のピット上から食物類が集中して出土した。特殊なものとして鉄線陶器4点、砥石、刀子2点、羽西間にたためられていた編用石籠がある。	9期

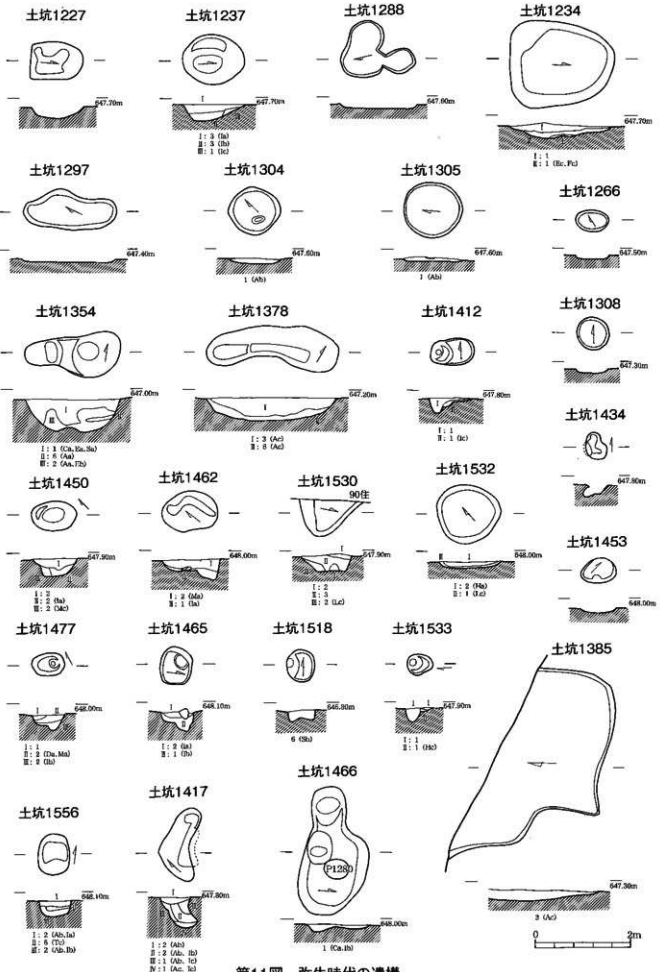
遺跡 番号	平面形状 ・方位	規模・形状 ・面積(m ²) ・埋蔵中心	方位・位置 ・形	遺物		年代 ・時期
				遺物	数量	
99	方形	376×368×62	東壁中央 石組	土1555を切る。カマドは袖台・天井石の残存状況が良好である。南東隅には貯蔵穴の円形ピットがある。カマドから中央部にかけての壁土中には礎が多く投げ込まれる。遺物はカマドおよびその周囲から食器類、薬類がまとまって出土した。そのほか鉄線点・刀子2点が出土した。	8期	
	N-66°-E	12.4				
100	方形	408×396×8	東壁南寄り	北壁に周溝がめぐる。カマドは火床面のみ残り、袖・天井は失う。南東隅から南壁下には貯蔵穴状の塊いピットが2基ある。遺物はカマド周辺に完形の食器類、薬類が存している。	9期	
	N-90°-E	14.2				
101	不明	304×<112>×18 <3.0>	不明	98住に大半を切られる。東寄りには炭化材が残る。遺物は非常に少ない。鉄線2点が出土。	8～9期	
102	隅丸長方形	492×380×36	西壁中央	土2687・2753・溝31を切る。カマドは火床面のみ残り。カマド左脇の西壁下には貯蔵穴状の隅形ピットがあるほか、南壁沿いにも同様なピット3基が検出された。遺物はカマド周辺および火床面内から食器類を中心に出土。鉄線品1点、鉄線4点が他に出土。	11～12期	
	N-90°-W	15.3				
104	隅丸方形	370×360×24	西壁中央	土3134を切る。土2949・4042に切られる。カマドは火床面のみ残り、溝・薬箱と思われる礎がほぼ中央にかけて散乱する。カマド右脇には貯蔵穴状の大形ピットがある。遺物は少ない。	7～8期	
	N-90°-W	11.8				
107	長方形	548×452×20	西壁中央 石組	土2742に切られる。カマドは両袖を残す。カマド左脇には貯蔵穴状のピットがある。カマド前には塊い円形ピットが集中する。南西隅には火床面がある。遺物はカマド周辺および火床面内から少数出土したのみ。他に鉄線品2点、鉄線1点がある。	9～11	
	N-90°-W	23.6				
120 旧	長方形	468×392×16	東壁南端 石組	新130住。土3143・3316・3317・3318・3319に切られる。カマドは両袖と火床面を残す。カマドの左脇には貯蔵穴状の大形ピットがあるほか、南壁下にも大形のピット2基が存している。遺物は薬類を主体にカマド周辺に集中する。	7～8期	
	N-57°-E	16.5				
120 新	長方形	272×228×12	東壁南端 石組	旧120住を切る。土3315に切られる。カマドは一部天井石が残存する。遺物は少ない。特殊なものとして土練1点がある。	7～8期	
	N-67°-E	5.5				
121	方形	460×432×26	東壁北端 石組	122・125住、溝30を切る。土3306に切られる。西壁中央に旧カマドの火床面が残る。カマドは両袖を残す。P2・4は柱穴の可能性がある。遺物は、カマド周辺と西壁下に多く、食器類を主体とする。他に刀子等鉄線品5点、鉄線3点がある。	8期	
	N-91°-E	17.9				
122	方形	480×472×26	東壁中央 石組	溝30を切る。121住に大半を切られるが、南西部を除き床面はレベルが低いため残存している。カマドは両袖および隔扉部の天井石が残存する。遺物はカマド周辺に多く残される。鉄線2点が出土している。	8期	
	N-89°-E	16.7				
123	方形	384×364×8 (12.2)	東壁中央	区域外にかかる。攪乱にあう。カマドは火床面のみ残り。遺物は少ない。	8期	
	N-107°-E					
124	隅丸方形	490×462×24	東壁北端 石組	床面。カマドは両袖を残し、溝渠材と思われる礎が右脇や手前部に散在する。カマド左脇の北壁は外方に張り出す。カマドの右脇には貯蔵穴状の隅形ピットがあるほか、南東隅、南西隅等にも大形のピットが存する。遺物はカマド周辺を中心に食器類がみられる。鉄線約鉄線品1点、鉄線7点が出土している。	11期	
	N-58°-E	18.6				
125	不明	384×<156>×24	不明	121住、土3326に切られる。遺物は皆無に等しい。	8期以前	
	不明	<4.6>				

第3表 掘立柱建物址一覧

遺跡番号	平面形状	高欄(高欄) 幅(1cm)	高欄(高欄) 間(1cm)	掘立柱(高欄) 間(1cm)	柱		備 考
					種類	径(1cm)	
4	長方形	N-12°-E	3間×2間	桁行128～166(151)	円形	径24～40	
	偏柱式	12.3	448×270	梁間 88～192(138)		径5～24	
5	方形	N-4°-W	2間×2間	桁行188～232(209)	円形	径18～40	
	偏柱式	16.8	420×404	梁間180～208(200)		径8～38	
6	方形	N-5°-W	2間×2間	桁行206～292(231)	円形	径36～68	
	偏柱式	15.6	442×350	梁間144～192(175)		径18～52	
7	方形	N-3°-W	2間×1間	桁行108～144(131)	円形	径26～48	
	偏柱式	7.0	272×254	梁間252～256(254)		径8～28	
8	方形	N-3°-E	2間×2間	桁行156～260(207)	円形	径20～40	
	偏柱式	14.9	418×322	梁間152～168(161)		径4～40	
9	方形	N-2°-E	2間×2間	桁行75～360	円形	径18～40	東側に2間×2間(410×230)の張り出しなし いし匠あり規模・面積は主屋部分の計画値
	偏柱式	15.5	400×338	梁間184～220(190)		径12～24	
10	方形	N-3°-W	3間×2間	桁行144～168(161)	円形	径36～72	
	偏柱式	21.0	486×444	梁間212～236(225)	方形	径14～40	
11	長方形	N-0°	3間×2間	桁行160～212(196)	円形	径40～88	74・75住に切られる。建12と重複
	偏柱式	23.4	598×402	梁間184～216(200)	方形	径26～38	
12	長方形	N-2°-W	3間×2間	桁行212～220(215)	円形	径40～80	75住、建11と重複。北側に1間×1間(426×110)の庇付規模・面積は主屋部分の計画値
	偏柱式	27.6	640×432	梁間200～236(215)	方形	径16～40	
13	長方形	N-0°	2間×2間	桁行500	円形	径28～44	99住に切られる
	偏柱式	17.3	500×352	梁間352		径8～20	
14	方形	N-89°-E	3間×2間	桁行187～210(199)	円形	径44～74	4基 北沼および東辺の柱穴各1基未確認
	偏柱式	27.1	596×456	梁間210～246(228)		径12～24	
15	方形	N-88°-E	3間×2間	桁行180～200(189)	円形	径40～65	1基 32住に切られる。南西隅の柱穴未確認
	偏柱式	26.2	667×445	梁間216～229(223)		径20～48	

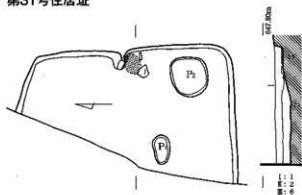
第4表 ビット列一覧

遺跡番号	方位	長さ(1cm)	ビット間隔(1cm)	掘立柱(高欄) 間(1cm)	種類	径(1cm)	備 考
2	N-9°-E	2間 376	168～208	円形	径 40～44 径 10～12		
		3			N-66°-W	3間 326	94～118
4	N-3°-W	2間 344	120～124	円形	径 52～60 径 12～16		
		5			N-4°-W	3間×2間 498×445	3間 130～198 2間 217～228
6	N-4°-W	2間 440	216	円形	径 32～42 径 12～26		
		7			N-90°-W	4間 932	248～256
8	N-2°-W	2間 488	240～248	円形	径 32～60 径 28～32	有	
		9			N-3°-W	3間×1間 604×224	3間 192～212 1間 224
10	N-5°-W	4間×4間 884×1024	南北 232～280 東西 180～284	円形 長方	径 24～64 径 16～38	L字形	
		11	N-81°-E	2間 440	215～225	円形	径 40～78 径 18～24
12	N-88°-E	3間 356	110～135	円形	径 25～35 径 6～8		
		13			N-84°-E	2間 600	305～295
14	N-3°-W	2間 506	245～260	円形	径 60～65 径 7～14		
		15			N-89°-E	3間 636	195～220
16	N-87°-E	2間×2間 615×440	南北 215～228 東西 300～315	円形	径 50～80 径 10～40	有	
		17	N-1°-W		4間 900	214～230	円形
18	N-89°-E	— 2720	18～207	円形	径 12～35 径 20～45	溝18に付属し、併走する。概ね2列構成と捉えられる。	

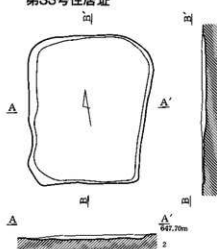


第11図 弥生時代の遺構

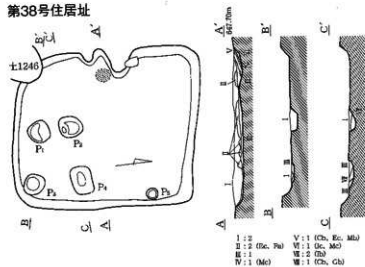
第31号住居址



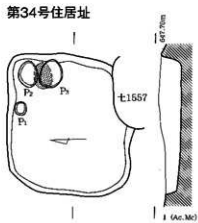
第33号住居址



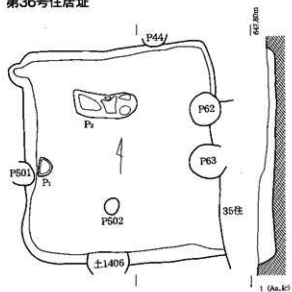
第38号住居址



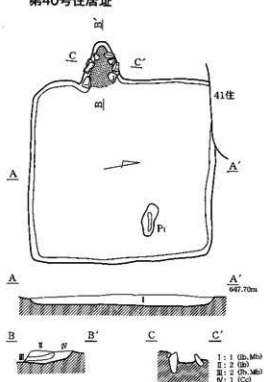
第34号住居址



第36号住居址

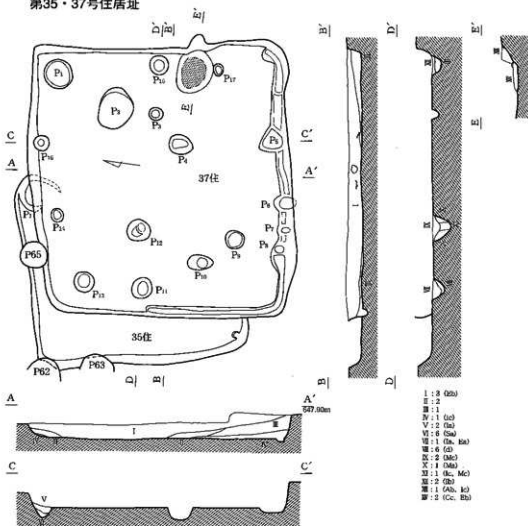


第40号住居址

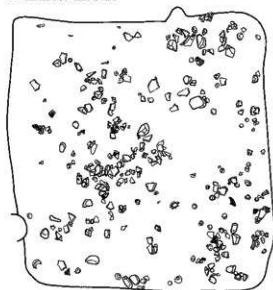


第12図 平安時代の遺構(1)

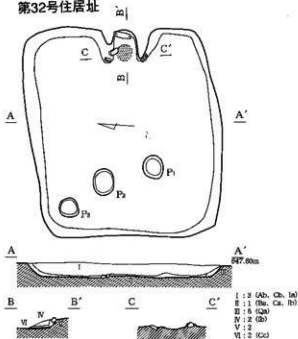
第35・37号住居址



37住遺物出土状況



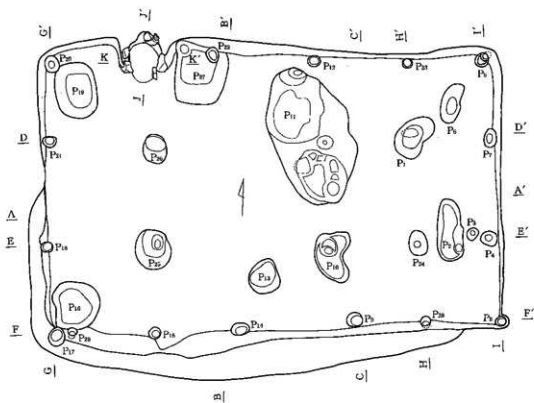
第32号住居址



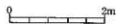
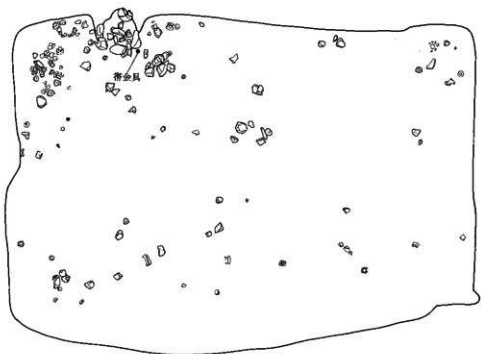
0 2m

第13図 平安時代の遺構(2)

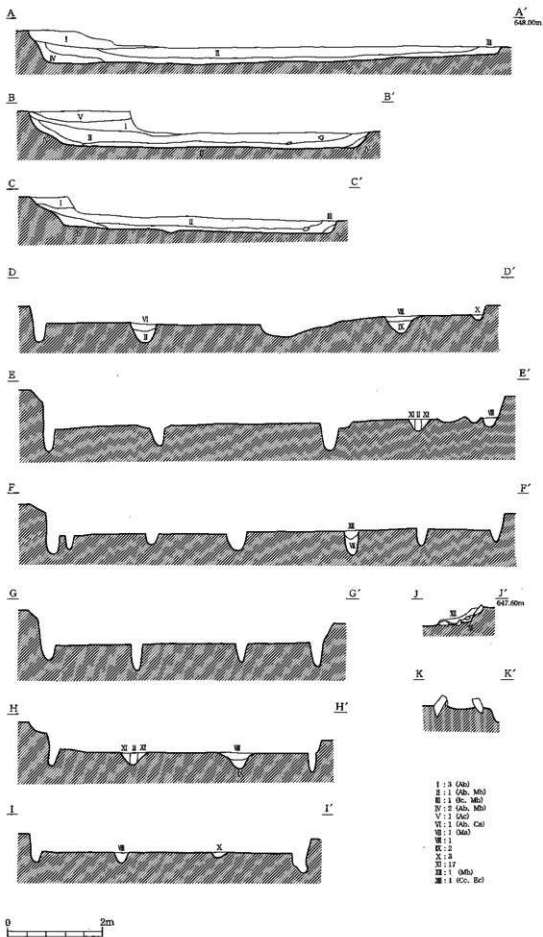
第39号住居址



39住遺物出土状況

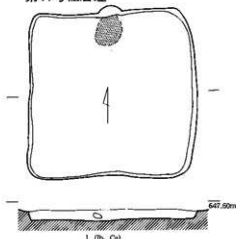


第14図 平安時代の遺構(3)

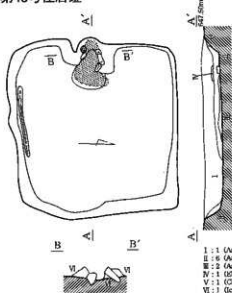


第15図 平安時代の遺構(4)

第41号住居址

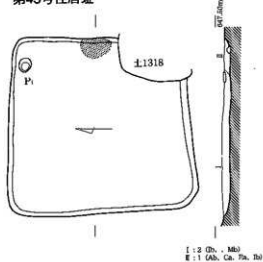


第43号住居址

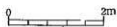


- I : 1 (Ac, Ch, Th)
- II : 6 (Ac, Sa)
- III : 2 (Ac, Sa)
- IV : 1 (Osh, Sa)
- V : 1 (Ch)
- VI : 1 (O, Ch)

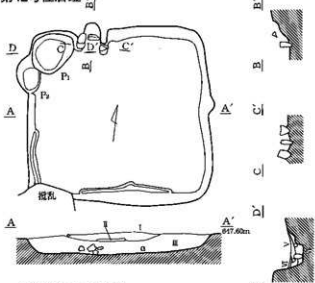
第45号住居址



- I : 2 (O, M)
- II : 1 (Ab, Ch, Pa, Th)

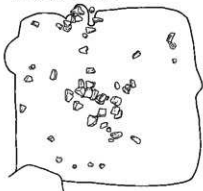


第42号住居址

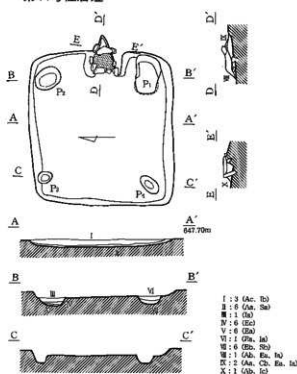


- I : 2 (Ab, Ch, Th)
- II : 20
- III : 1 (Ac, Th)
- IV : 3 (Ac, Th)
- V : 1 (Ac, Th)
- VI : 1 (Ac, Ch, Th)

42住遺物出土状況



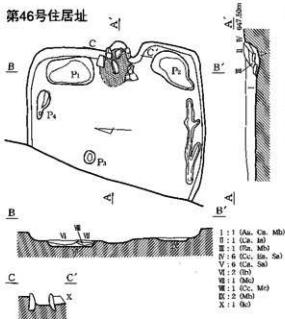
第44号住居址



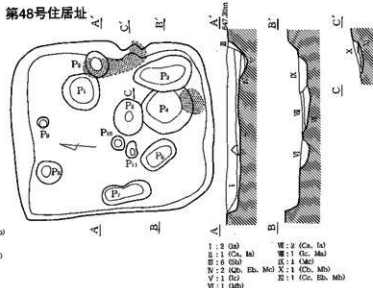
- I : 3 (Ac, Th)
- II : 6 (Ac, Sa)
- III : 1 (Sa)
- IV : 6 (O)
- V : 6 (Sa)
- VI : 1 (O, Sa)
- VII : 6 (O, Th)
- VIII : 1 (Ab, Es, Th)
- IX : 2 (Ab, Ch, Es, Th)
- X : 1 (O, Ic)

第16図 平安時代の遺構(5)

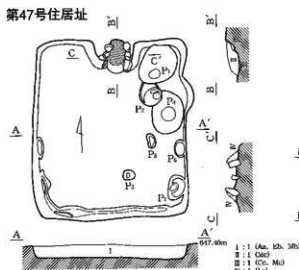
第46号住居址



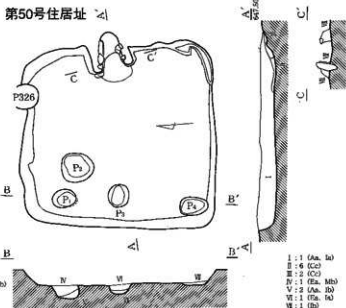
第48号住居址



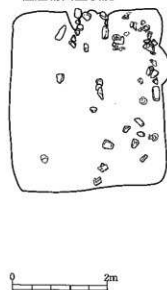
第47号住居址



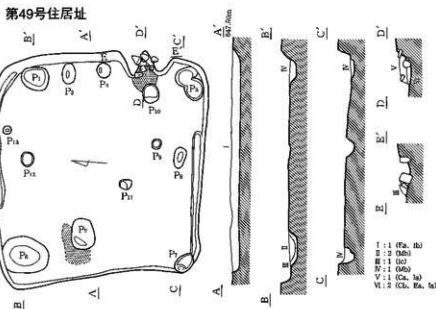
第50号住居址



47住遺物出土状況

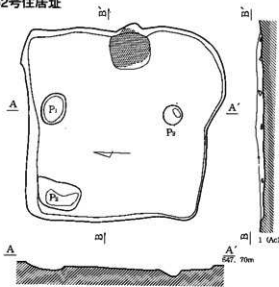


第49号住居址

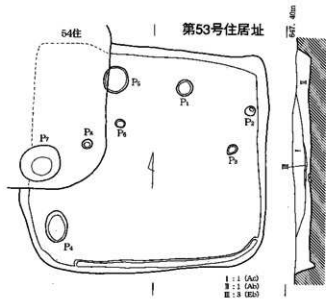


第17図 平安時代の遺構(6)

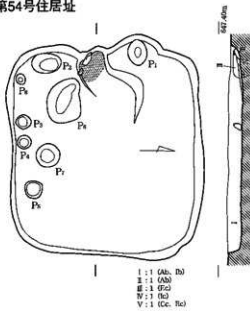
第52号住居址



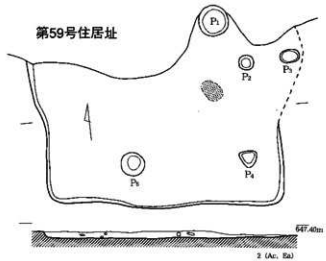
第53号住居址



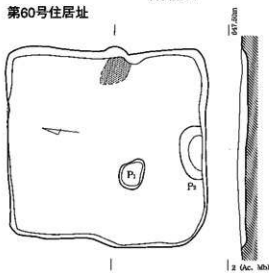
第54号住居址



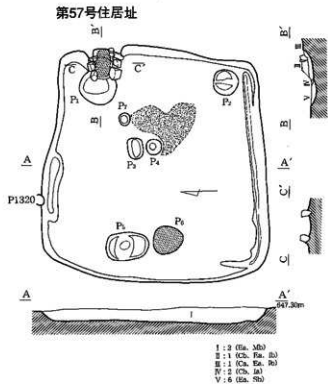
第59号住居址



第60号住居址

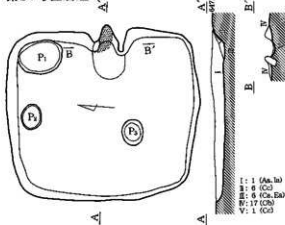


第57号住居址

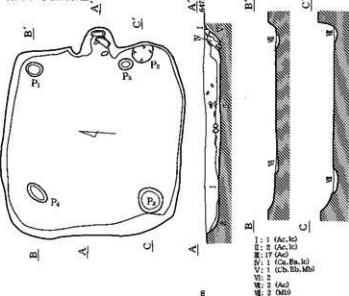


第18図 平安時代の遺構(7)

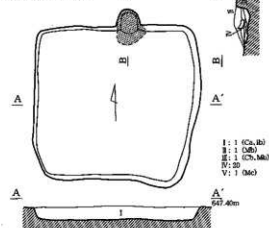
第51号住居址



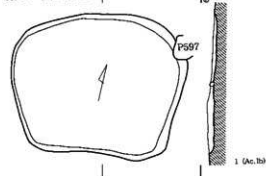
第55号住居址



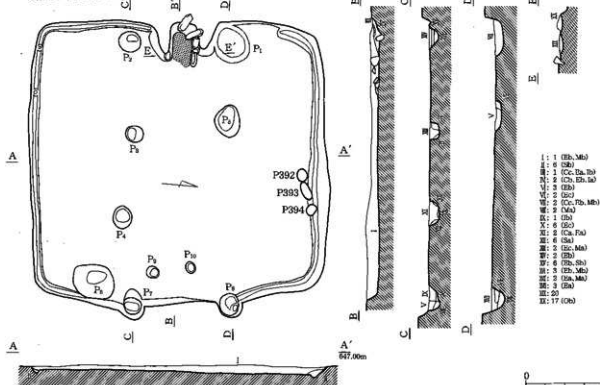
第56号住居址



第61号住居址

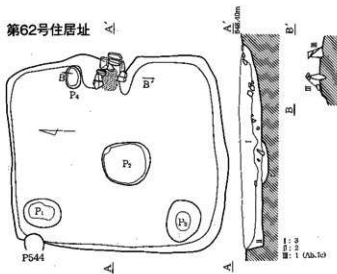


第58号住居址

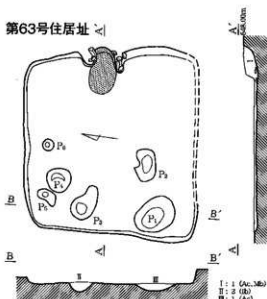


第19図 平安時代の遺構(8)

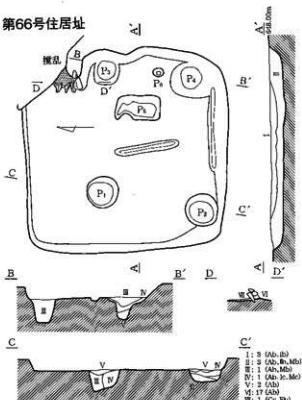
第62号住居址



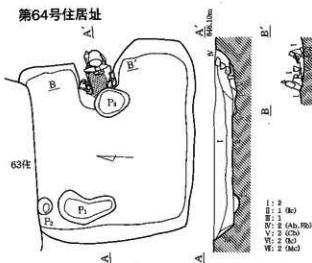
第63号住居址



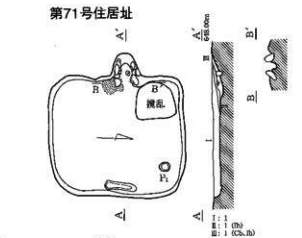
第66号住居址



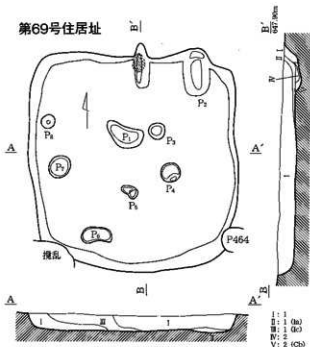
第64号住居址



第71号住居址



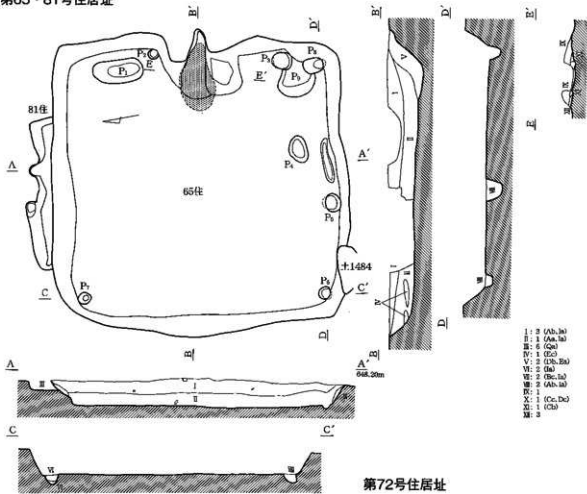
第69号住居址



0 2m

第20図 平安時代の遺構(9)

第65・81号住居址



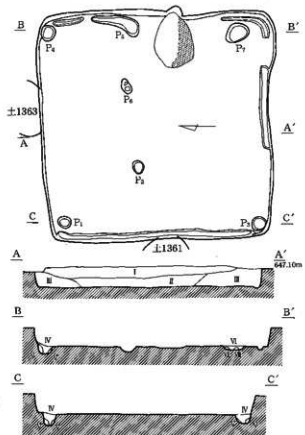
65住遺物出土状況



0 2m

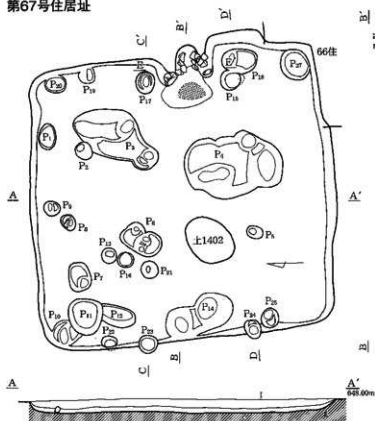
- I : 1 (Ac)
- II : 1 (Ac, Ca, Ia)
- III : 2 (Ab)
- IV : 6
- V : 2 (Ca, Ea, Ma)
- VI : 6 (Ca)

第72号住居址



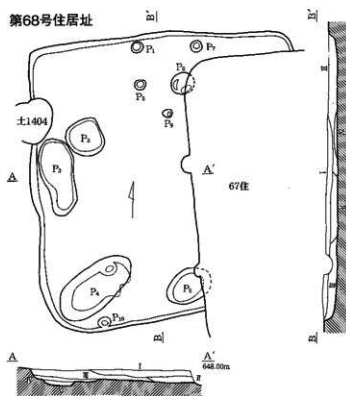
第21図 平安時代の遺構(10)

第67号住居址



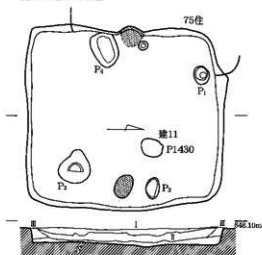
- I: 2 (Ac)
- II: 1 (Ac, Is, Mc)
- III: 1 (Ca, Is)
- IV: 3 (Sh)
- V: 2 (Ab, Ch, Eb)
- VI: 2 (As, Is)
- VII: 2 (Ab, Is)
- VIII: 3 (Db)
- IX: 17 (Ob)

第68号住居址



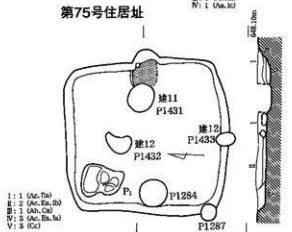
- I: 1 (Ac, Is, Mc)
- II: 17 (Ac, Is, Mc)
- III: 2 (Ac, Is, Mc)
- IV: 1 (Ca)
- V: 1 (Ob)

第74号住居址



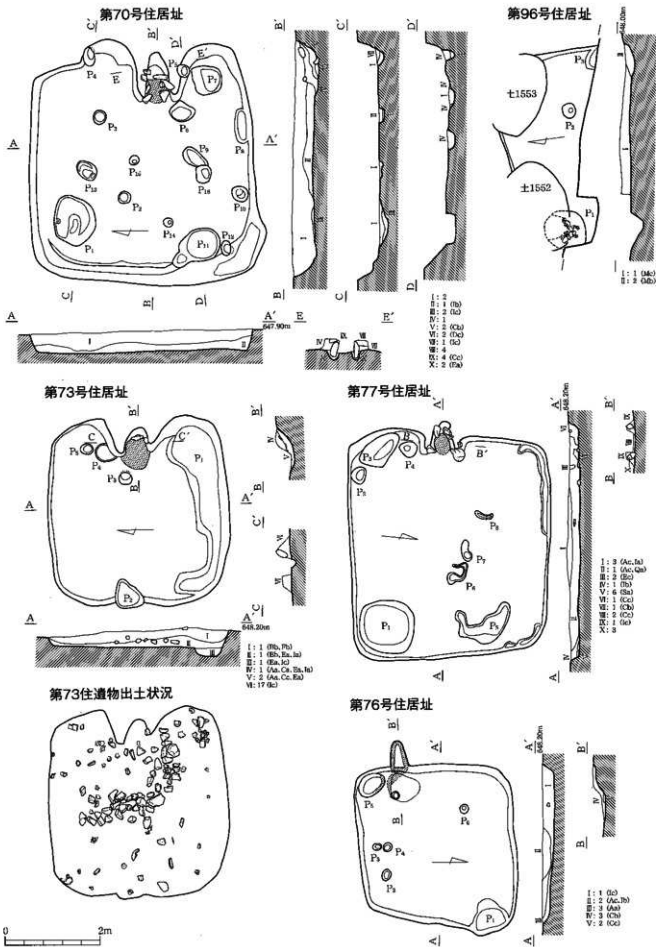
- I: 3 (Ac, Is)
- II: 1 (Ac, Is)
- III: 1 (As, Is)
- IV: 1 (As, Is)

第75号住居址



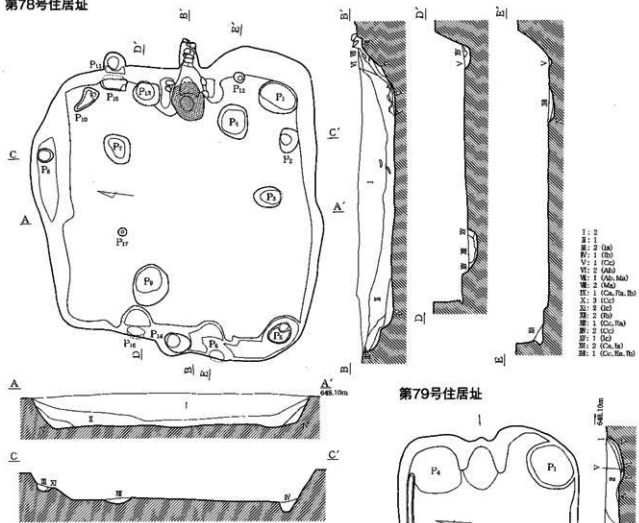
- I: 1 (Ac, Is)
- II: 2 (Ac, Is, Sh)
- III: 1 (As, Ca)
- IV: 3 (Ac, Is, Is)
- V: 3 (Ca)

第22図 平安時代の遺構(11)

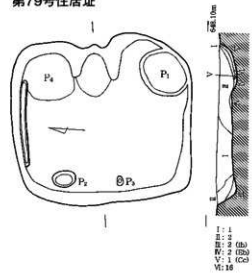


第23図 平安時代の遺構(12)

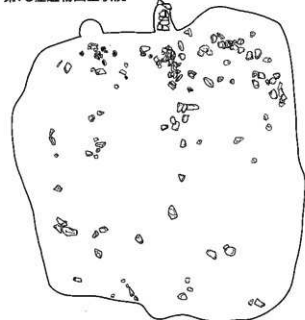
第78号住居址



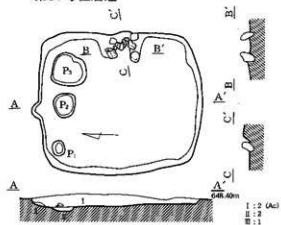
第79号住居址



第78号住居址出土状況

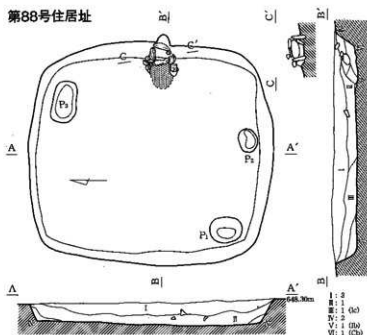


第87号住居址

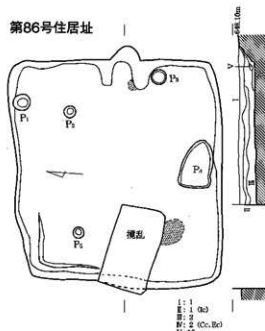


第24図 平安時代の遺構(13)

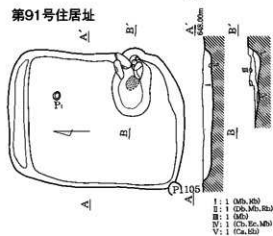
第88号住居址



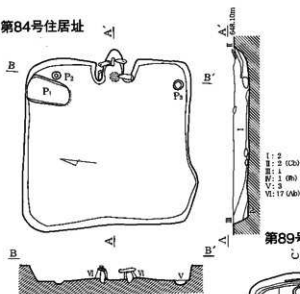
第86号住居址



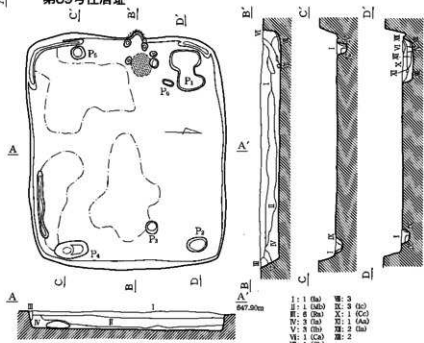
第91号住居址



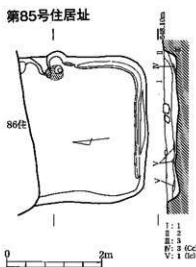
第84号住居址



第89号住居址

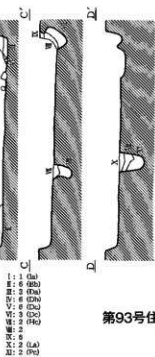
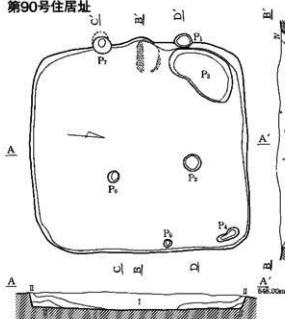


第85号住居址

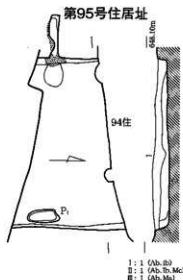


第25図 平安時代の遺構(14)

第90号住居址

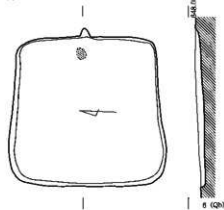


第95号住居址

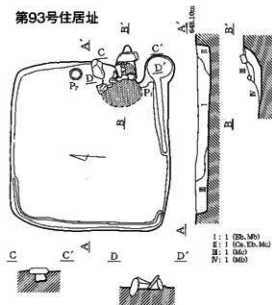


1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)

第92号住居址

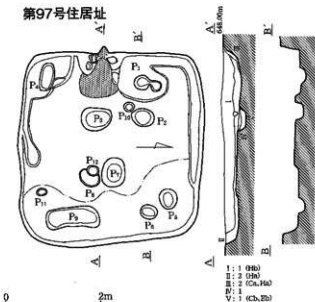


第93号住居址



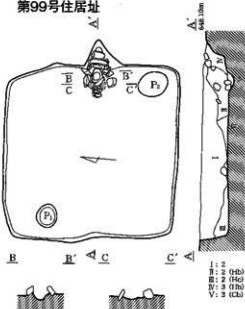
1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)
 1 : 1 (Sb, P)

第97号住居址



1 : 1 (9H)
 1 : 1 (9H)
 1 : 1 (Cb, Fd)
 1 : 1 (Cb, Fd)

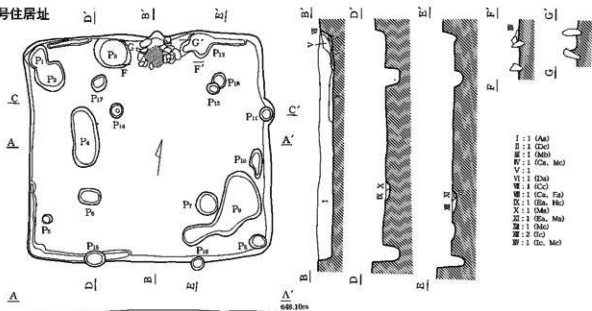
第99号住居址



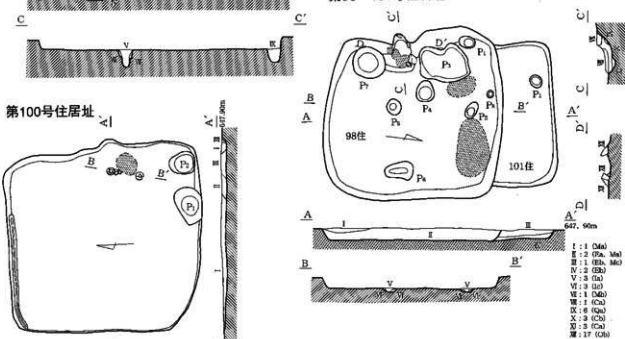
1 : 1 (9H)
 1 : 1 (9H)
 1 : 1 (Cb, Fd)
 1 : 1 (Cb, Fd)

第26図 平安時代の遺構(15)

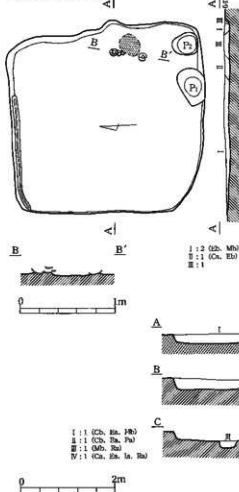
第94号住居址



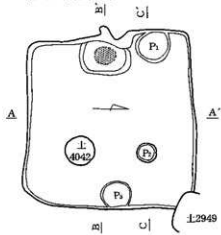
第98・101号住居址



第100号住居址

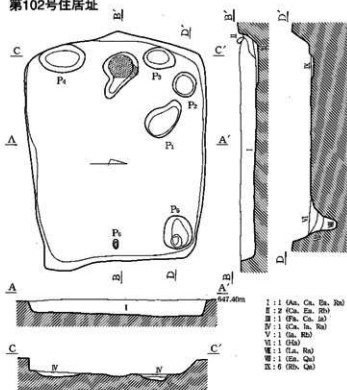


第104号住居址

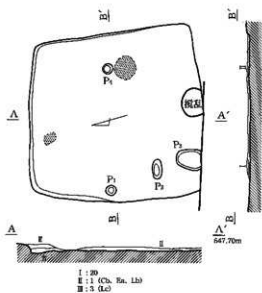


第27図 平安時代の遺構(16)

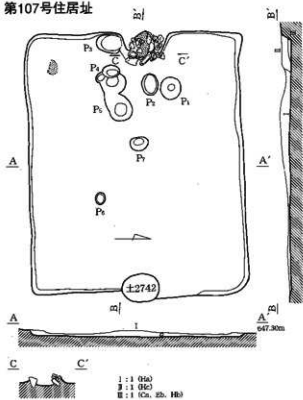
第102号住居址



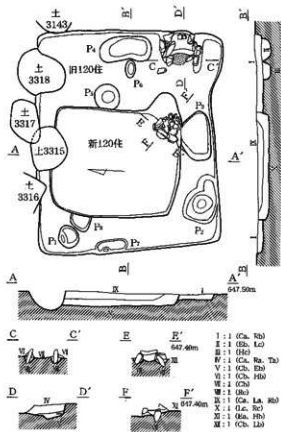
第123号住居址



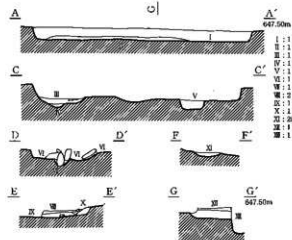
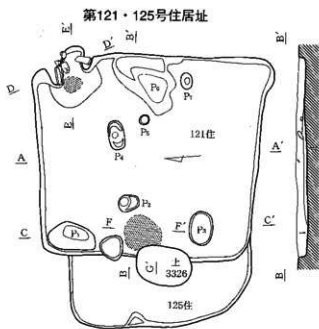
第107号住居址



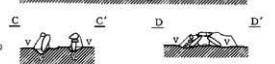
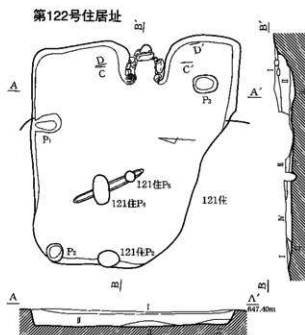
新・旧第120号住居址



第28図 平安時代の遺構(17)



- I : 1 (Aa, Pa, IJa)
- II : 1 (Ca, Ea, La, Ma)
- III : 1 (Da, Ra)
- IV : 1 (Oa, Ra)
- V : 1 (Sa, Pa, Ya)
- VI : 1 (Za)
- VII : 1 (Ba)
- VIII : 1 (Ka)
- IX : 1 (Ca, Ta, Fb)
- X : 1 (Ca)
- XI : 1 (Ca)
- XII : 1 (Ca, La)

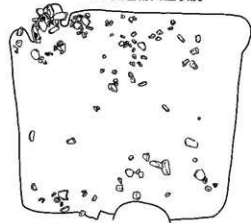


122住遺物出土状況



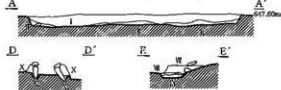
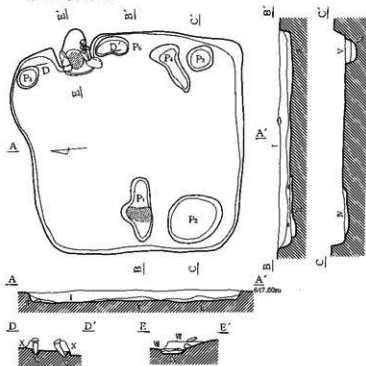
- I : 1 (Ea, IJa)
- II : 1 (Ca, Ea)
- III : 1 (Ca, Ma, La)
- IV : 3 (Ea, Oa)
- V : 1 (Aa, Ch, Ea, La)
- VI : 1 (Ca, Ma)

121住遺物出土状況



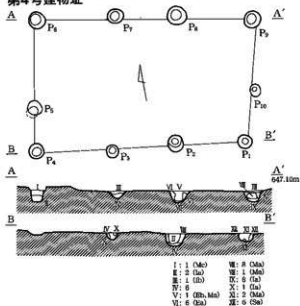
- I : 2 (Ea, IJa)
- II : 2 (Ca, Ea, Hc)
- III : 1 (Ga, Ma)
- IV : 1 (Ea, La, Oa)
- V : 1 (Ea, Ma, Mb)
- VI : 1 (Ga, Mb)
- VII : 1 (Ca, Ea, Pa)
- VIII : 1 (Ca, Ea, Pa)
- IX : 1 (Ca, Pa)
- X : 1 (Aa, Ta)
- XI : 1 (Ca, Ra)

第124号住居址

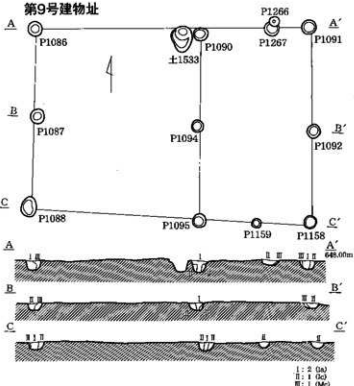


第29図 平安時代の遺構(18)

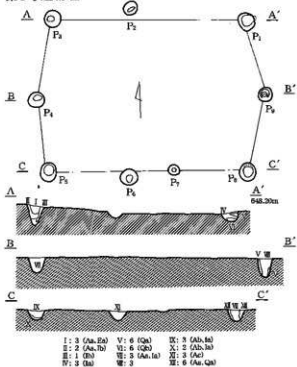
第4号建物址



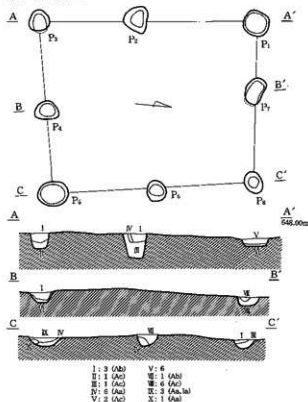
第9号建物址



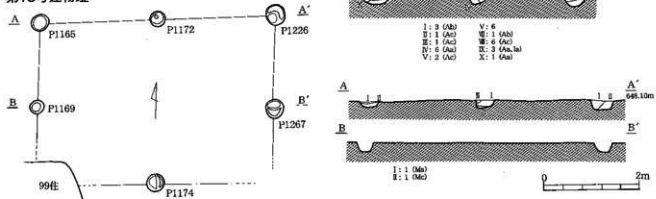
第8号建物址



第6号建物址

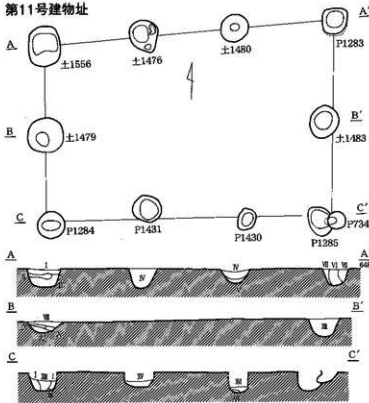


第13号建物址

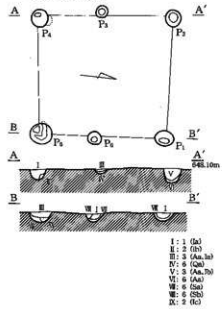


第30图 平安時代の遺構(19)

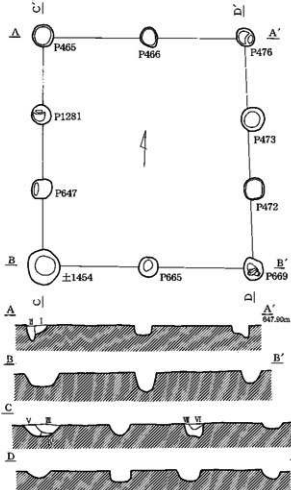
第11号建物址



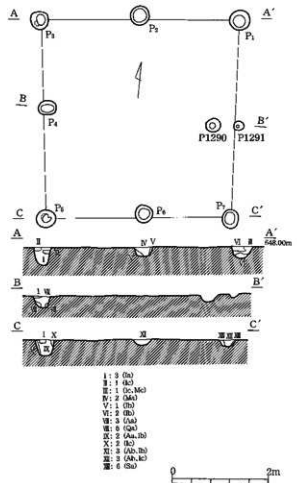
第7号建物址



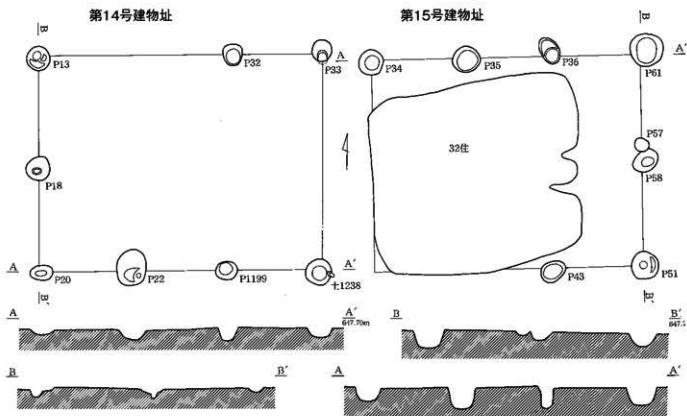
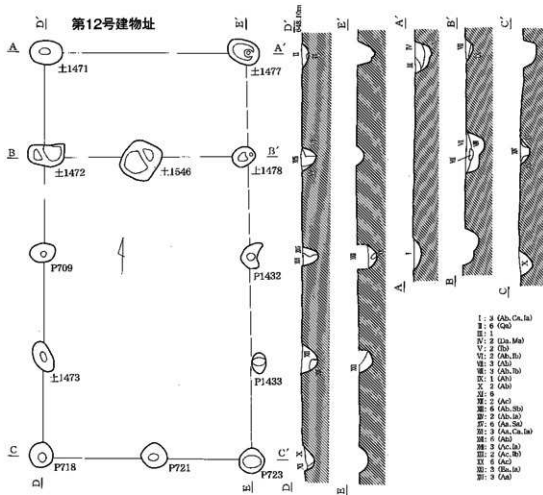
第10号建物址



第5号建物址

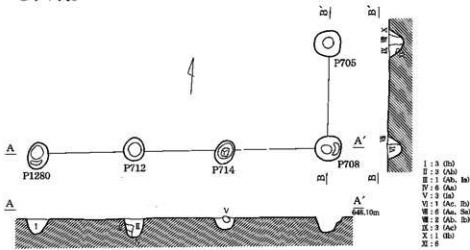


第31図 平安時代の遺構(20)

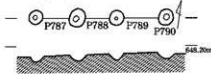


第32図 平安時代の遺構(21)

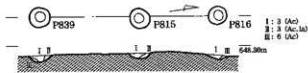
ビット列9



ビット列1



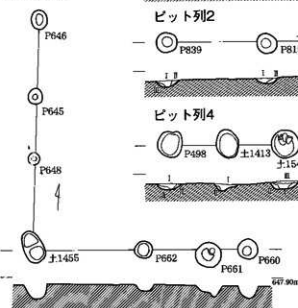
ビット列2



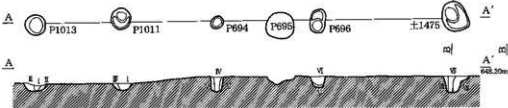
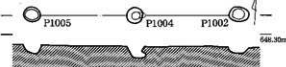
ビット列4



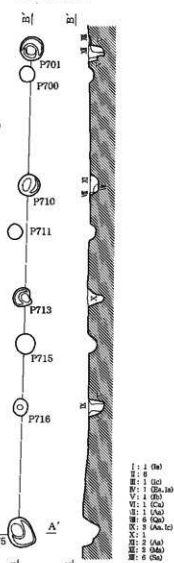
ビット列5



ビット列6



ビット列10

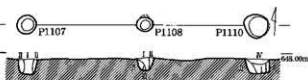


第33図 平安時代の遺構(22)

ビット列 3



ビット列 8



I : 1 (Da)
II : 1 (Da)
III : 6
IV : 1

ビット列 7

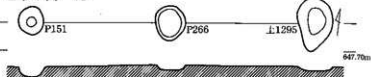


I : 2 (Da)
II : 2 (Da)
III : 3 (Da)
IV : 3 (Da, Ia)
V : 2 (Da, Ia)
VI : 6 (Da, Ia)
VII : 2 (Da)
VIII : 2 (Da, Ia)
IX : 6 (Da)

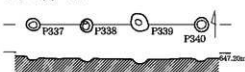
ビット列 11



ビット列 13



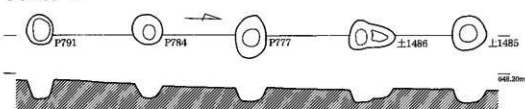
ビット列 12



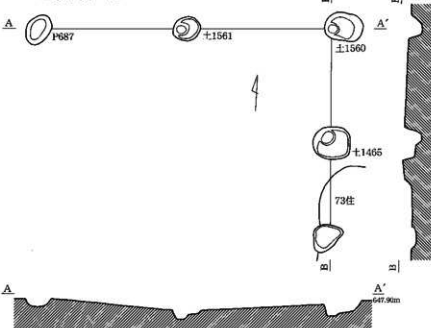
ビット列 15



ビット列 17



ビット列 16

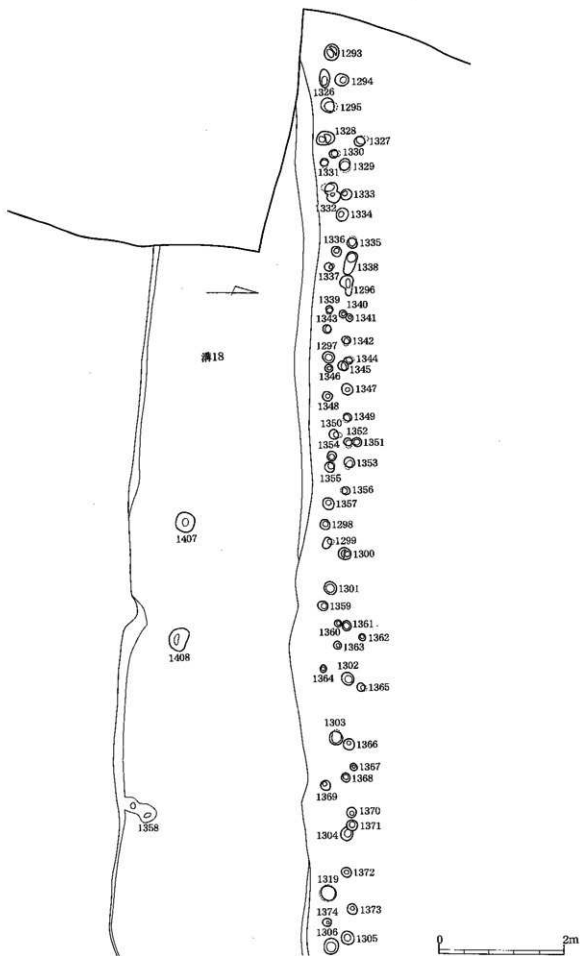


ビット列 14

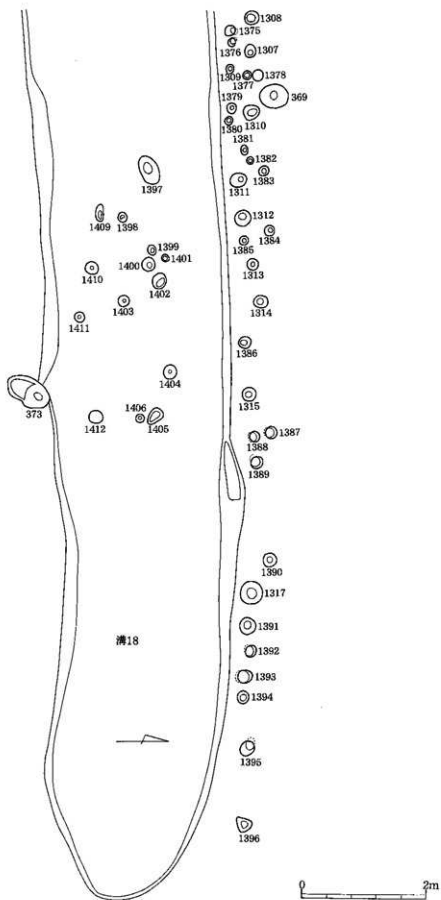


第34図 平安時代の遺構(23)

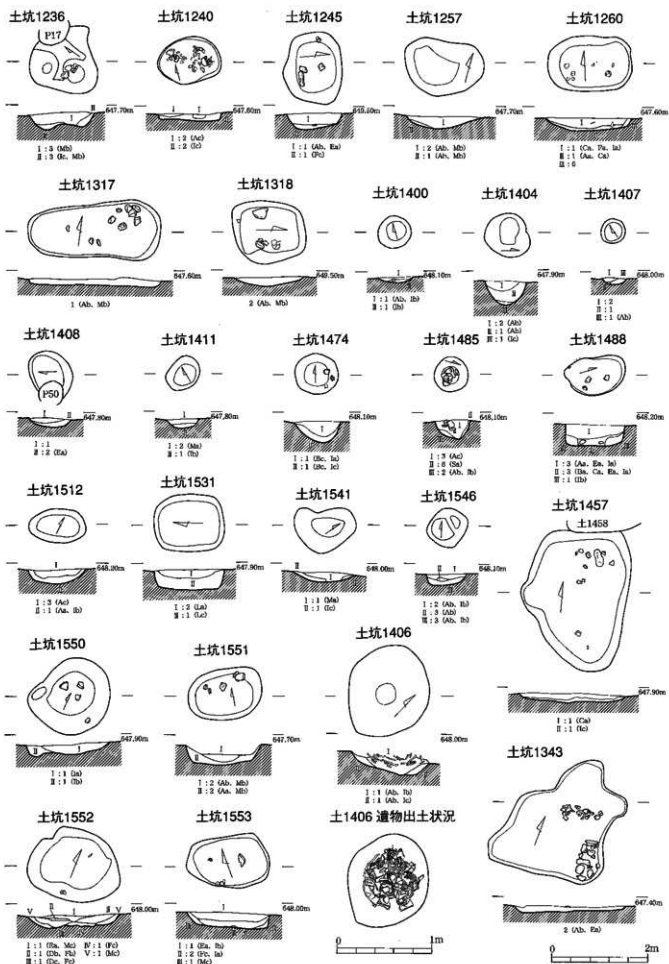




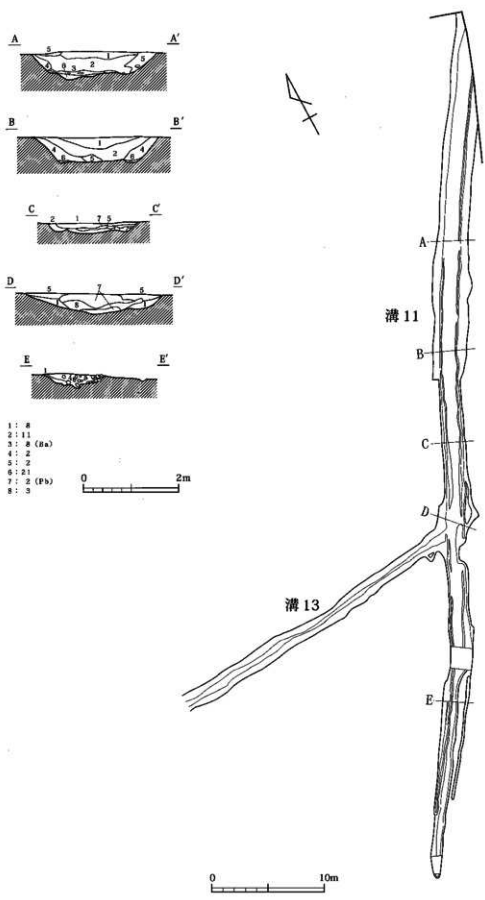
第35図 平安時代の遺構(24)



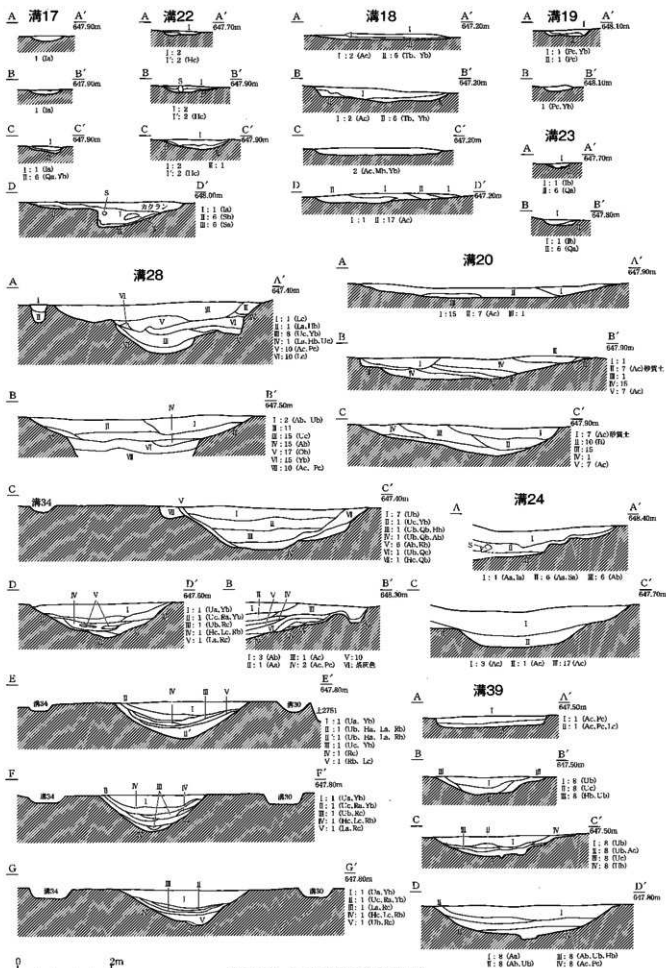
第36図 平安時代の遺構(25)



第37図 平安時代の遺構(26)

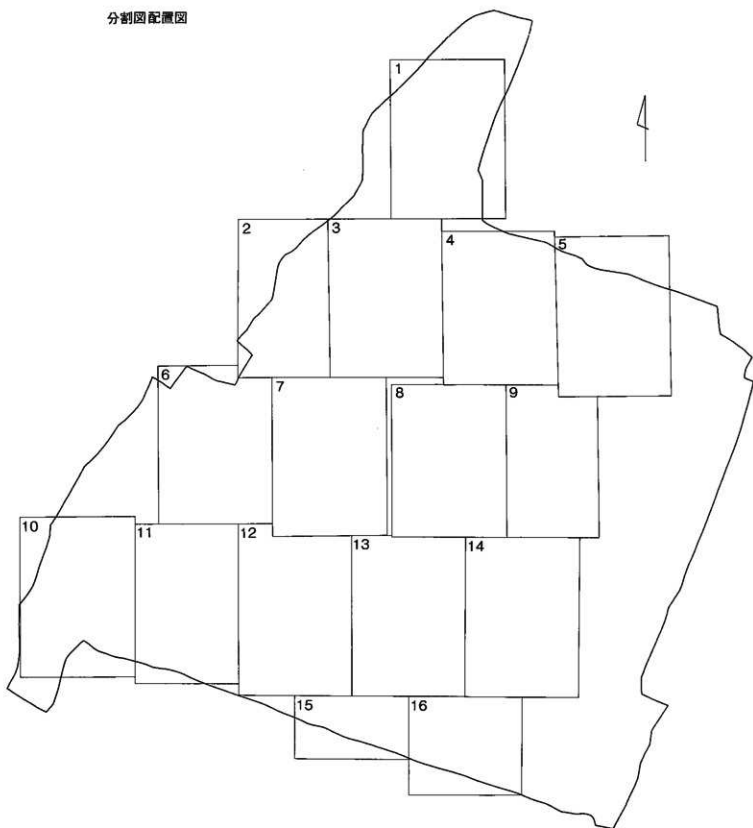


第38図 平安時代の遺構(27)

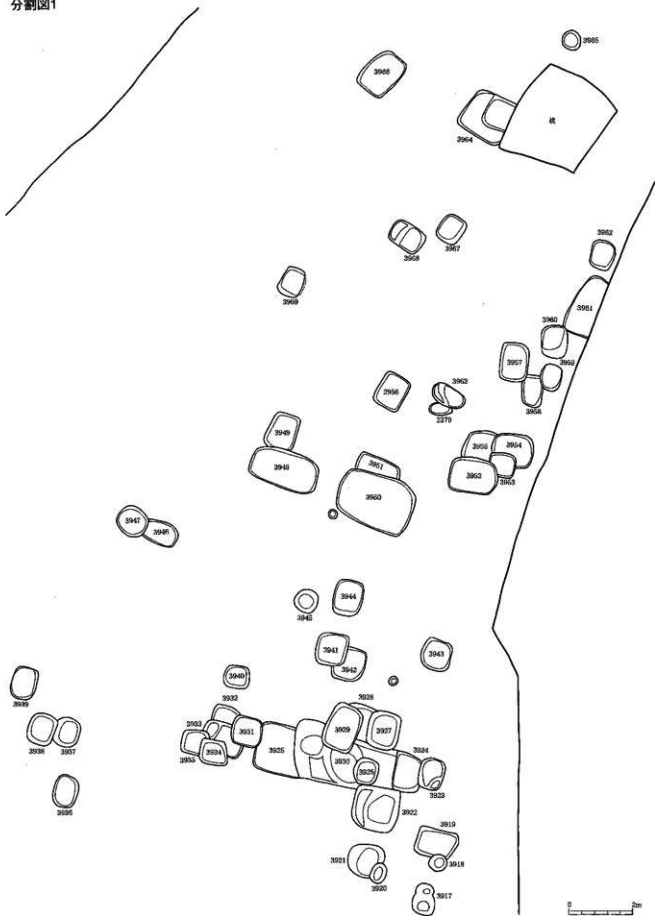


第39図 平安時代の遺構(28)

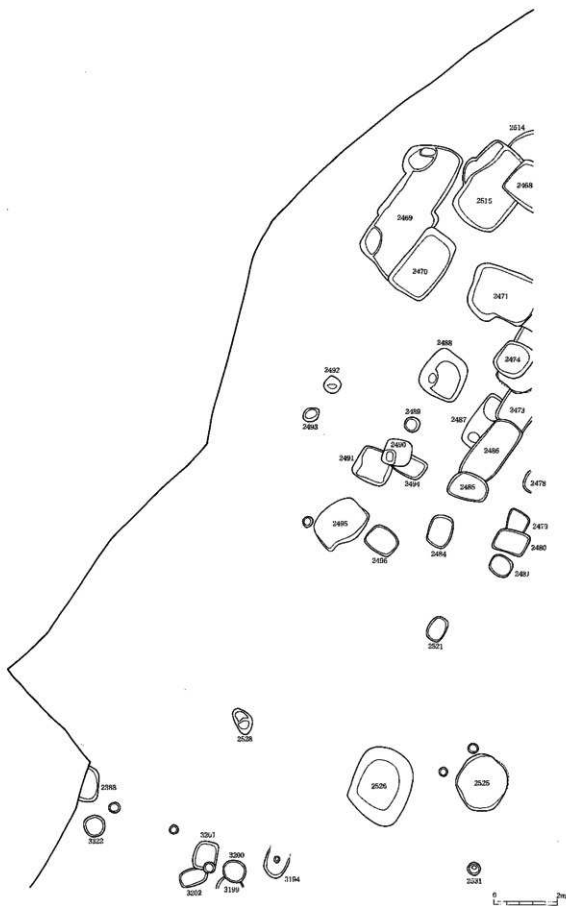
分割図配置図



第40図 中世の遺構(1)

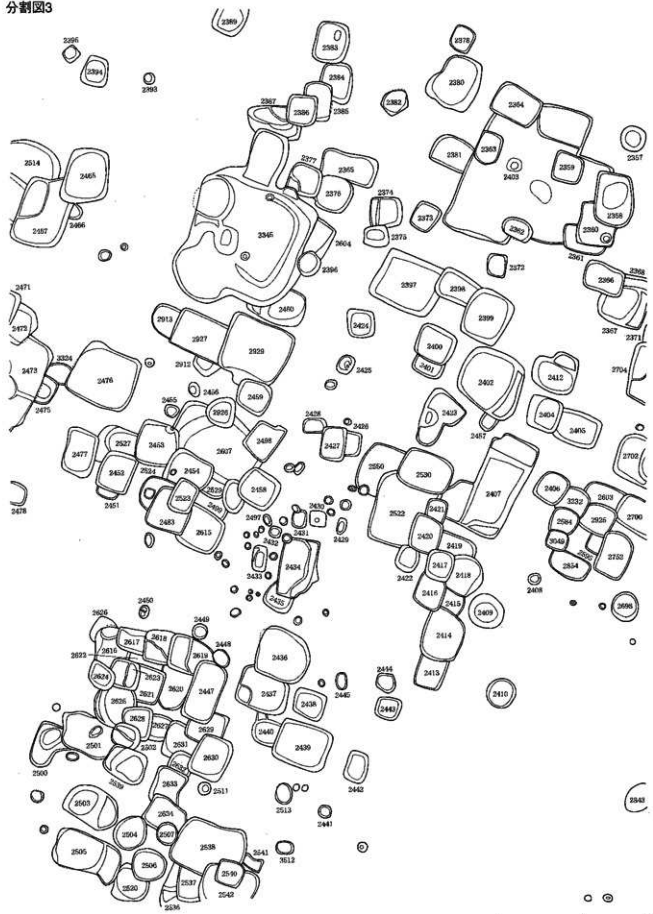


第41図 中世の遺構(2)

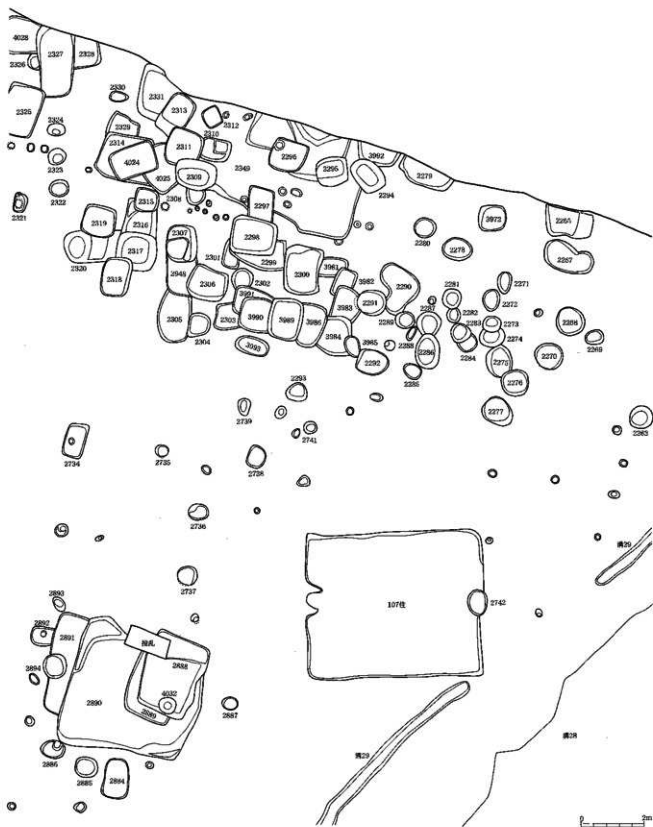


第42図 中世の遺構(3)

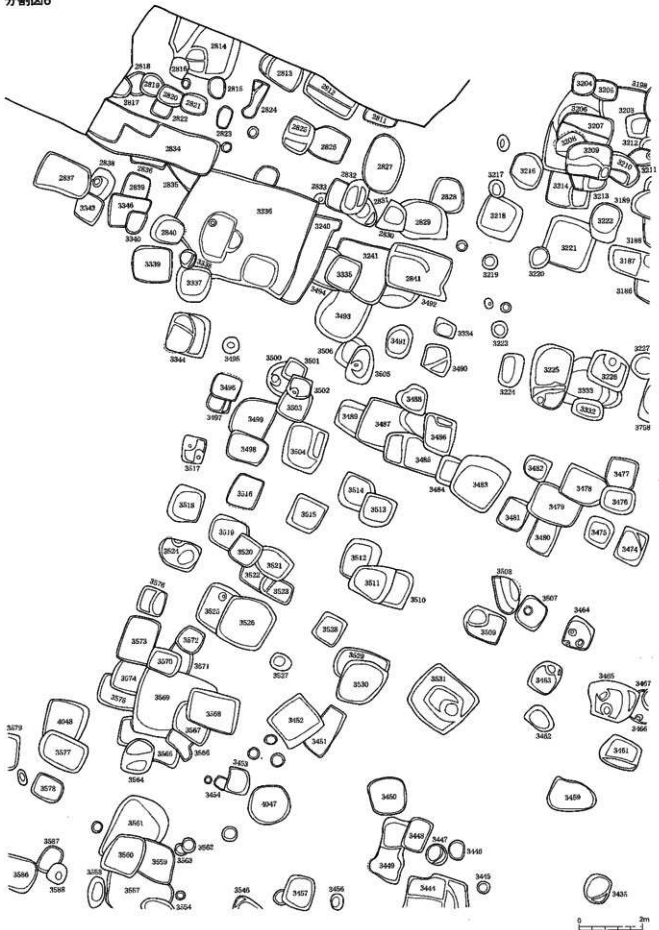
分割図3



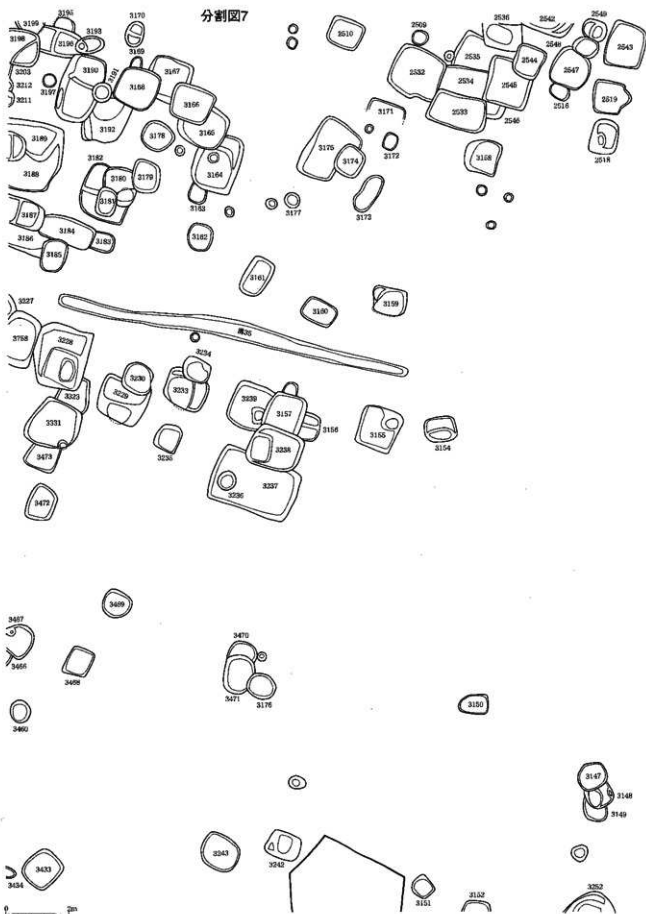
第43図 中世の遺構(4)



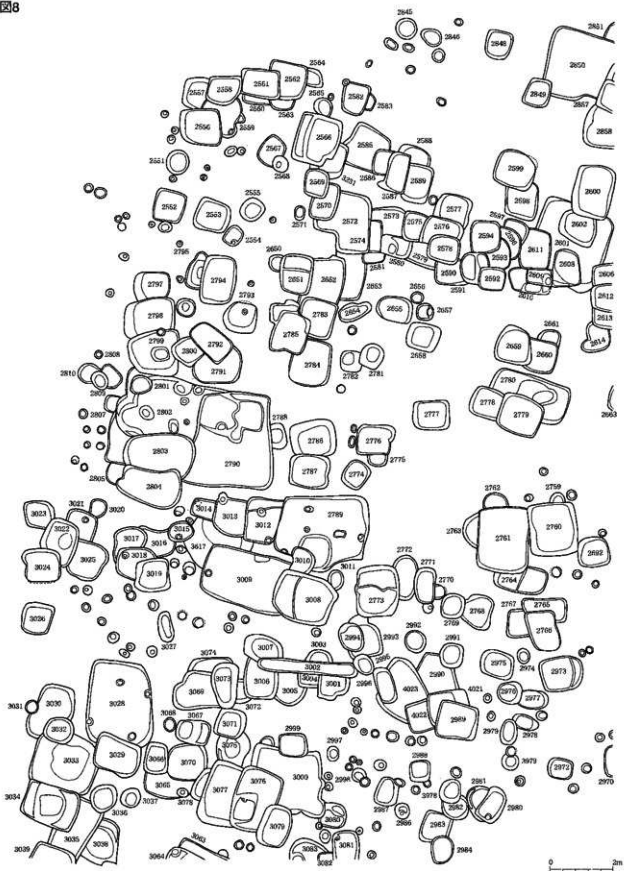
第45図 中世の遺構(6)



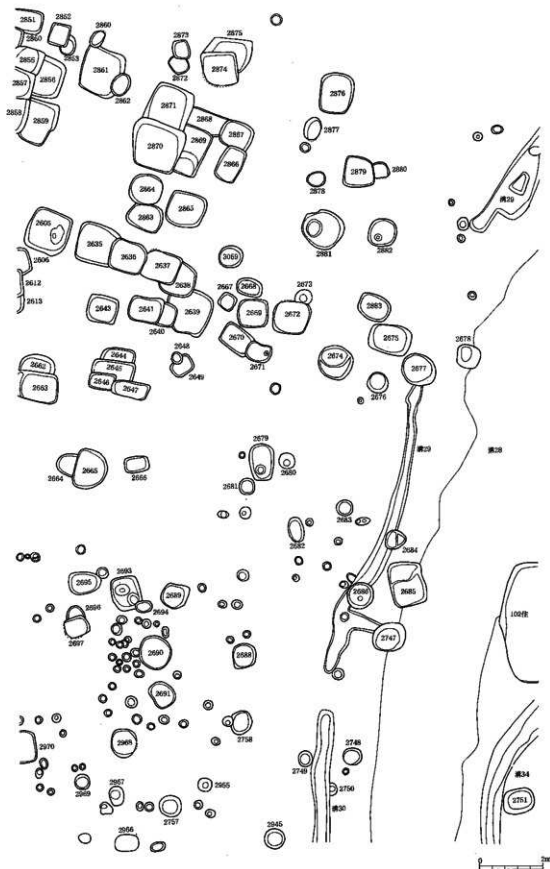
第46図 中世の遺構(7)



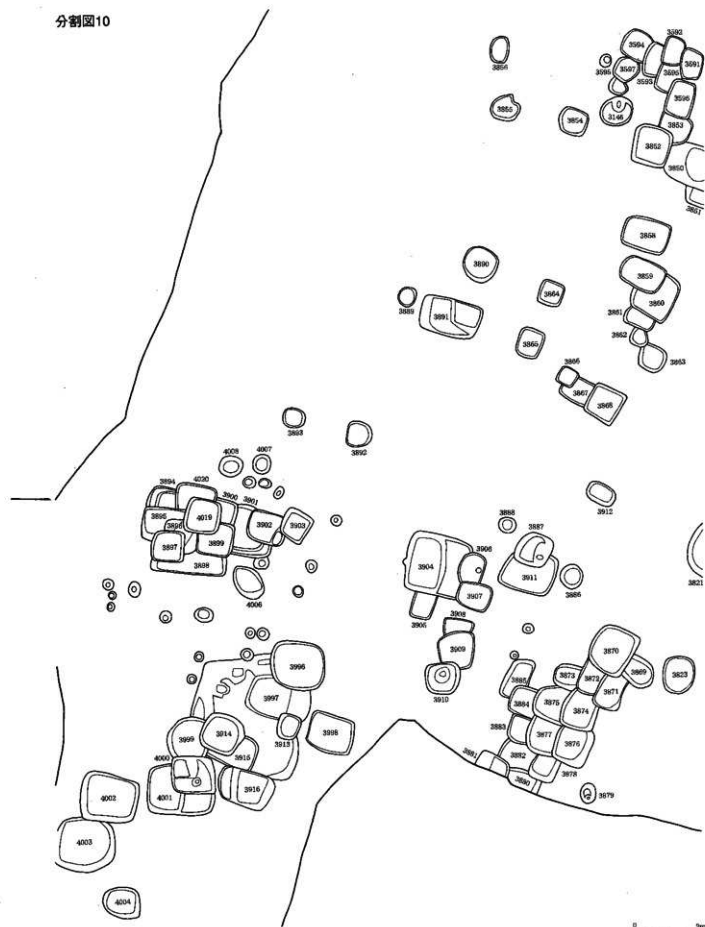
第47図 中世の遺構(8)



第48図 中世の遺構(9)

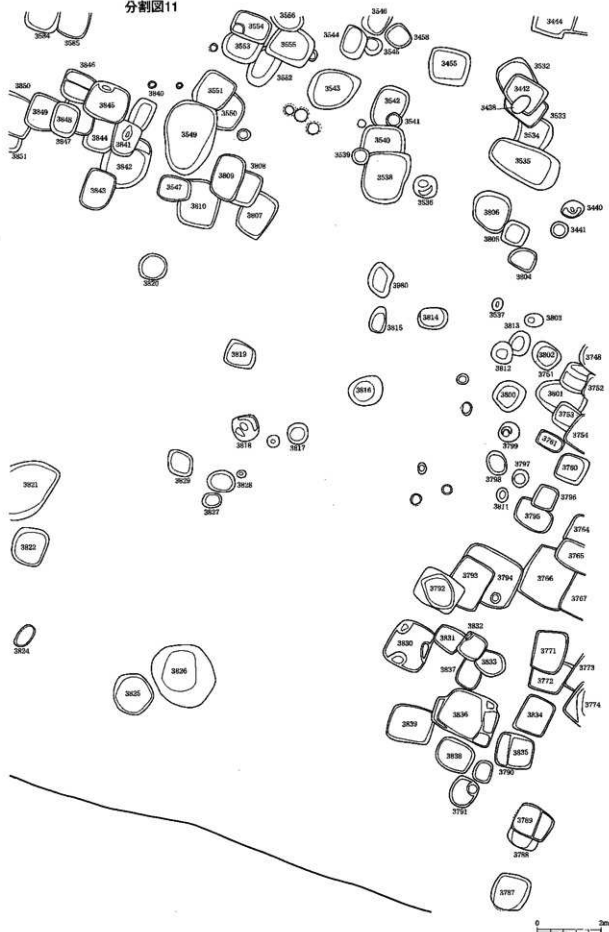


第49図 中世の遺構(10)

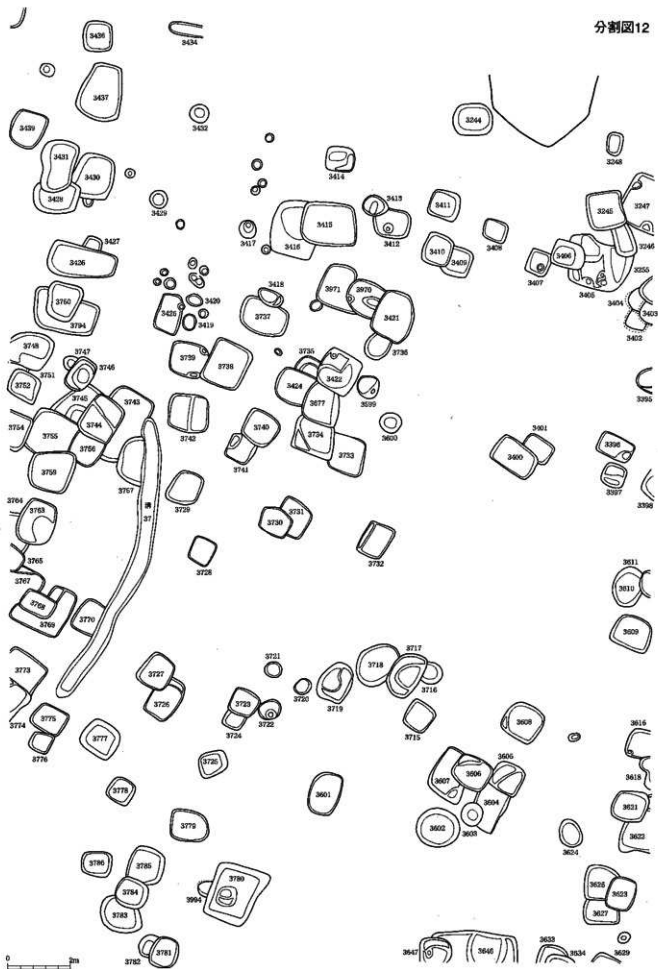


第50図 中世の遺構(11)

分割図11

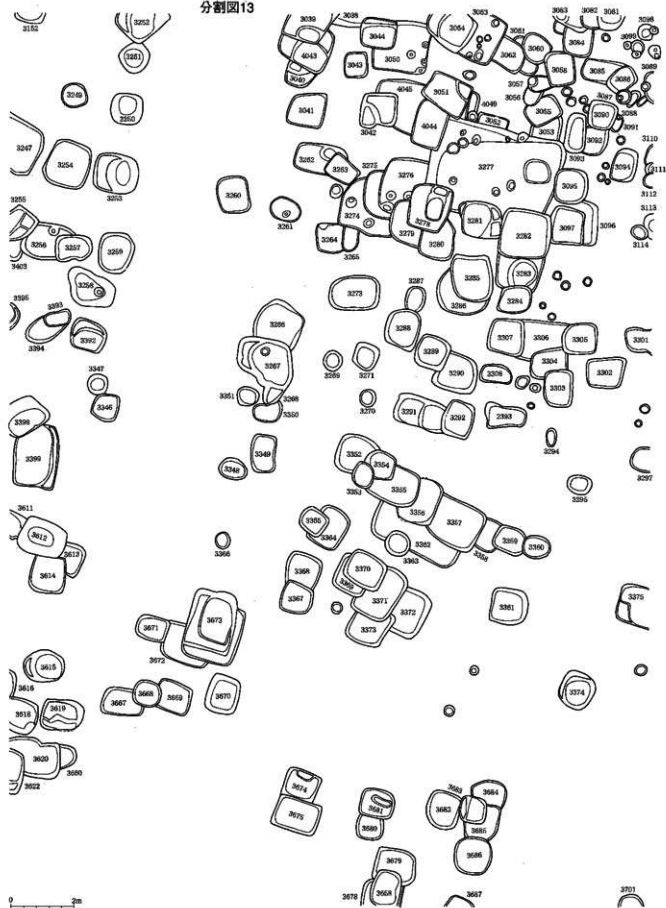


第51図 中世の遺構(12)



第52図 中世の遺構(13)

分割図13

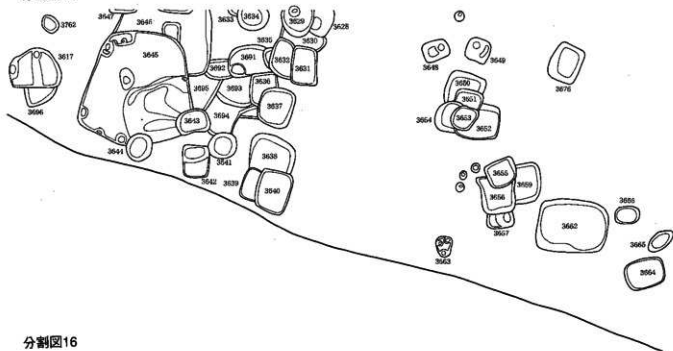


第53図 中世の遺構(14)

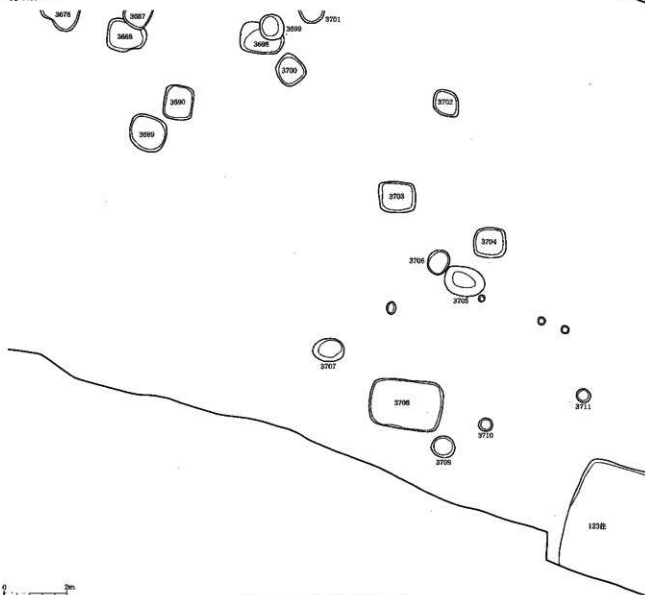


第54図 中世の遺構(15)

分割図15

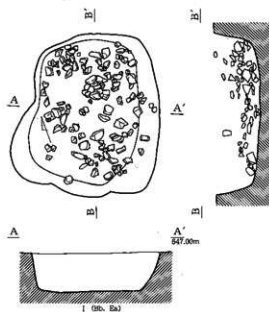


分割図16

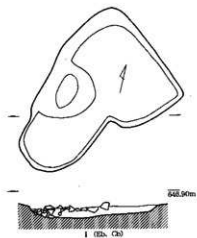


第55図 中世の遺構(16)

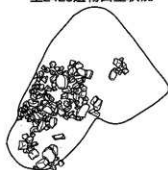
土坑2380



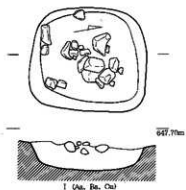
土坑2423



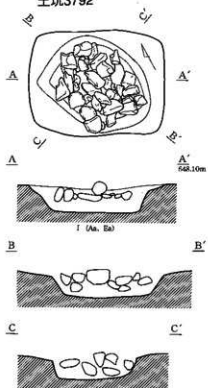
土坑2423遺物出土状況



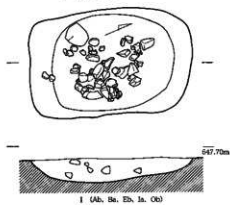
土坑3637



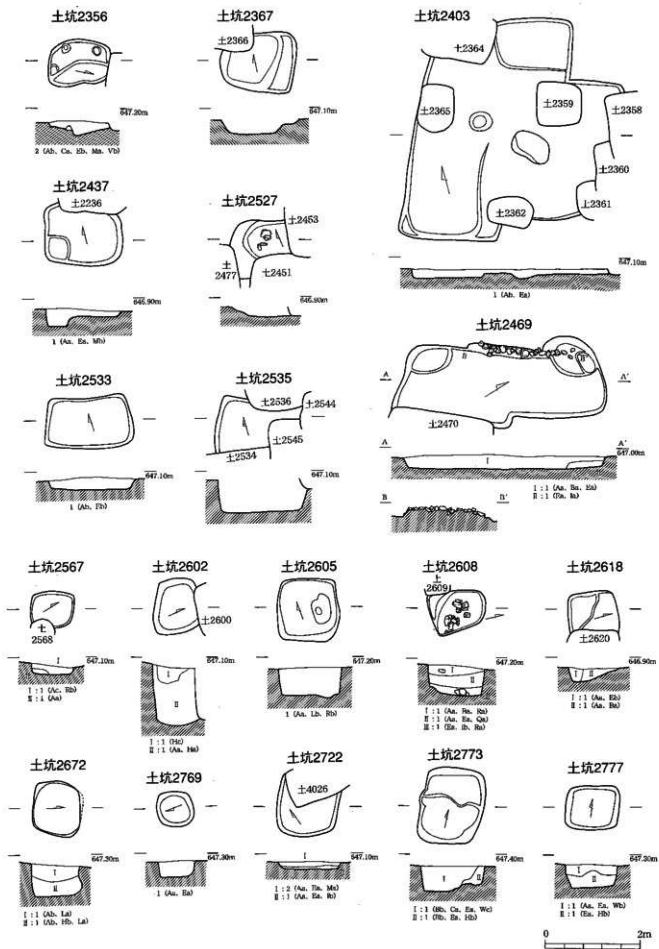
土坑3792



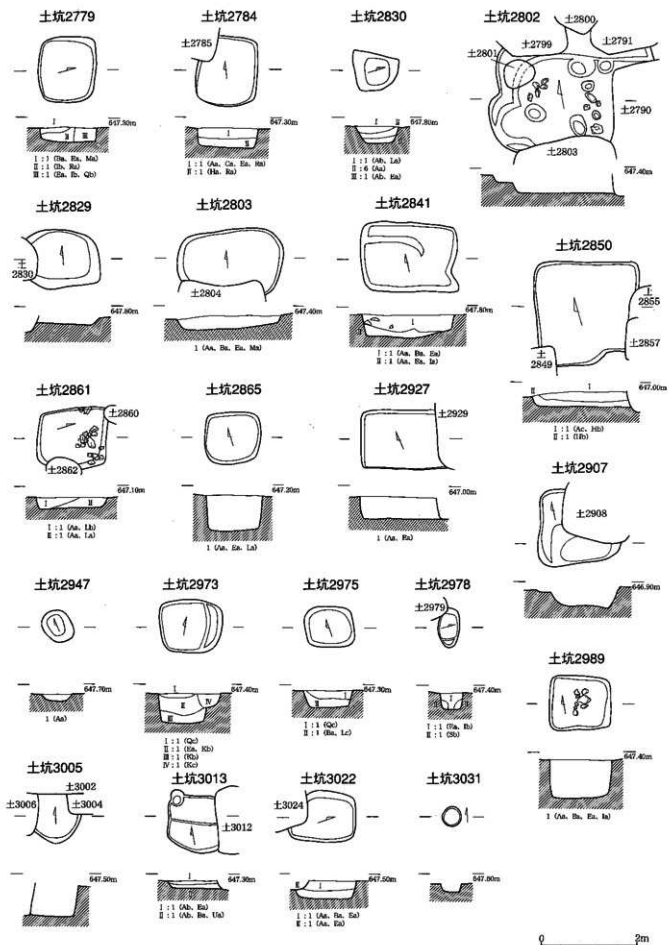
土坑3758



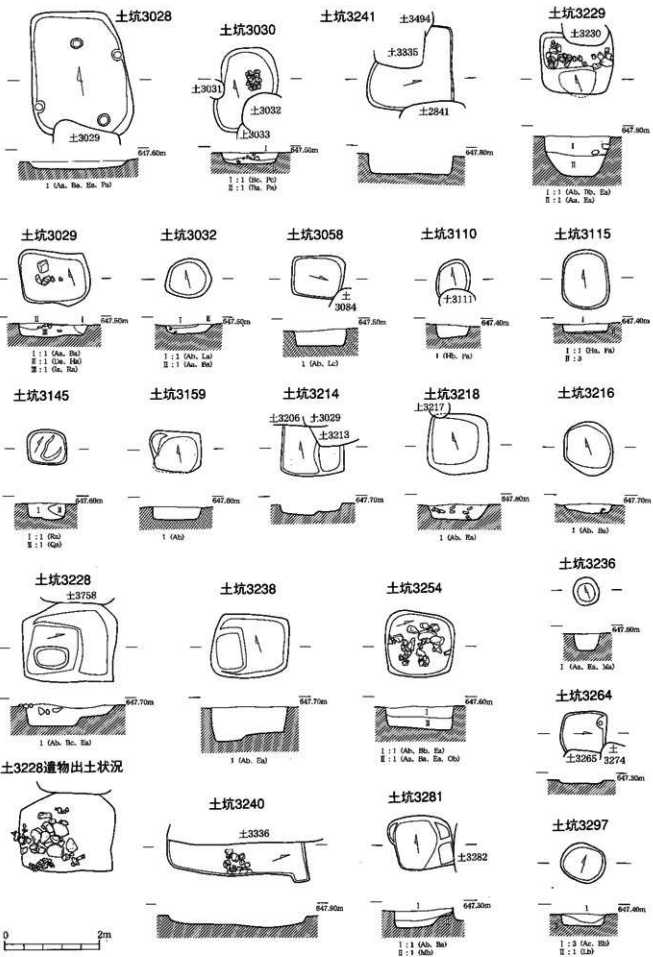
第56図 中世の遺構(17)



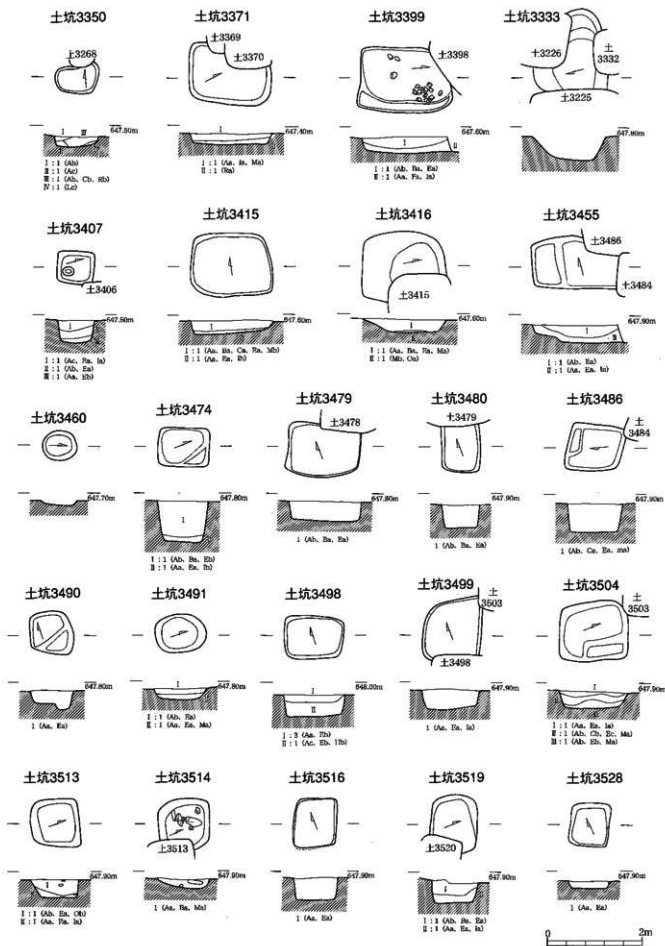
第57図 中世の遺構(18)



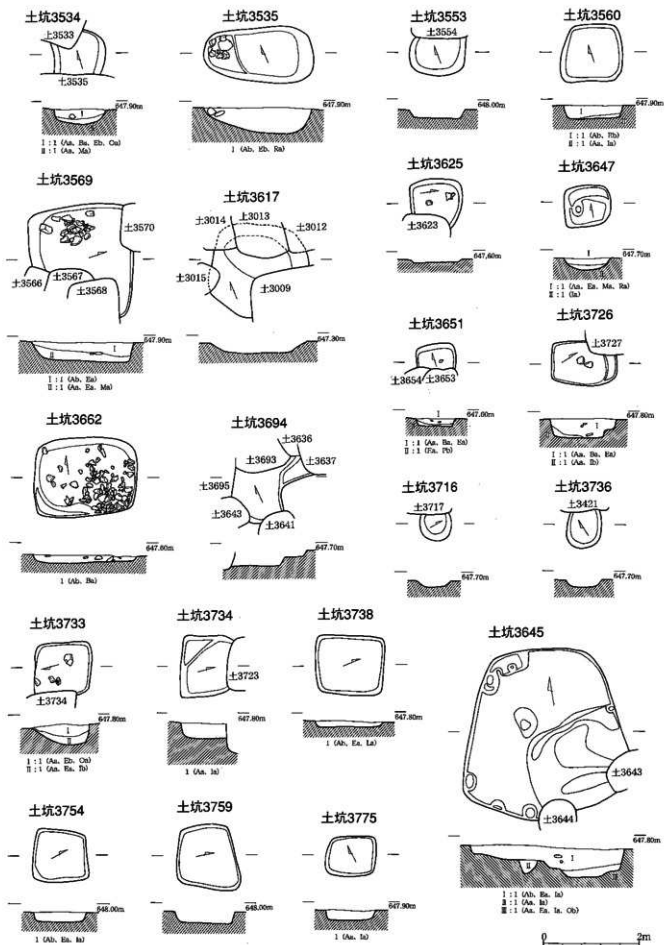
第58図 中世の遺構(19)



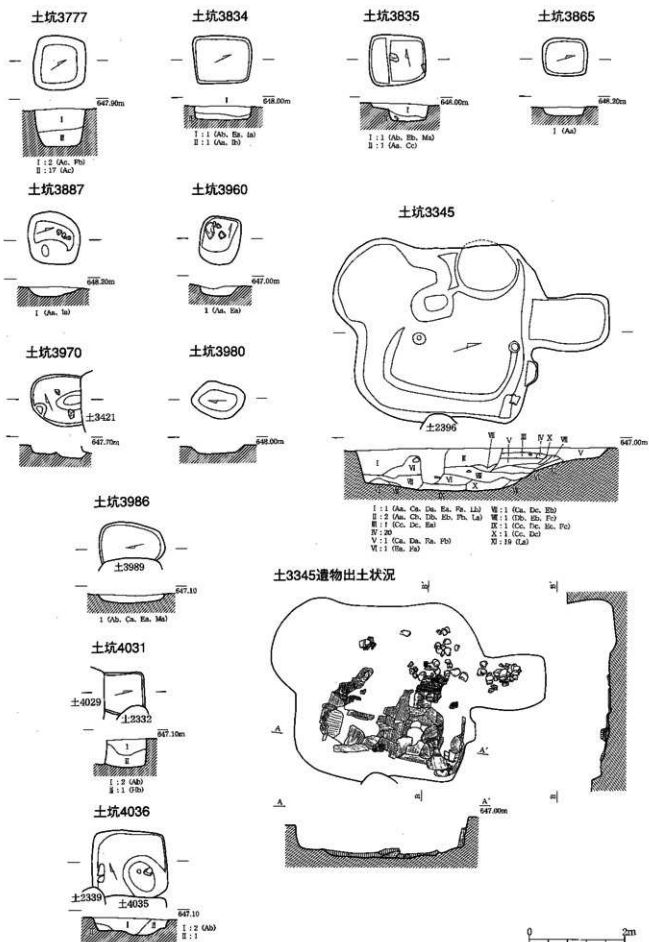
第59図 中世の遺構(20)



第60図 中世の遺構(21)



第61図 中世の遺構(22)



第62図 中世の遺構(23)

V 出土した遺物

1 土器・陶磁器・土製品

(1) 弥生時代の土器 (第64・98図)

3C区を中心に弥生時代中期前半の遺物が少量出土している。これらは当該期の土坑および平安時代の住居址の覆土中あるいは検出面からの出土である。本報告ではそれらの中から3点を図化、71点を拓影でそれぞれ提示した。これらは内容的には南接する境窪遺跡出土資料と同一であり、比較的短い時間幅の中に位置付くものと考えられる。以下、境窪遺跡報文での分類に倣い土器群を概観したい。なお、例言にも記したが、提示資料の器種・器形・紋様要素は図に併記している。

提示資料の器種内訳は壺(1～6・14・17～20・22・24・28・32・33・35～38・41・42・44・48～50・54～56・58・64・68・69・90)、甕(7～13・15・16・21・23・25～27・30・31・39・40・43・45～47・51～53・57・59～63・65～67・70・71・91)、ミニチュア土器(89)である。

これらはすべて有紋であるが、小破片が大半のため、全体の構成が窺えるものは少ない。基本的な文様要素は刺突・キザミ、条痕紋、沈線紋、櫛描紋、縄紋、赤彩がみられる。キザミは甕の口縁部に多用される。条痕紋には斜条痕、縦条痕、横条痕、縦羽状条痕、横羽状条痕があり、中には原体に太い櫛状工具を用いるものもある。沈線紋は主に壺に見られ、弧状、円形、三角形などの構図がみられる。櫛描紋は太い櫛状工具による短線紋、直線紋、波状紋、円弧状紋がある。縄紋は壺に多く見られ、沈線紋と組み合わせる。

次に実測図を提示した2点について簡単に触れておく。90は壺の頸部から胴上部で、頸部紋様帯上段に三角形連繫紋、下段に直線紋を巡らす。肩部紋様帯は全貌が不明だが、直線紋、円形紋など沈線紋による構図が描かれるようである。いずれの紋様帯も粗い縄紋を地紋としている。91は全形の判明する甕で、短く外反する口縁部外面に交互方向の櫛描斜行短線紋を1段巡らし、以下胴部は同工具による右下がりの斜条痕を下半部まで施す。ミニチュア土器(89)は当該期の壺の器形・紋様を忠実に表現している。

参考文献

松本市教育委員会 1998 『境窪遺跡、川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』

(2) 平安時代の土器・陶器 (第63・65～96図)

今回の調査では、非常に多量の土器・陶磁器が出土した。住居址・土坑・ピット・溝址の各遺構および遺構外の検出面からも出土しており、実測個体数は1,364点を数える。種別は、須恵器、軟質須恵器、土師器、黒色土器A・B、灰釉陶器、緑釉陶器がみられる。これらの土器の種別・器形および編年観については、文献1の松本平の土器分類および編年に則り、遺物整理を行った。以下、出土した土器の種別と各土器群の様相を時期別に記述していく。

ア 土器・陶磁器の種別・器形

今回の調査で発見された土器・陶磁器の種別は、須恵器・軟質須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。このうち緑釉陶器は、出土量が51点と非常に多く、他の集落遺跡とは異なった様相を呈している。以下、これらの土器群の種別・器形の概要をみてみたい。

土師器 食器では、杯A・椀・甕B、煮炊具では甕B・小型甕B・小型甕D・羽釜A・足鍋がある。1122は在地産とは異なる、他系統の小型甕と考えられる。貯蔵具は存在せず、用途不明品として円筒形土器がある。

黒色土器 内面のみ黒色処理された黒色土器Aが、大半を占め、内外面黒色処理された黒色土器Bは少なく、4点のみ(610・1049・1215・1540)である。器種は、杯A・椀・皿B(高台が無い皿1399の1点あり)・鉢Aがみられる。すべてロクロ成形で、底裏には回転糸切痕が残る。貯蔵具は、内外面黒色処理された長頸壺Bがみられる。煮炊具はみられない。

須恵器 食器では、杯Aのみ。貯蔵具は、長頸壺A・四耳壺・甕Aがみられる。全体的に、出土量は少ない。

軟質須恵器 杯Aのみがみられる。

灰釉陶器 食器では、椀・輪花椀・皿・輪花皿・段皿・稷皿、貯蔵具では広口瓶・四足壺(脚部のみ・報告掲載№1116)の器種がみられる。煮炊具はみられない。

緑釉陶器 総出土点数51点を数える。すべて遺構内からの出土で、45点が住居址からの出土である。このうち、37住からは12点が出土しており、他の遺構に比して際立って出土量が多い。このほか31・32・37・38・39・48・53・57・63・65・70・74・87・98・102・124住から出土している。これらのうち、図示できたものは47点である。出土した器形は、椀(236・239・234・238・235・233・237・399・8・287・288・290)・輪花椀(240)・皿(1046・1047・286)・段皿(236・230・229・235・398・397)・輪花稷皿(564)・香炉(400)・長頸壺(845)がみられる。このうち香炉(400)と長頸壺(845)は、生地のみで施釉されていないものである。400の香炉は、硬質で暗灰色の生地で、器面全体にミガキ調整がなされている。脚部には、宝珠形の透かしが4単位穿たれている。本遺跡から出土した緑釉陶器は、8～11期(9世紀末～10世紀末)の土器群と相伴している。これらは、胎土・調整・釉調などから、A～D類に分類できる。A類は、円盤状の削り出し高台となるのが特徴である。胎土は暗灰色の軟質、器面にはヘラミガキが観察されない。釉は、淡黄緑色で、全面に施釉されているが、胎土が軟質のため、剥落が激しい。1120が相当する。B類は、体部をヘラミガキ調整するのが特徴である。胎土は灰白色の硬質で、釉調は淡黄緑色か淡緑色などの淡い発色で、ガラス質の良好な仕上がりになっている。施釉は、全面にされている。7～9期の遺構から11点(40・232・234・237・238・239・565・757・867・870・1335)が出土している。C類も全面にミガキ調整されているが、胎土は青灰色から暗灰色の硬質で、濃緑色で光沢のある釉が掛けられている。本遺跡からは、最も出土量が多く、33点(8・37・38・39・229・230・231・233・235・236・240・286・287・288・290・397・398・399・400・564・594・723・868・869・871・1046・1047・1336・1341・1342・1500・1513)がみられる。D類は、高台の内側に段が付く有段輪高台が特徴である。ミガキ調整はされておらず、釉は全面に掛けられている。胎土は、赤褐色～黄褐色のものと、青灰色のものがみられる。1006・1490の2点がみられる。10～13期の遺構から出土している。(註1)

イ 各時期の土器様相および代表的な土器群の概要

本遺跡出土土器群は、文献1の土器編年に基づいて概観すると、おおむね7期～14期(9c中頃～11c末)の範疇で捉えられる。このうち出土量が多く、主体となるのは7～12期である。以下、各時期の土器様相と、代表的な出土土器群について記述する。

(ア) 7期(9c中頃～後半)

44・47・68・78・79・86・122住出土土器群が該当する。食器では、須恵器杯A・軟質須恵器杯A・黒色土器A杯A・椀、灰釉陶器椀・皿、貯蔵具では須恵器長頸壺・甕、煮炊具では、土師器甕Bで構成される。灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式のもののみがみられる。

第68号住居址出土土器群(986～997)

食器は、黒色土器皿B(988・989)、黒色土器杯A(986・987)、黒色土器A椀(990)、軟質須恵器杯A(993・994)、須恵器杯A(992)、灰釉陶器椀(995)で構成される。灰釉陶器椀は、刷毛塗り施釉されたもので、光ヶ

丘1号窯式に比定される。992の須恵器杯は、底径が小さく、体部が上方に大きく開く形状である。黒色土器A杯Aの986と軟質須恵器杯Aの993には墨書がみられる。貯蔵具は少なく、灰釉陶器長頸壺(996) 1点のみ。煮炊具についても、土師器甕B(997)の1点のみしか図化できなかった。

(イ) 8期(9c後半)

40・46・55・65・67・73・75・93・99・121・123住出土土器群が該当する。食器は、土師器(杯・椀)、黒色土器A(杯・椀・皿)・軟質須恵器(杯)・灰釉陶器(椀・皿)・緑釉陶器(椀・皿)で構成される。灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式が多くみられるが、その他、特殊品として、67住より、灰釉陶器の印刻花文のある蓋と稜椀のセット(927・931)が出土している。

第65号住居址出土土器群(821～878)

食膳具は、土師器杯A(839・840・841・842・843・844・845・846)・椀(847)、黒色土器A杯A(821・826・829・830・831・832・822・823・828)・椀(833・824・827)・鉢A(834)、軟質須恵器杯A(849)、灰釉陶器椀(855・865・860・859・852・858・866・864)・皿(850・856・863・853・857・862・851)、輪花皿(861)、緑釉陶器椀(869・871)・皿(870)・段皿(868・867)、で構成される。貯蔵具は、須恵器壺類(855)、灰釉陶器長頸壺(873)、緑釉陶器長頸壺(874)である。煮炊具は、土師器甕B(878・876・875)、甕D(837・838)、小型甕D(836)、足鍋(835)がみられる。墨書のあるものは、黒色土器A杯Aの826・829の2点がある。839の土師器杯Aには、口縁端部および内面見込み部にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。また、内面には、長さ約5cm、幅約1cmにわたり灯芯の痕跡と思われる部分が観察できる。828の黒色土器A杯Aには、内外面に漆が付着している。874の長頸壺は、灰白色の軟質胎土のもので、緑釉の施釉されていない生地のままの製品と考えられる。

(ウ) 9期(10c前半)

32・37・48・58・63・69・76・96・98住出土土器群が該当する。食器では、黒色土器Aの割合が急激に減少し、土師器杯・椀、灰釉陶器する。灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式が主体を占める。37住出土土器の中には、墨書土器が大量にみられるが、記された文字には、則天文字とみられるものも含まれる(110・112・114・111・113)。

第32号住居址出土土器群(10～43)

食膳具は、土師器杯A(13・11・12・10・14)・椀(16・17・15)・盤A(18)、灰釉陶器椀(34・35・27・33・36・26・25・24・23・22)・皿(21)、緑釉陶器椀(40・38・37・39)がみられる。煮炊具は、土師器甕B(41・42・19)・甕C(43)・小型甕D(31・32)がある。貯蔵具は、灰釉陶器広口瓶(30・28・29)・小瓶(20)が出土。灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式とみられるものが混在している。緑釉陶器は、いずれも素地が灰色で硬質な焼成である。また、器面には細かなミガキが施されている。

(エ) 10期(10c中頃)

31・38・39・49・59・70・72・90住出土土器群で構成される。食器は、土師器杯・椀、貯蔵具は、黒色土器B長頸壺、灰釉陶器広口瓶で構成される。灰釉陶器は、大原2号窯式～虎渡山1号窯式がみられる。

第70号住居址出土土器群(1007～1050)

食膳具は、土師器杯A(1010～1027)・椀(1008・1009・1028～1032)、黒色土器A椀(1007)、灰釉陶器椀(1034～1036・1040～1042・1045)・皿(1038・1039・1044)・輪花皿(1037)、緑釉陶器椀(1047)・皿(1046)で構成される。煮炊具は、図化できたのは小型甕D(1050)のみであるが、他に破片資料で甕Bがみられる。貯蔵具は、黒色土器B長頸壺(1049)、灰釉陶器広口瓶(1048)・短頸壺(1043)がみられる。1037・1044の底裏、1045・1033の見込み部には墨痕がみられ、転用碗として使用されたものと考えられる。また、1036の口縁部にはタールの付着がみられ、灯明具として使用されたものと推定される。

(オ) 11期(10c後半)

42・51・62・77・102・124住土器群で構成される。食膳具は、灰軸陶器椀・皿、土師器杯・椀・盤B、黒色土器A椀で構成される。黒色土器A椀は、大小2法量に分かれる。灰軸陶器は、虎渓山～丸石段階のものが主体を占める。特殊品としては、102・124住からは緑釉陶器、77住から灰軸陶器四足壺が出土している。

第62号住居址出土土器群(771～800)

食膳具は、土師器杯A(784・785・781・780・782・783)・椀(788・786・787)・盤B(789)・黒色土器A椀(779・777・776・778・774・775・773)、灰軸陶器椀(792・793・794)、輪花皿(791)がある。土師器杯の口径は、10.2～10.4cmと小形化したものである。煮炊具は、土師器足鍋(795)・甕B(800・798・790)・小型甕D(797・796)羽釜(799)、貯蔵具はみられなかった。土師器杯Aのうち784・785は、口縁の一部をヘラ状工具あるいは指で押さえて屈曲させている。788の土師器椀は、底部が穿孔されている。灰軸陶器は、虎渓山1号様式～丸石2号様式期のものとみられる。

(カ) 12期(11c前半)

41・66・88住土器群が相当する。食器のうち、土師器杯・椀は大小2法量に分化している。灰軸陶器は、虎渓山～丸石段階の椀・皿がみられる。黒色土器では、内面黒色(黒色A)と内外黒色処理(黒色B)された椀がみられる。煮炊具では、甕がみられる。

第41号住居址出土土器群(441～460)

食膳具は、土師器杯・椀・盤B、黒色土器A椀、灰軸陶器椀・皿で構成される。該期では、土師器杯A・土師器椀・黒色土器A椀において、大小2法量みられるようになる。土師器杯Aでは、口径10.4～10.8cmの小法量のもの(446・449・447・448)と口径12cm前後の大法量のもの(445)がある。土師器椀では、口径11.3cm前後のもの(452)と、14.2～14.5cmのもの(450・451・453)の2法量みられる。また、黒色土器A椀も同様に、口径12.2cm前後のもの(444)と口径15.2cm前後のもの(442・443・441)の2法量みられる。

灰軸陶器は、椀(456・454・455)と皿(457)がある。煮炊具は、小型甕D(459)、甕(460)のみ。

第66号住居址出土土器群(879～895)

食膳具では、土師器杯A(882・883・884)・椀(887・886・885)、黒色土器A椀(880・881・879)がみられる。煮炊具では、土師器甕B(892)・小型甕D(894・893・891・890)・羽釜(889)・足鍋(895)で構成される。貯蔵具は出土していない。

(キ) 14期(11c後半)

61住出土土器群が該当する。

第61号住居址出土土器群(766～770)

出土量は非常に少ない。すべて食膳具で、土師器杯A(766・767・768)・椀(769)・盤B(770)である。土師器杯Aは口径11.2～12.3cmと小型化したものである。貯蔵具・煮炊具は出土していない。

ウ 文字資料

今回の調査では、墨書土器・転用硯などの文字関係資料が多量に出土した。出土点数の内訳は、墨書土器38点、転用硯23点である。以下、概略を記載していく。

(ア) 墨書土器

墨書土器は、総数38点が出土した。出土遺構の内訳は、堅穴住居址が最も多く19軒から35点、土坑・ピット・溝からは、各遺構から1点ずつが出土した。このうち特に出土点数が多かったのは37住で、7点が出土している。文字の種類別では「尙」が8点(32・37・88住)と最も多い。他に、判読できたものとしては、「全」(2点:54・70住)・「井」(3点:39・41住、P798)・「定」(1点:72住)・「王」(1点:溝24)・「中」(1点:37住)・

「友」(1点:62住)・「赤」(1点:67住)がみられる。最も出土量の多い「瓦」は、下神遺跡でも多量に出土している文字で、平川南氏などの指摘から、則天文字と考えられる。また、溝24から出土した「王」の文字は、近隣に位置している三間沢川左岸遺跡(文献1)から多量に出土しているもので、本遺跡と三間沢川左岸遺跡との関連を考える上で注目されるものである。

(イ) 転用硯

灰釉陶器皿・椀の見込みあるいは底部外面、またはその両方に墨痕のあるものを転用硯と判断した。確認した23点は8期～12期の住居址に伴うが、そのほとんどである20点は8期～10期に帰属する。これらに関連して37住からは底面に朱(墨)が付着した土師器椀が出土している(117)。

註

- 1 緑釉陶器の産地は、A類が京都産、B類が東海産(駿投系)、C類が東海産(尾北系)、D類が近江産と考えられる。美濃産とみられるものは、今回の調査ではみられなかった。

参考文献

- 1 長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編」
- 2 松本市教育委員会 1988 「三間沢川左岸遺跡(Ⅰ)」

(3) 中世の土器・陶磁器 (第97・98図)

中世の土器・陶磁器は、すべて4B区の土坑群から出土している。総量95点出土し、このうち88点を図化し、提示した。出土した土器・陶磁器の種類は、国産陶器と輸入磁器に大別できる。国産陶器は、東海産山茶椀、古瀬戸系陶器、珠洲産、常滑産、在産須恵質擂鉢がみられる。輸入磁器は、中国産白磁・青磁がみられる。出土遺物の時期的な様相は、中世前半(13c～14c)から中世後期(15c～16c)にわたり、13世紀～16世紀の長期間にわたる。以下、主だった遺構ごとに出土資料の様相を記述したい。

主な遺構出土土器・陶磁器の様相

土2356 古瀬戸底卸目皿(1)と龍泉窯系青磁蓮弁文碗(2)が出土した。1の古瀬戸系陶器底卸目皿は、高台内底裏に卸目がみられる。内面見込み部には、櫛描文が僅かに残る。釉は、灰釉が全面に施釉されている。時期は古瀬戸前期様式(13c後半)のものとみられる。2の青磁碗は、外面に蓮蓮弁文が施されている。

土2403 4の龍泉窯青磁蓮弁文碗(I-5類)が出土した。13c前半のものである。

土2533 古瀬戸灰釉袴形唇唇炉が出土している。灰釉が施釉され、底裏に脚部が貼り付けられている。古瀬戸後期様式(15c)に比定される。

土2567 7の龍泉窯青磁皿(I-2類)が出土。13c代に比定される。土2601からは、古瀬戸灰釉四耳壺(12)と中世土師器皿(11)が出土。12は、古瀬戸中期様式(13c末～14c初)に比定される。

土2602 8の龍泉窯青磁蓮弁文碗(I-5類)が出土。土2834からは、21の白磁碗と22の常滑産甕が出土。21は、口縁部の釉を掻きとっている白磁碗Ⅹ類(口禿)(13c中～14c初)である。

土2843 白磁合子の蓋(20)が出土した。型作りで精巧・上質な作りである。器面には、精緻な凸文がみられる。22は、常滑産甕の口縁である。口縁の断面がL字状の形態をとり、口縁部縁帯幅は1.6cmを測るため、常滑編年の5型式(13世紀前半)と考えられる。常滑産甕は、他に土3110から38が出土している。口縁部縁帯は下方に垂下しているもので、常滑編年の8型式と考えられる(38)。

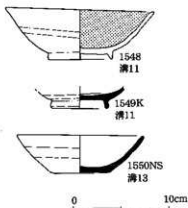
土3228 龍泉窯青磁碗Ⅲ-1類(27)と内耳鍋(28・29)が2点出土している。27の青磁碗は、高台端部(疊付)以外は全面に施釉されており、施釉の後に高台疊付の釉が掻きとられている。また、露胎部分と施釉された部分の境は、鉄分により赤く発色している。器壁は薄いものの、釉は厚く掛けられている。13c中葉～

14c初頭に位置付くものか。28の内耳鍋は、口縁部に穿孔がみられるが、破片資料のため単位は不明である。

土3238 古瀬戸灰釉折縁深皿が出土。脚部は貼り付け成形で作られている。土3254からは、33の珠洲産壺類の体部破片が出土。外面は、櫛描波状文がみられる。13c代の所産とみられる。土3345では、42のロクロ成形の中世土師器皿が出土した。15世紀代ものと考えられる。土3482からは、52の白磁合子の蓋が出土している。土2843出土品(20)に類似したもので、型作り成形で精巧・上質な作りで、器面には精緻な凸文がみられる。

土3569 59の白磁皿E類が出土している。底部は露胎である。その他、小片のため図化していないが瀬戸美濃産大窯1期の灰釉製品の小片が出土している。全般に16c前半に位置付くものである。

土3647 在地産須恵質擂鉢(63)が出土している。淡灰色の胎土で、内面に摺り目がみられる。14c代の所産と考えられる。



第63図 平安時代の土器・陶器(1)

土3726 古瀬戸灰釉平碗(65)・古瀬戸灰釉皿(64)・古瀬戸四耳壺小片(図化不可)が出土。いずれも15世紀代のものである。

土3777 72は古瀬戸後期の鉄釉天目茶碗(15c代)、71は龍泉窯青磁碗IV類である。71の体部外面には、鎮蓮弁がある。

土3970 図化できなかったが青白磁梅瓶(12c中頃～後半)の小片が出土した。

土3887 15c代の古瀬戸灰釉平碗(77)が出土している。

土3986 瀬戸美濃大窯1期の灰釉丸皿(73)が出土した。15c末～16c初頭に位置付く。

土4010 手づくね成形の土師器皿が出土した。

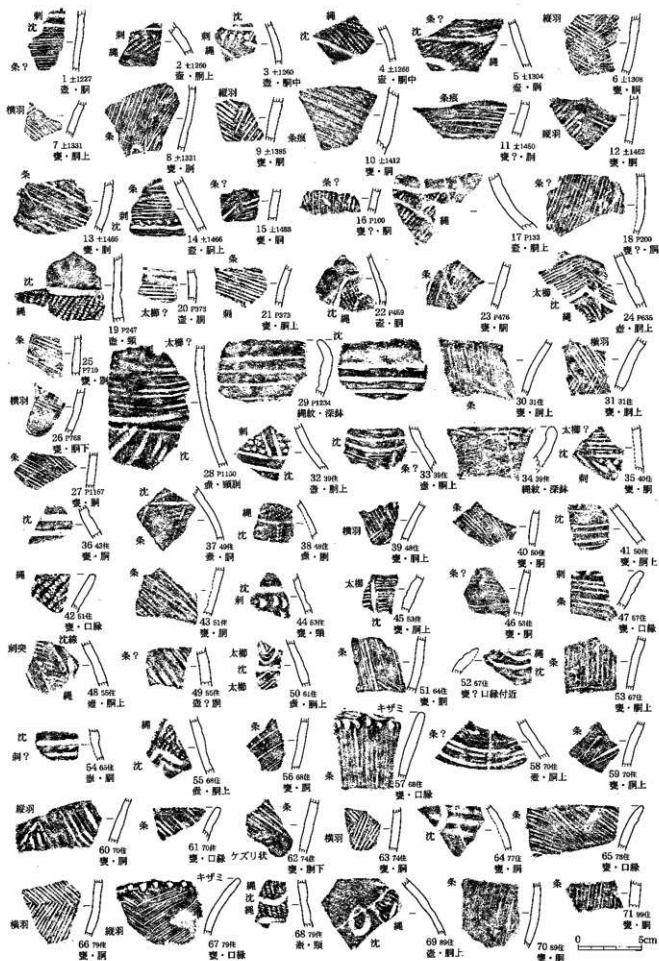
土4031 13c末～14c初頭の古瀬戸中期様式の灰釉平碗(80)が出土。溝29からは、古瀬戸灰釉卸皿(83)、白磁碗IX類(84)が出土。84の白磁碗は、高台部にも施釉されている。検出面からは古瀬戸灰釉卸皿(88)、古瀬戸天目茶碗(85)、東海産擂鉢(86)が出土した。

(4)土製品(第82・96図)

67住出土の950は板状を呈する不明土製品で、表裏ともに平坦な面を作る。一部に側面部も見られるが、表裏面に対して傾斜する。土師質を呈する。120住からは紡錘形の土錘が1点出土している(1547)。

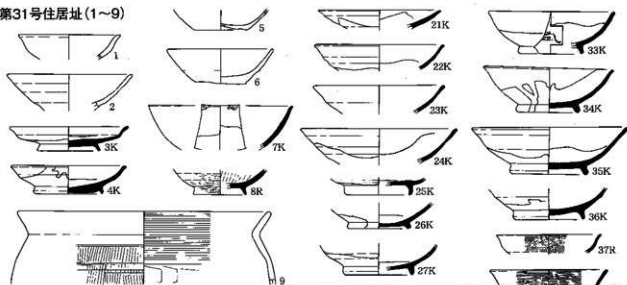
第5表 中世土器・陶磁器一覽

種別	品名	出所	年代	数量	重量	寸法	材質	備考		
1	土器	鹿野	(9.2)				灰	鹿野出土品目録、ロココナ、高野村		
2	土器	鹿野	14.6	(8.2)	1/12		青磁	ロココナ、高野村		
3	土器	吉野川		2.0			灰	ロココナ、高野村		
4	土器	吉野川		1.04			灰	内蔵込み部に印、高野村出土品		
5	土器	吉野川	丸皿	4.4			灰	鹿野、高野村		
6	土器	吉野川	有蓋平鉢	(7.2)	(2.8)	3.0 2.8	1/2	灰	鹿野、高野村	
7	土器	吉野川	蓋	わづか			灰	鹿野		
8	土器	吉野川	蓋				灰	鹿野		
9	土器	吉野川	蓋	(9.7)			灰	鹿野		
10	土器	吉野川	盆子	(2.4)			1/8	灰	鹿野、高野村	
11	土器	吉野川	盆子	(11.7)	(7.8)	2.8 1.8	わづか	鹿野、高野村		
12	土器	吉野川	皿	(9.0)			1/4	灰	鹿野	
13	土器	吉野川	皿				わづか	青磁	高野村	
14	土器	吉野川	皿	(6.9)			1/8	青磁	高野村	
15	土器	吉野川	皿	(10.3)			1/8	青磁	高野村	
16	土器	吉野川	平鉢	(14.2)			1/10	灰	鹿野、高野村	
17	土器	吉野川	皿	5.8			3/4	灰	鹿野、高野村	
18	土器	吉野川	皿	6.0				灰	鹿野、高野村	
19	土器	吉野川	皿					灰	鹿野、高野村	
20	土器	吉野川	皿	(11.2)			1/8	白磁	鹿野、高野村	
21	土器	吉野川	皿	(9.5)			1/8	白磁	鹿野、高野村	
22	土器	吉野川	皿	(9.3)			1/12	灰	鹿野、高野村	
23	土器	吉野川	皿	(12.0)			1/12	青磁	鹿野	
24	土器	吉野川	皿	(7.0)				灰	鹿野、高野村	
25	土器	吉野川	皿	(4.8)			1/4	灰	鹿野	
26	土器	吉野川	皿	(6.0)			灰	鹿野、高野村		
27	土器	吉野川	皿	(8.5)			1/8	青磁	鹿野	
28	土器	吉野川	皿	(20.0)			1/12	灰	鹿野	
29	土器	吉野川	皿	(20.0)			1/10	灰	鹿野	
30	土器	吉野川	皿	(20.0)			1/12	灰	鹿野	
31	土器	吉野川	皿	(10.2)			1/4	灰	鹿野	
32	土器	吉野川	皿	(11.2)	(6.6)	(9.2)	1/8	わづか	鹿野	
33	土器	吉野川	皿					灰	鹿野	
34	土器	吉野川	皿	(14.2)			わづか	灰	鹿野	
35	土器	吉野川	皿	(30.2)			1/8	灰	鹿野	
36	土器	吉野川	皿	(20.0)			わづか	灰	鹿野	
37	土器	吉野川	皿	(24.0)			わづか	青磁	鹿野	
38	土器	吉野川	皿	(24.0)			わづか	青磁	鹿野	
39	土器	吉野川	皿	(24.0)			わづか	灰	鹿野	
40	土器	吉野川	皿	(18.4)			1/12	灰	鹿野	
41	土器	吉野川	皿	(18.0)			1/10	灰	鹿野	
42	土器	吉野川	皿	(3.7)				灰	鹿野	
43	土器	吉野川	皿	(8.0)	3.6	2.1	4/8	鹿野	鹿野、高野村	
44	土器	吉野川	皿	(6.6)			1/8	灰	鹿野	
45	土器	吉野川	皿	(16.1)			1/12	白磁	鹿野	
46	土器	吉野川	皿	(16.0)			1/8	灰	鹿野	
47	土器	吉野川	皿	(7.4)			1/8	灰	鹿野	
48	土器	吉野川	皿	(9.6)			7/12	青磁	鹿野	
49	土器	吉野川	皿	(11.6)			1/8	灰	鹿野	
50	土器	吉野川	皿	(14.0)			1/16	灰	鹿野	
51	土器	吉野川	皿				わづか	青磁	鹿野	
52	土器	吉野川	皿	(2.6)			1/8	灰	鹿野	
53	土器	吉野川	皿	(13.8)			わづか	青磁	鹿野	
54	土器	吉野川	皿	(8.8)			わづか	灰	鹿野	
55	土器	吉野川	皿	(8.1)			1/4	灰	鹿野	
56	土器	吉野川	皿	(30.1)			1/12	灰	鹿野	
57	土器	吉野川	皿	(6.4)			1/4	灰	鹿野	
58	土器	吉野川	皿	(5.1)			1/8	灰	鹿野	
59	土器	吉野川	皿	(5.1)			1/4	灰	鹿野	
60	土器	吉野川	皿	(13.2)			1/8	灰	鹿野	
61	土器	吉野川	皿	(11.0)			わづか	灰	鹿野	
62	土器	吉野川	皿	(10.4)			2.7	1/8	灰	鹿野
63	土器	吉野川	皿	(16.0)			1/8	灰	鹿野	
64	土器	吉野川	皿	(8.7)			1/4	青磁	鹿野	
65	土器	吉野川	皿	(16.8)			1/12	灰	鹿野	
66	土器	吉野川	皿	(11.6)			1/4	灰	鹿野	
67	土器	吉野川	皿	(7.4)			1/8	青磁	鹿野	
68	土器	吉野川	皿	(11.0)			1/8	灰	鹿野	
69	土器	吉野川	皿	(10.4)			2.7	1/8	灰	鹿野
70	土器	吉野川	皿	(9.6)			1/8	灰	鹿野	
71	土器	吉野川	皿				わづか	青磁	鹿野	
72	土器	吉野川	皿	(12.8)			1/8	灰	鹿野	
73	土器	吉野川	皿	(16.1)			1/8	灰	鹿野	
74	土器	吉野川	皿	(7.4)			わづか	青磁	鹿野	
75	土器	吉野川	皿	(11.0)			1/8	灰	鹿野	
76	土器	吉野川	皿	(10.4)			2.7	1/8	灰	鹿野
77	土器	吉野川	皿	(16.0)			1/8	灰	鹿野	
78	土器	吉野川	皿	(8.7)			1/4	青磁	鹿野	
79	土器	吉野川	皿	(16.8)			1/12	灰	鹿野	
80	土器	吉野川	皿	(11.6)			1/4	灰	鹿野	
81	土器	吉野川	皿	(7.4)			1/8	灰	鹿野	
82	土器	吉野川	皿	(28.8)	(11.6)	10.8	1/8	1/8	灰	鹿野
83	土器	吉野川	皿	(13.7)			1/8	灰	鹿野	
84	土器	吉野川	皿	(8.7)			2/8	白磁	鹿野	
85	土器	吉野川	皿	(11.6)			1/12	灰	鹿野	
86	土器	吉野川	皿	(11.6)			1/12	灰	鹿野	
87	土器	吉野川	皿				わづか	青磁	鹿野	
88	土器	吉野川	皿	(10.4)	(6.0)	5.5	1/8	1/8	灰	鹿野

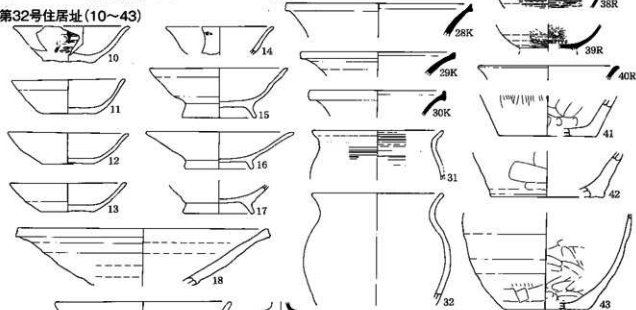


第64図 弥生時代の土器(1)

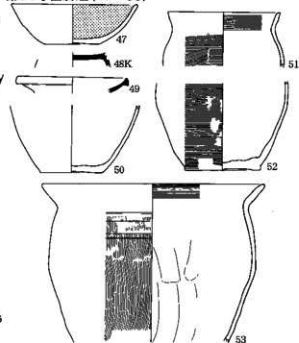
第31号住居址(1~9)



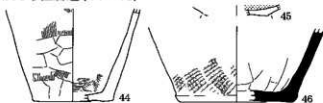
第32号住居址(10~43)



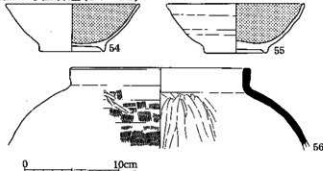
第34号住居址(47~53)



第33号住居址(44~46)



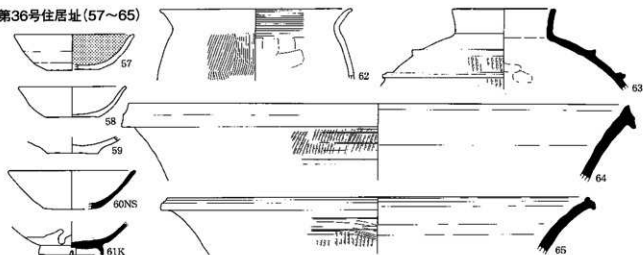
第35号住居址(54~56)



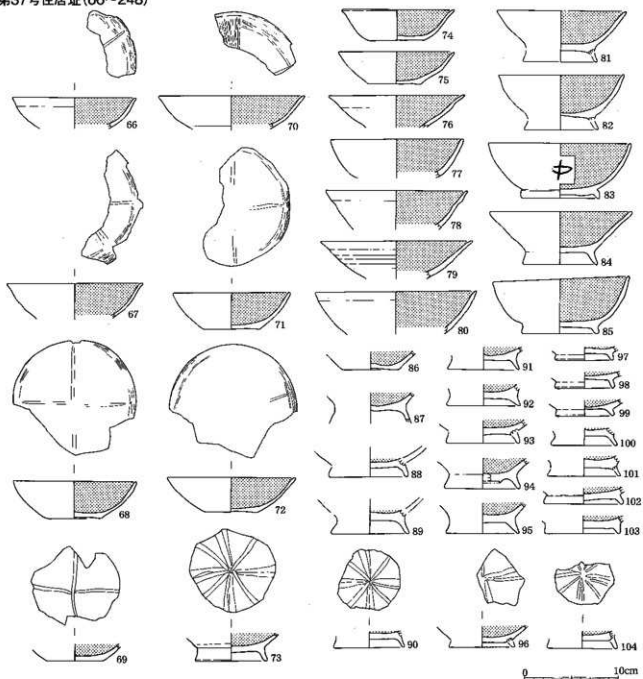
0 10cm

第65図 平安時代の土器・陶器(2)

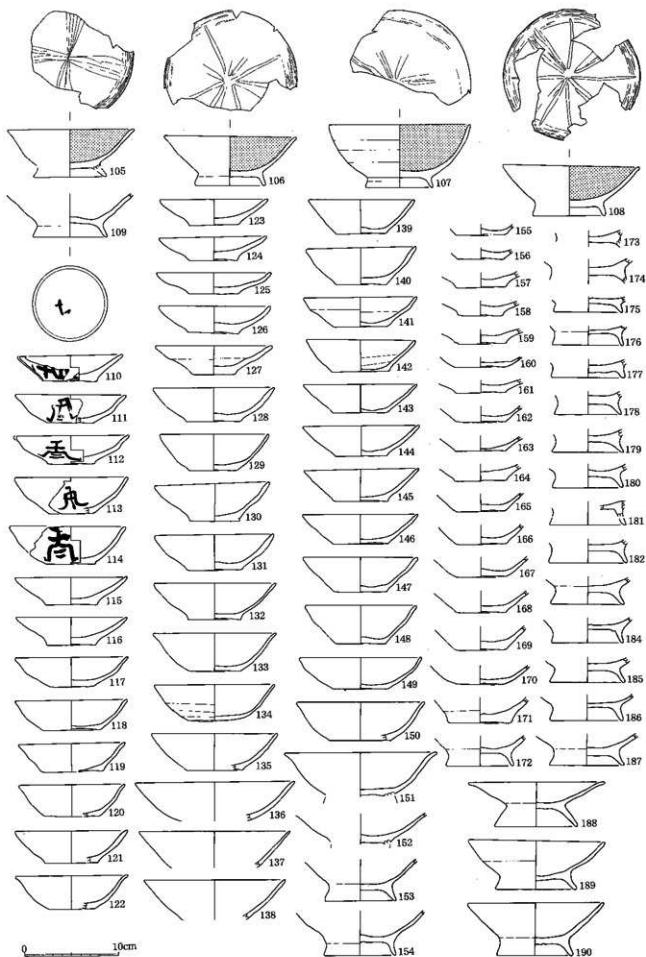
第36号住居址 (57~65)



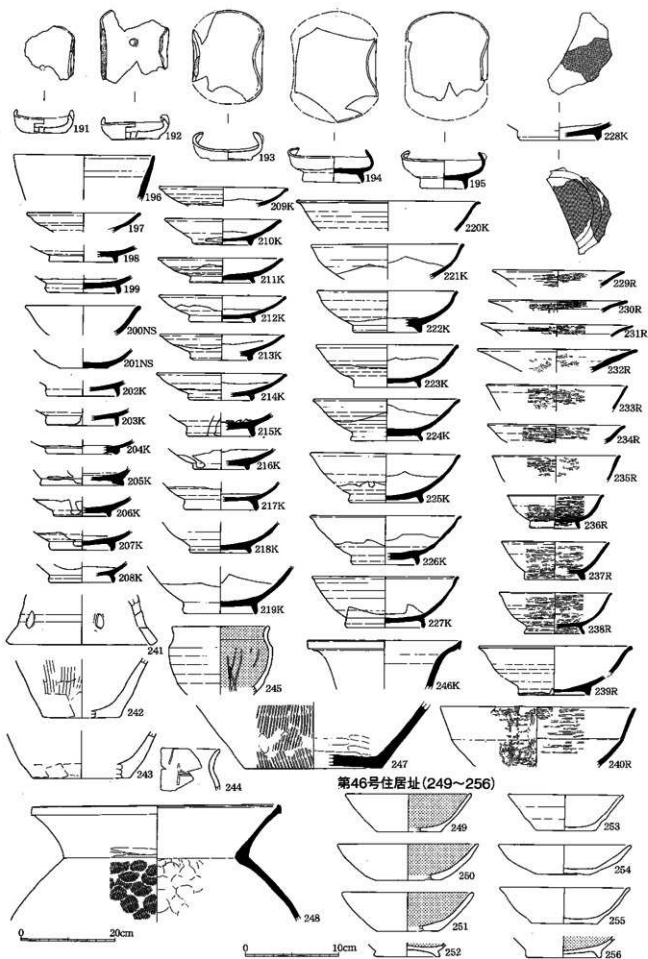
第37号住居址 (66~248)



第66図 平安時代の土器・陶器(3)



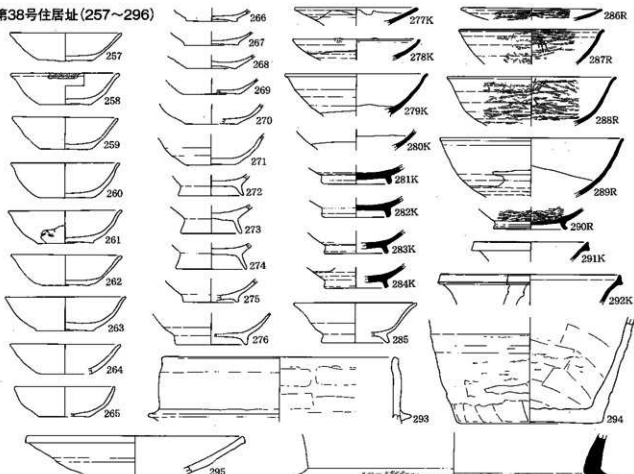
第67図 平安時代の土器・陶器(4)



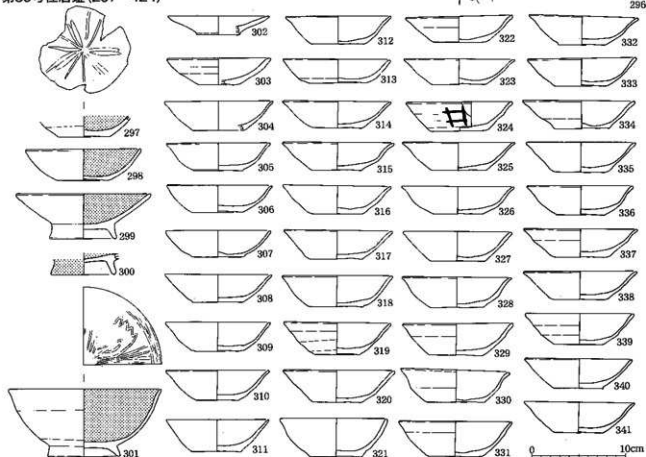
第46号住居址(249~256)

第68図 平安時代の土器・陶器(5)

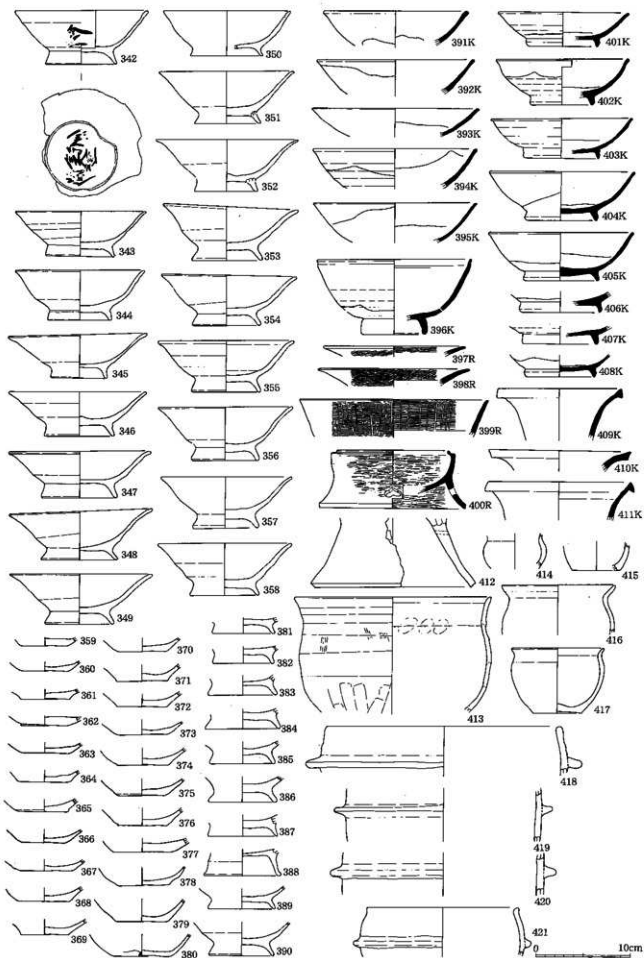
第38号住居址 (257~296)



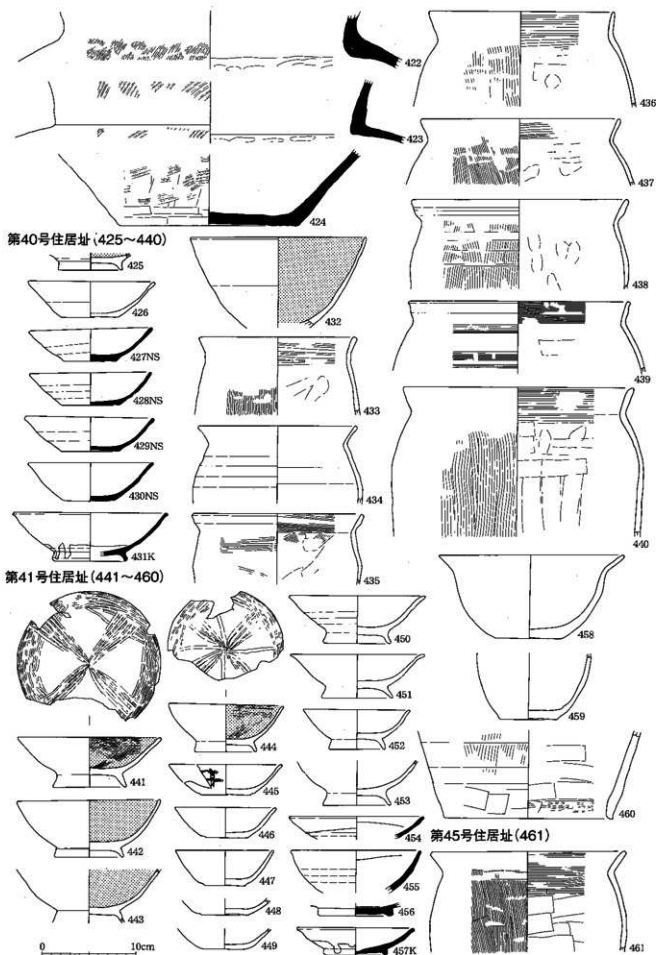
第39号住居址 (297~424)



第69図 平安時代の土器・陶器(6)

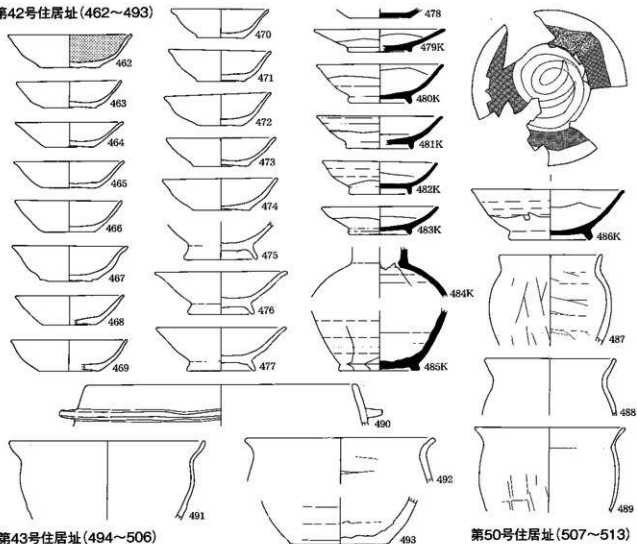


第70図 平安時代の土器・陶器(7)

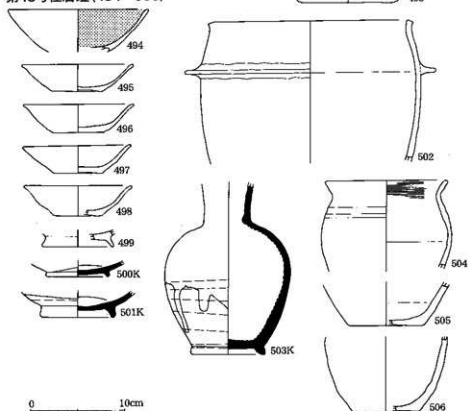


第71図 平安時代の土器・陶器(8)

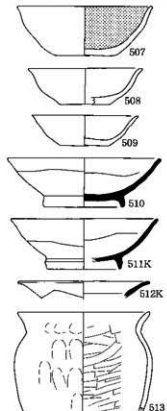
第42号住居址 (462~493)



第43号住居址 (494~506)

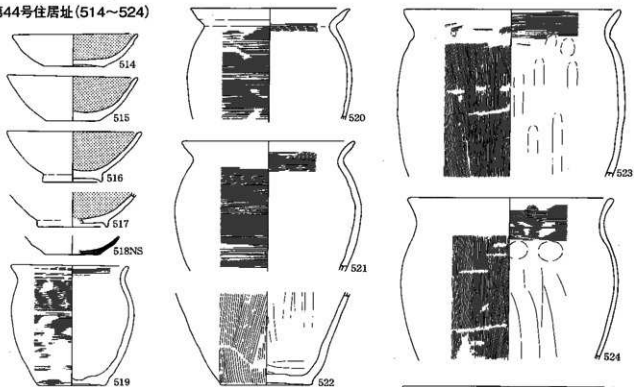


第50号住居址 (507~513)

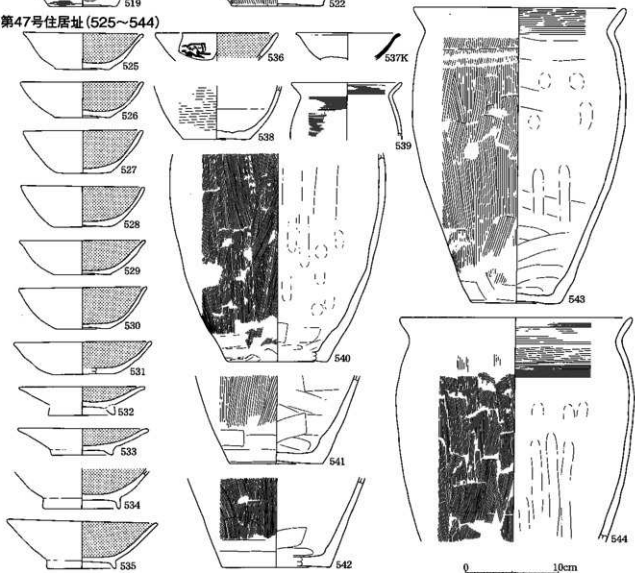


第72図 平安時代の土器・陶器(9)

第44号住居址 (514~524)

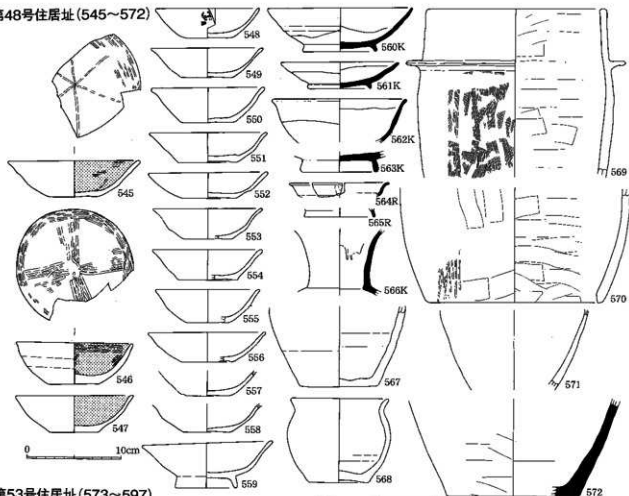


第47号住居址 (525~544)

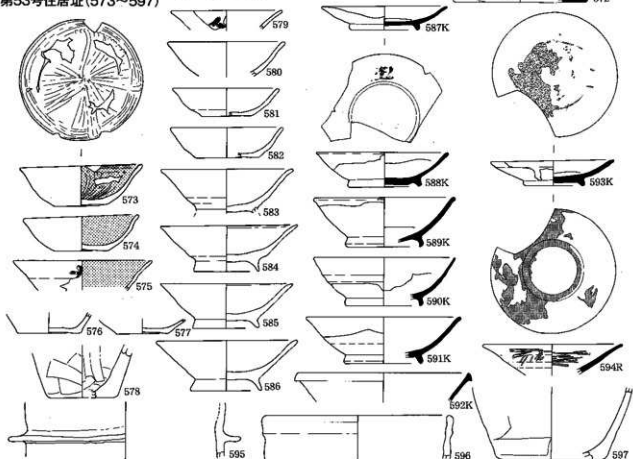


第73図 平安時代の土器・陶器 (10)

第48号住居址 (545~572)

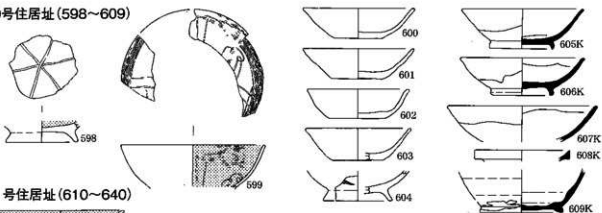


第53号住居址 (573~597)

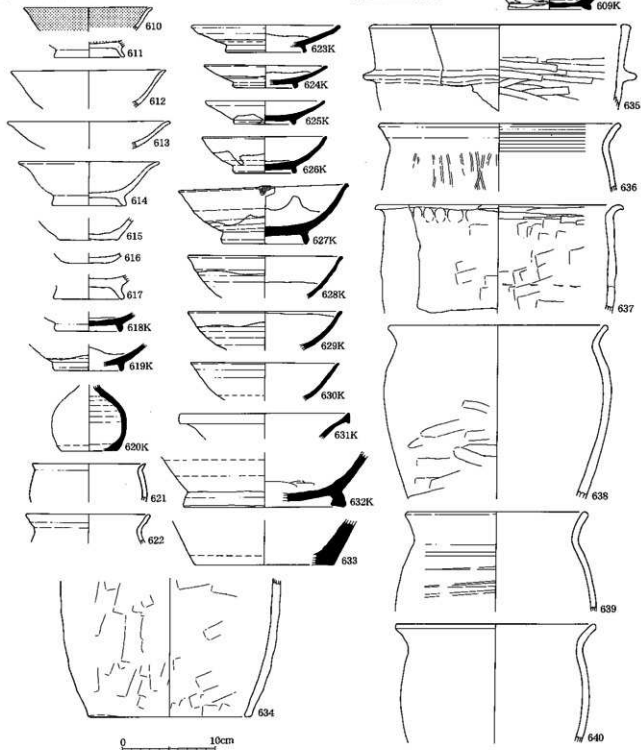


第74図 平安時代の土器・陶器(11)

第49号住居址 (598~609)

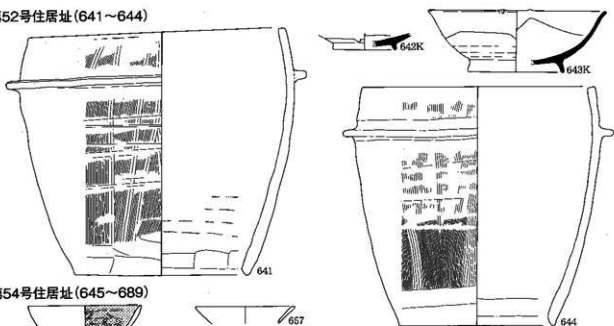


第51号住居址 (610~640)

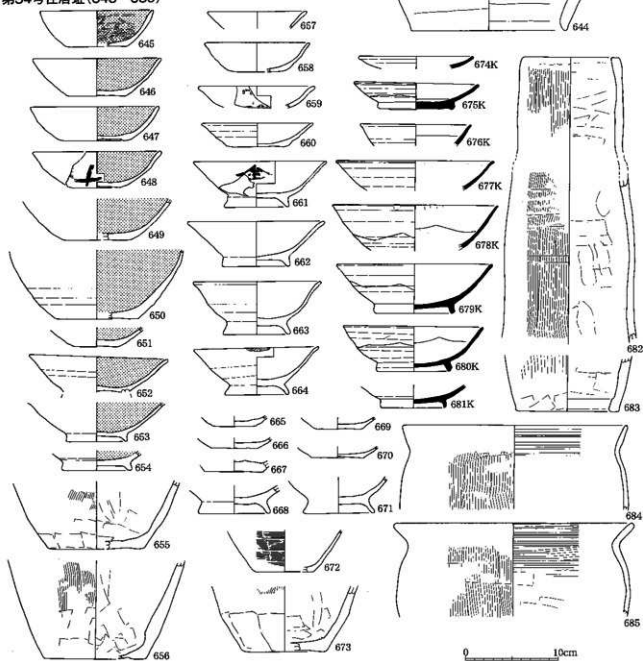


第75図 平安時代の土器・陶器(12)

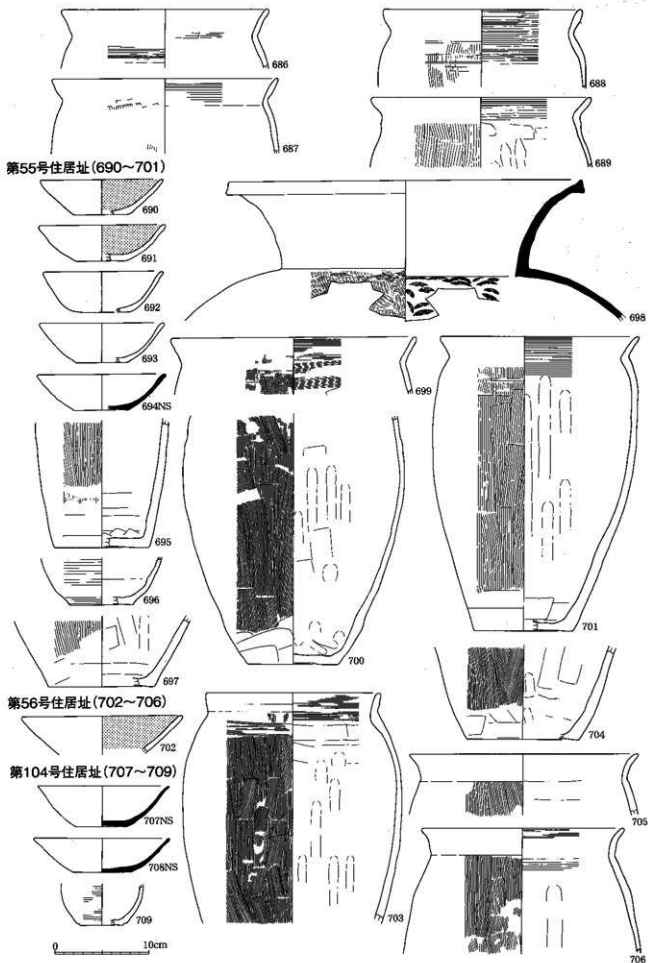
第52号住居址(641~644)



第54号住居址(645~689)



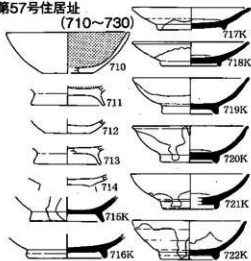
第76図 平安時代の土器・陶器(13)



第77図 平安時代の土器・陶器 (14)

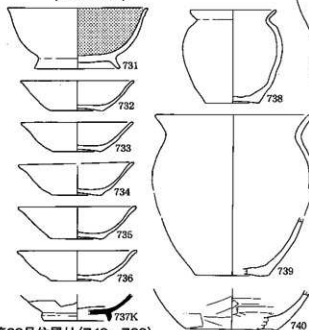
第57号住居址

(710~730)

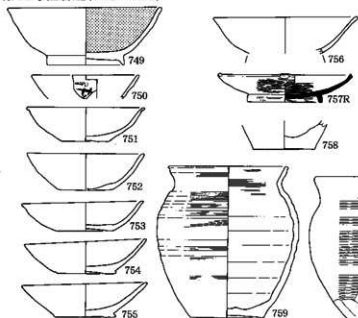


第58号住居址

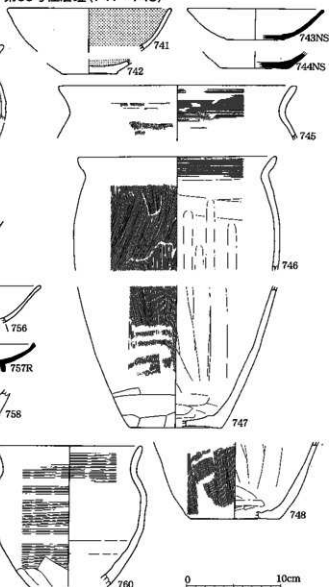
(731~740)



第63号住居址 (749~760)

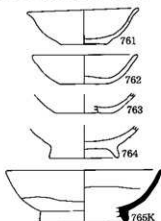


第60号住居址 (741~748)

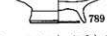
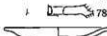
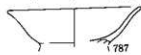
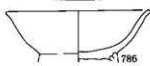
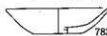
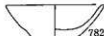
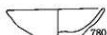
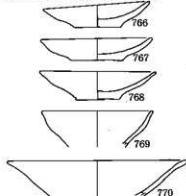


第78図 平安時代の土器・陶器(15)

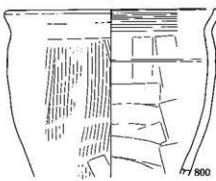
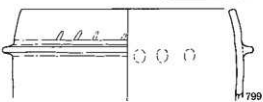
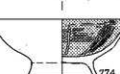
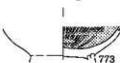
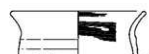
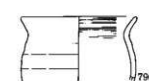
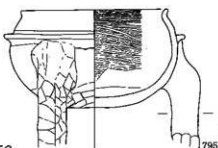
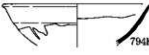
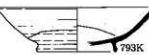
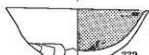
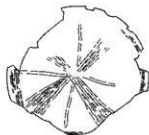
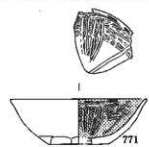
第59号住居址 (761~765)



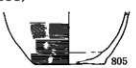
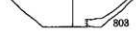
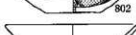
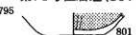
第61号住居址 (766~770)



第62号住居址 (771~800)

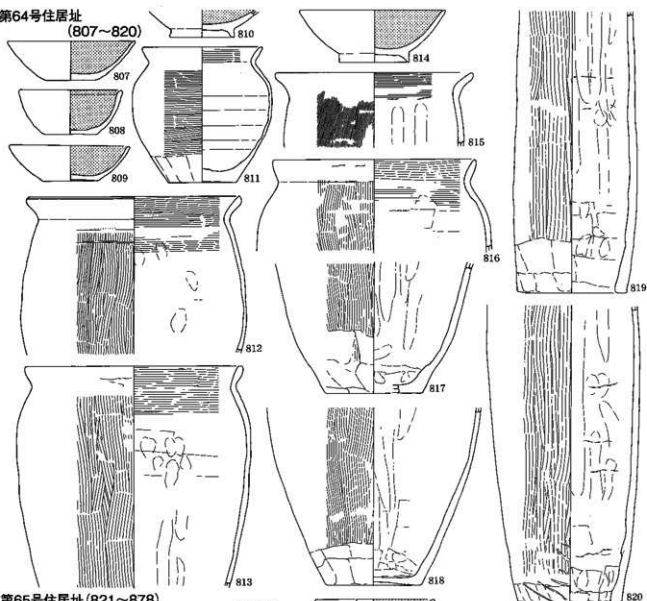


第75号住居址 (801~806)

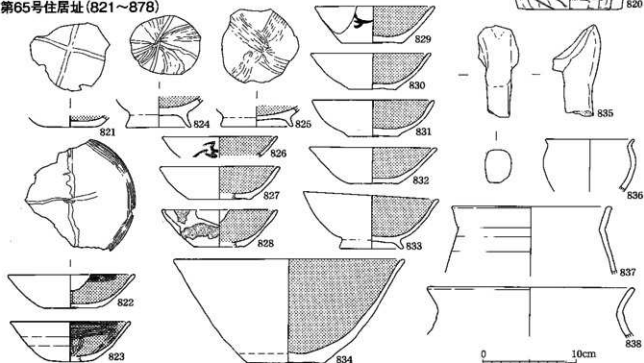


第79図 平安時代の土器・陶器(16)

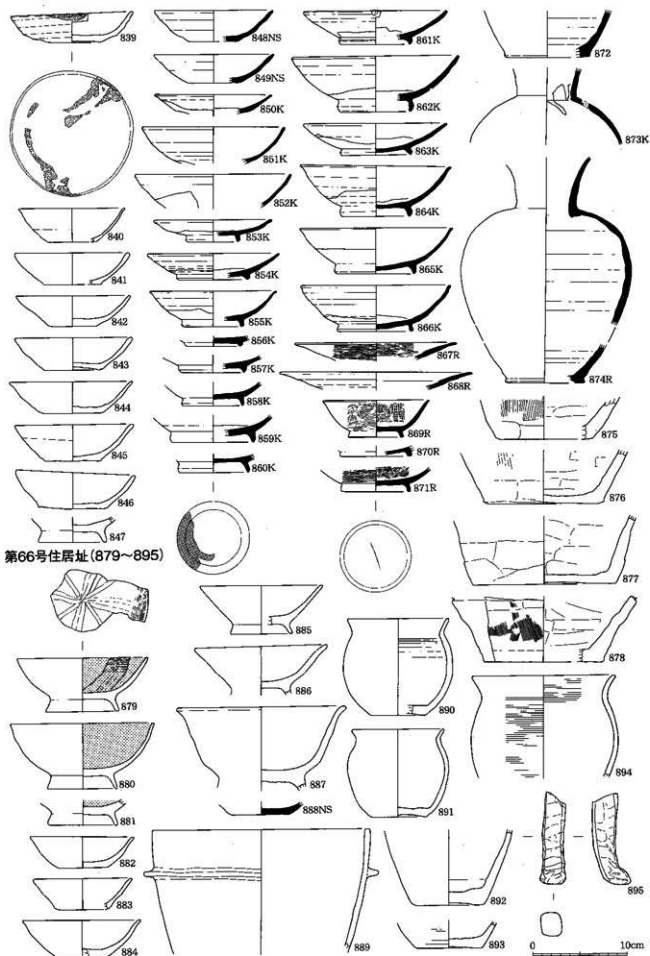
第64号住居址
(807~820)



第65号住居址 (821~878)



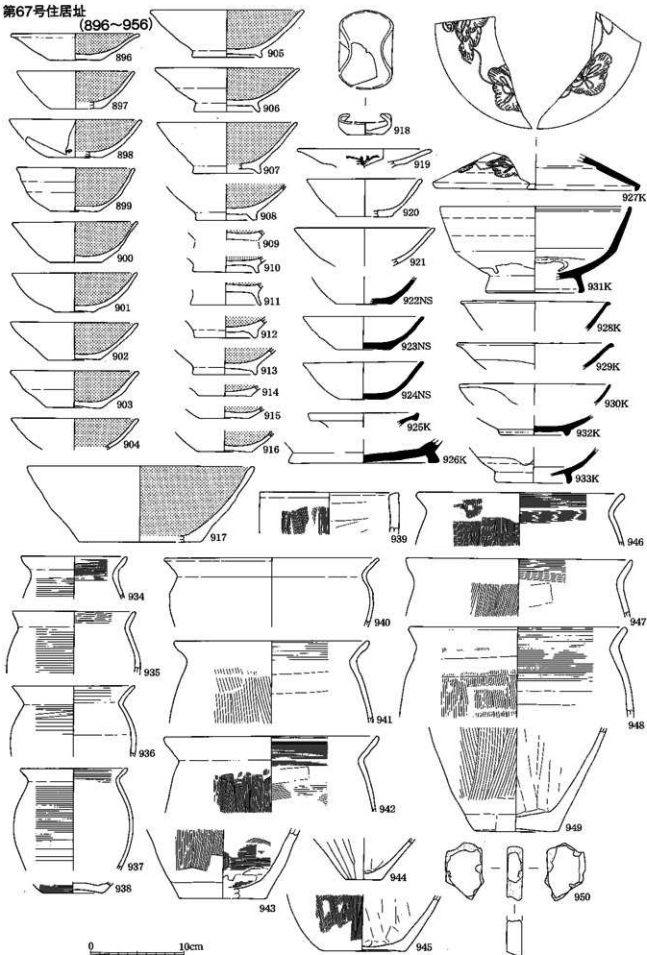
第80図 平安時代の土器・陶器(17)



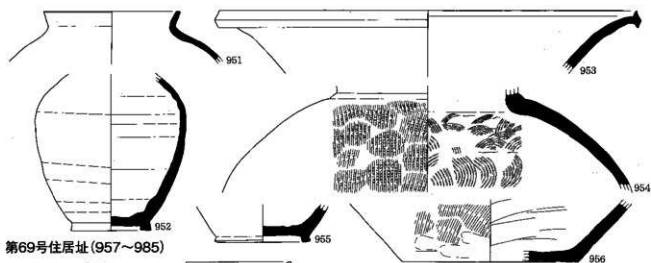
第81図 平安時代の土器・陶器(18)

第67号住居址

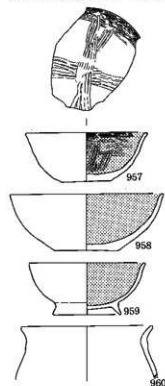
(896~956)



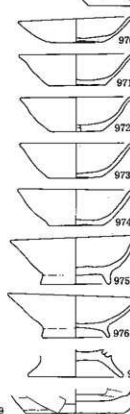
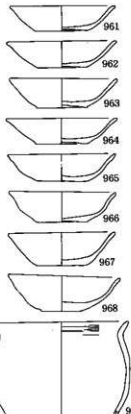
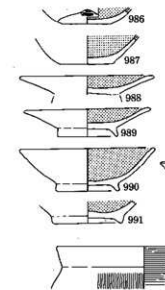
第82図 平安時代の土器・陶器(19)



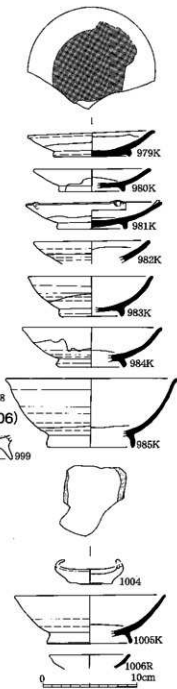
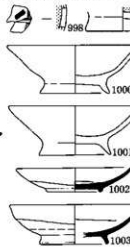
第69号住居址 (957~985)



第68号住居址 (986~997)

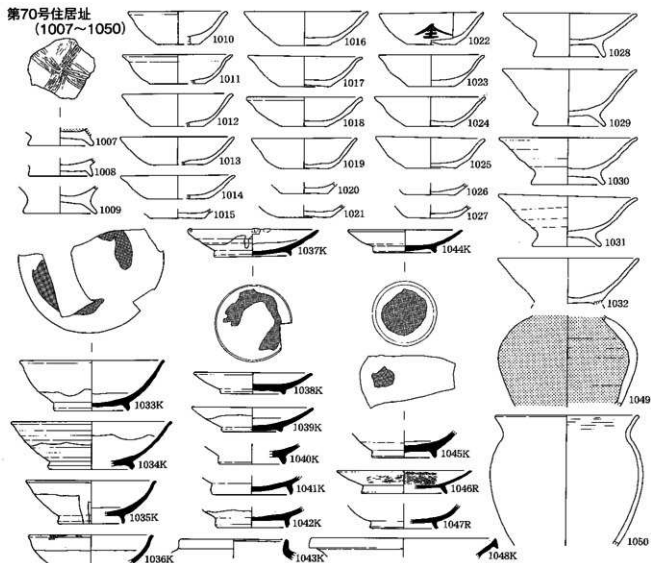


第87号住居址 (998~1006)

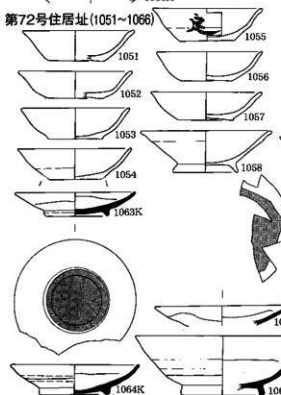


第83図 平安時代の土器・陶器(20)

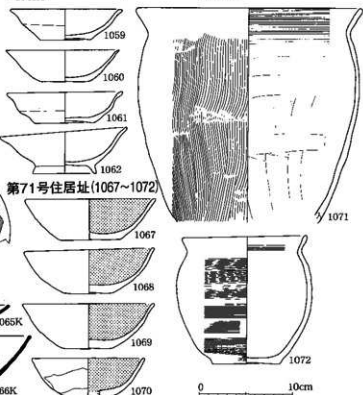
第70号住居址
(1007~1050)



第72号住居址(1051~1066)

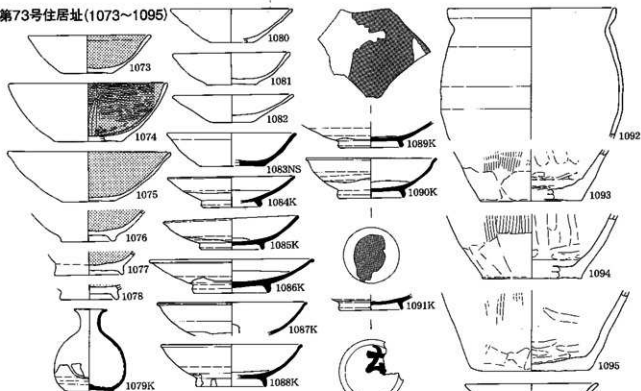


第71号住居址(1067~1072)

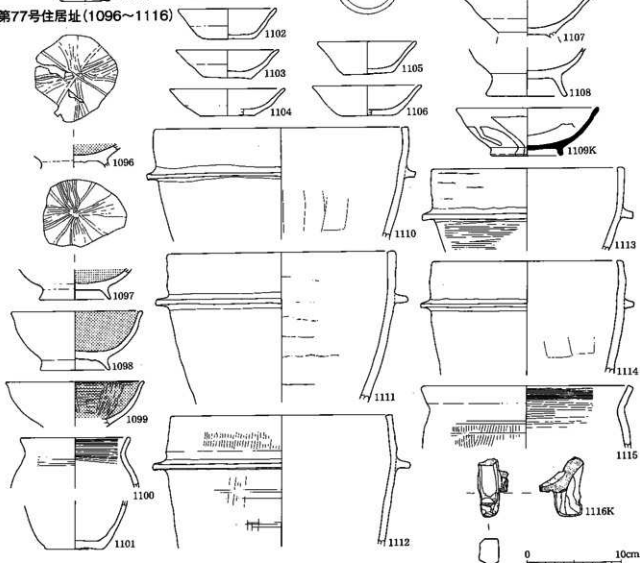


第84図 平安時代の土器・陶器(21)

第73号住居址(1073~1095)

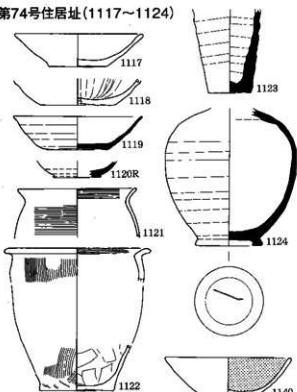


第77号住居址(1096~1116)

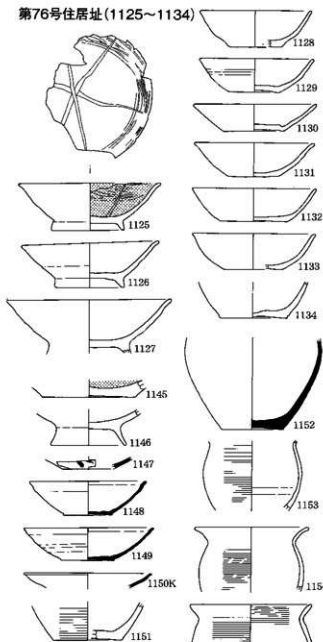


第85図 平安時代の土器・陶器(22)

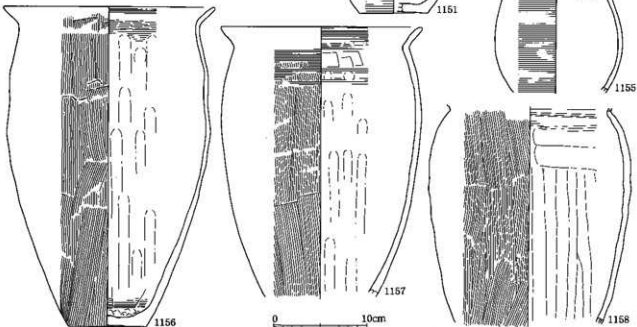
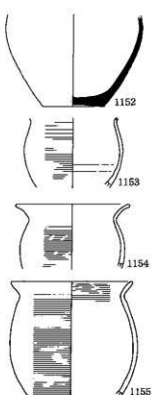
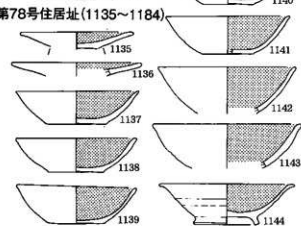
第74号住居址(1117~1124)



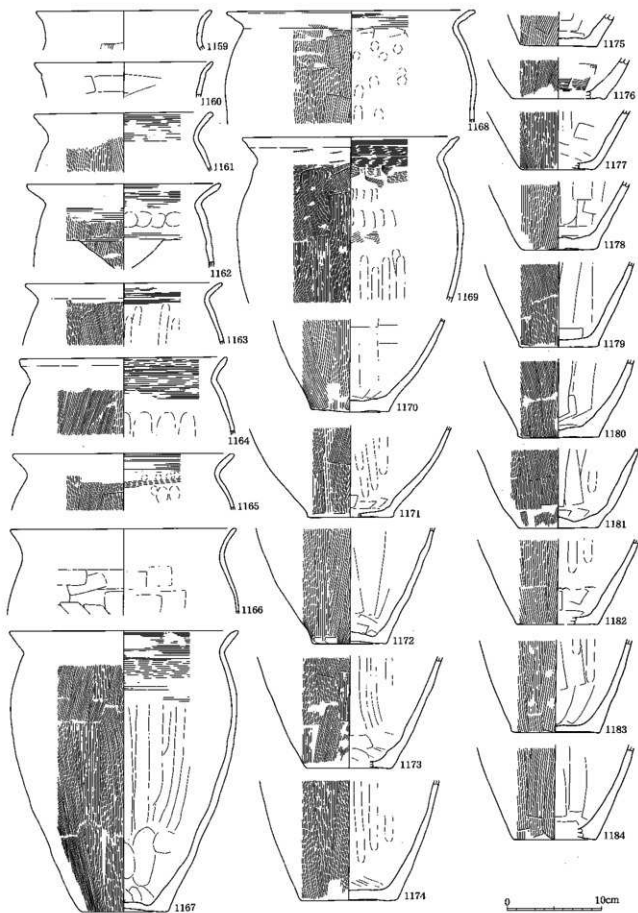
第76号住居址(1125~1134)



第78号住居址(1135~1184)

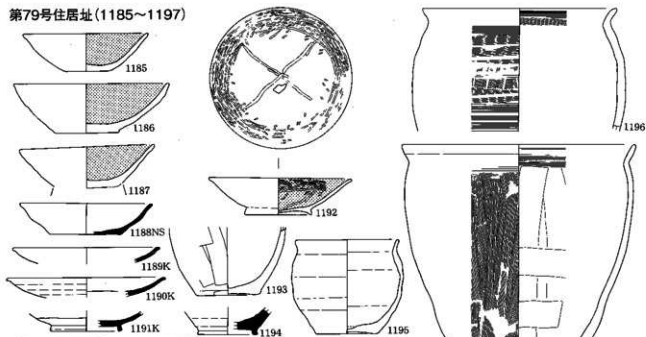


第86図 平安時代の土器・陶器(23)

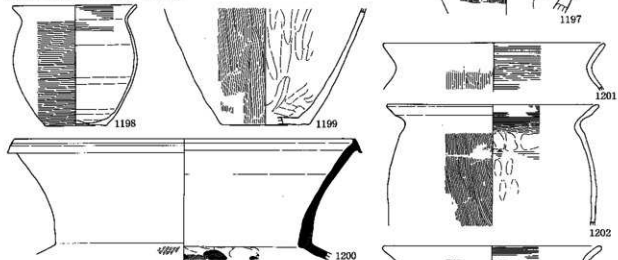


第87図 平安時代の土器・陶器(24)

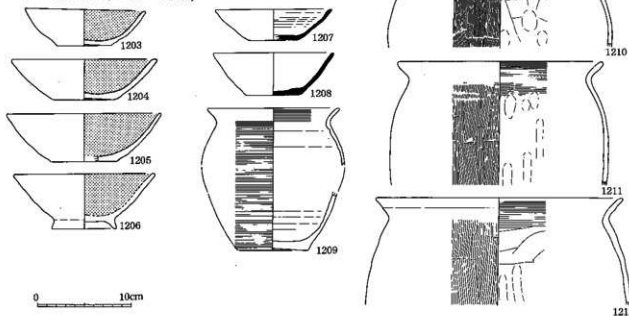
第79号住居址(1185~1197)



第84号住居址(1198~1202)

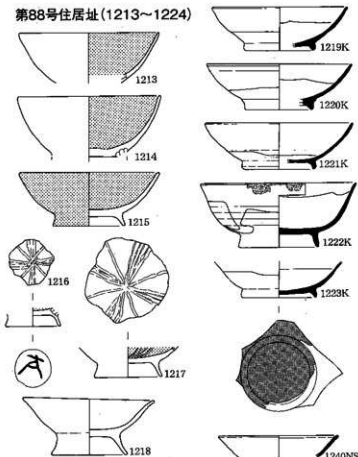


第86号住居址(1203~1212)

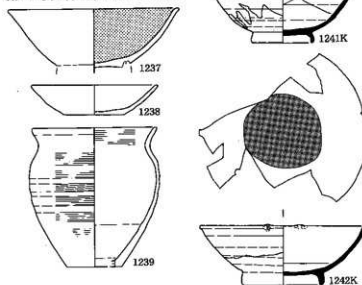


第88図 平安時代の土器・陶器(25)

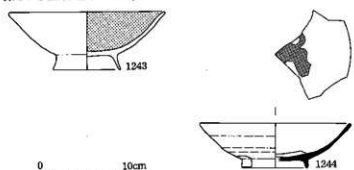
第88号住居址(1213~1224)



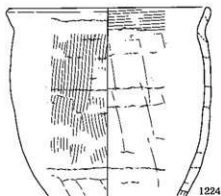
第93号住居址(1237~1242)



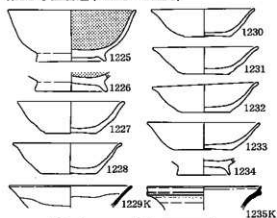
第91号住居址(1243~1244)



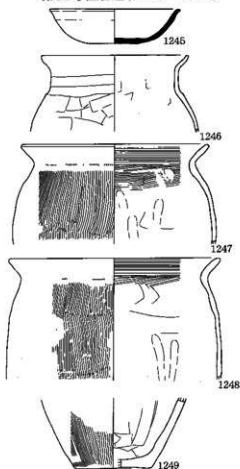
0 10cm



第90号住居址(1225~1236)

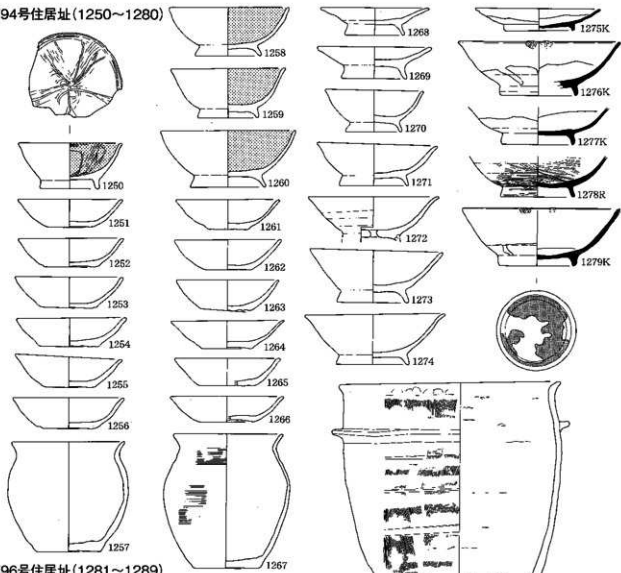


第95号住居址(1245~1249)

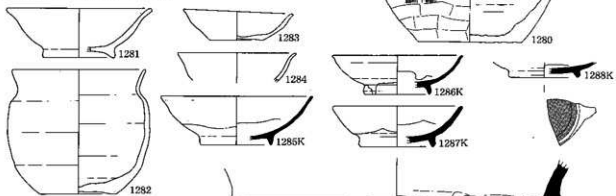


第89図 平安時代の土器・陶器(26)

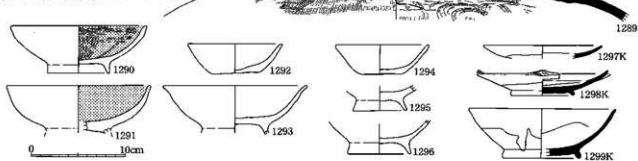
第94号住居址(1250~1280)



第96号住居址(1281~1289)

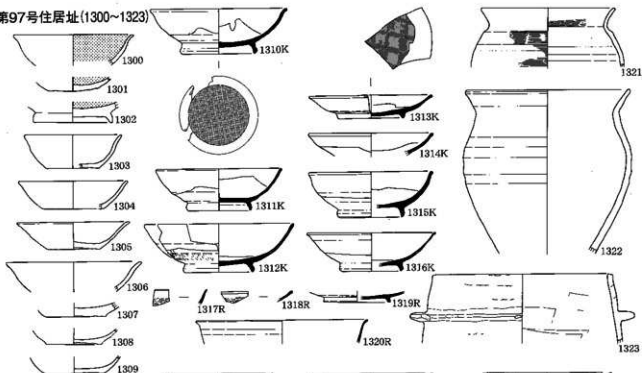


第102号住居址(1290~1299)

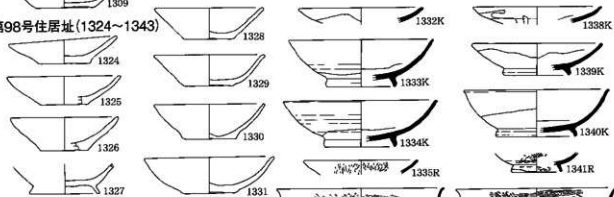


第90図 平安時代の土器・陶器(27)

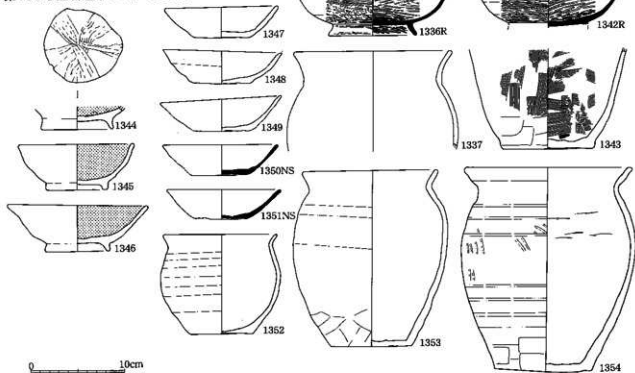
第97号住居址(1300~1323)



第98号住居址(1324~1343)



第100号住居址(1344~1354)

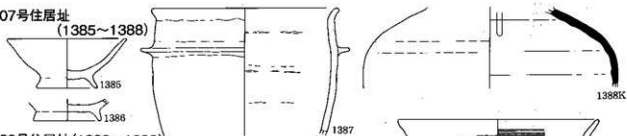


0 10cm

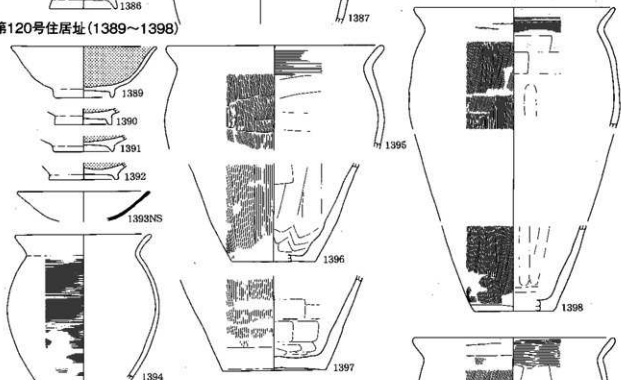
第91図 平安時代の土器・陶器(28)

第107号住居址

(1385~1388)

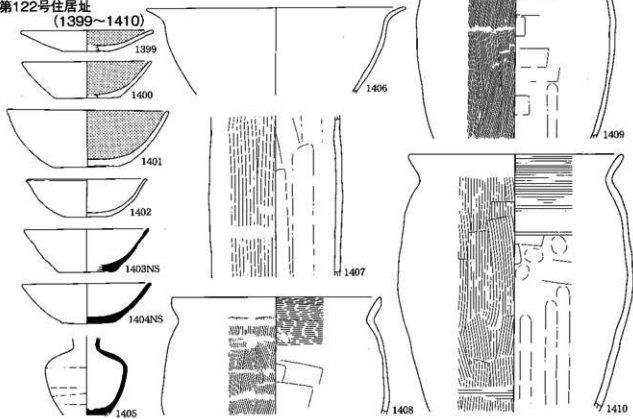


第120号住居址(1389~1398)



第122号住居址

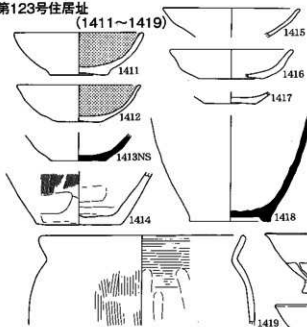
(1399~1410)



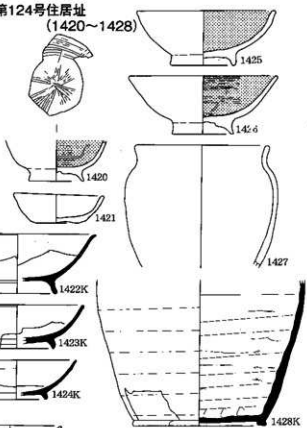
0 10cm

第93図 平安時代の土器・陶器(30)

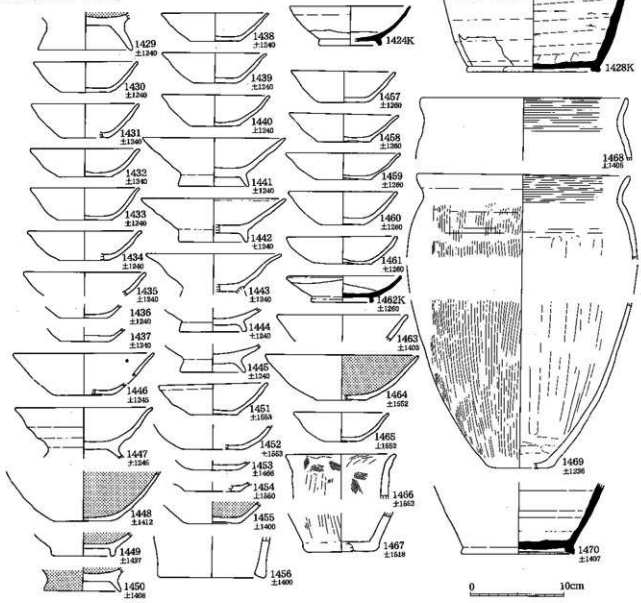
第123号住居址
(1411~1419)



第124号住居址
(1420~1428)

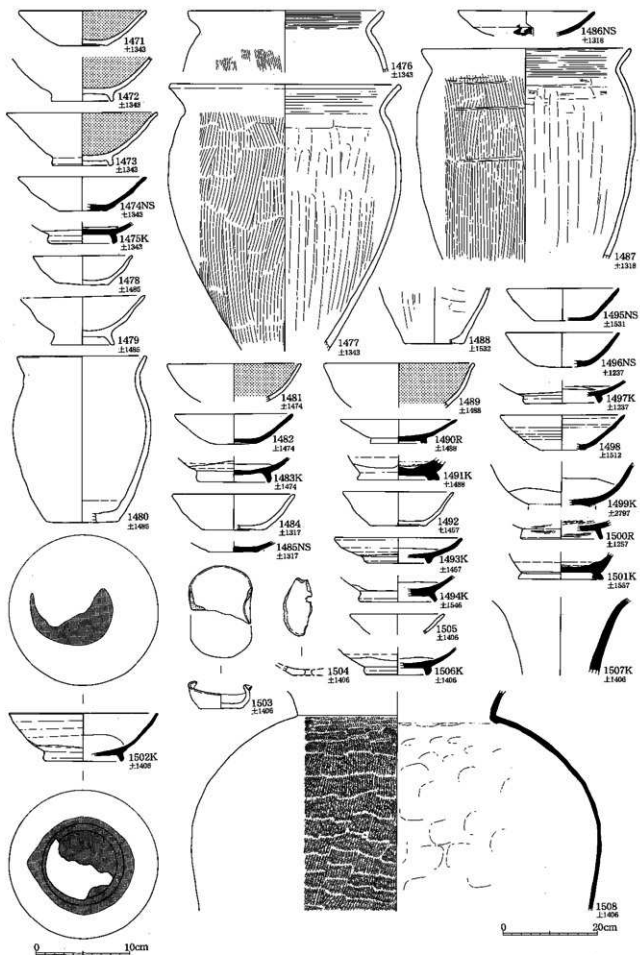


土坑 (1429~1510)

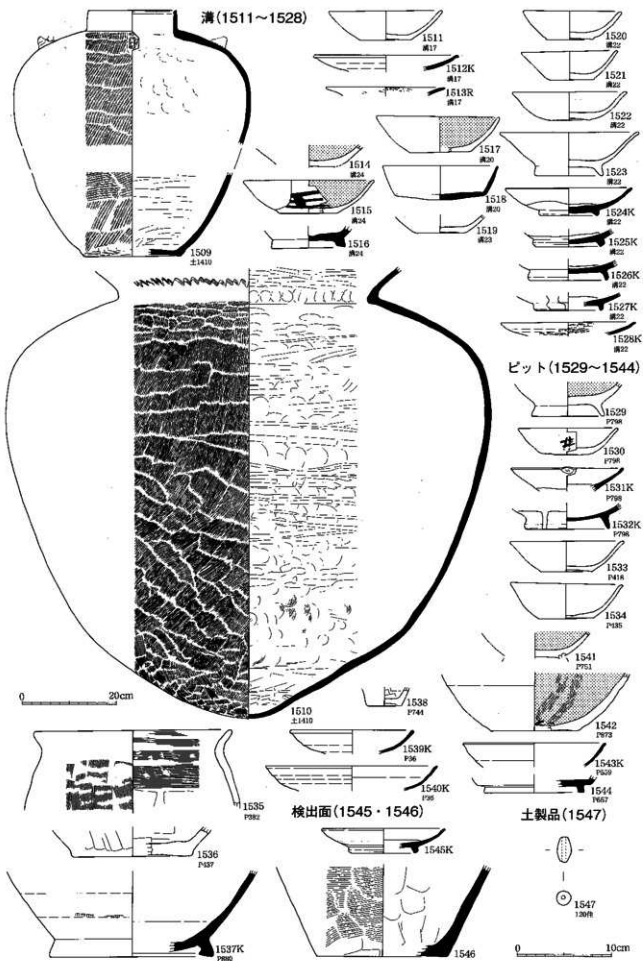


0 10cm

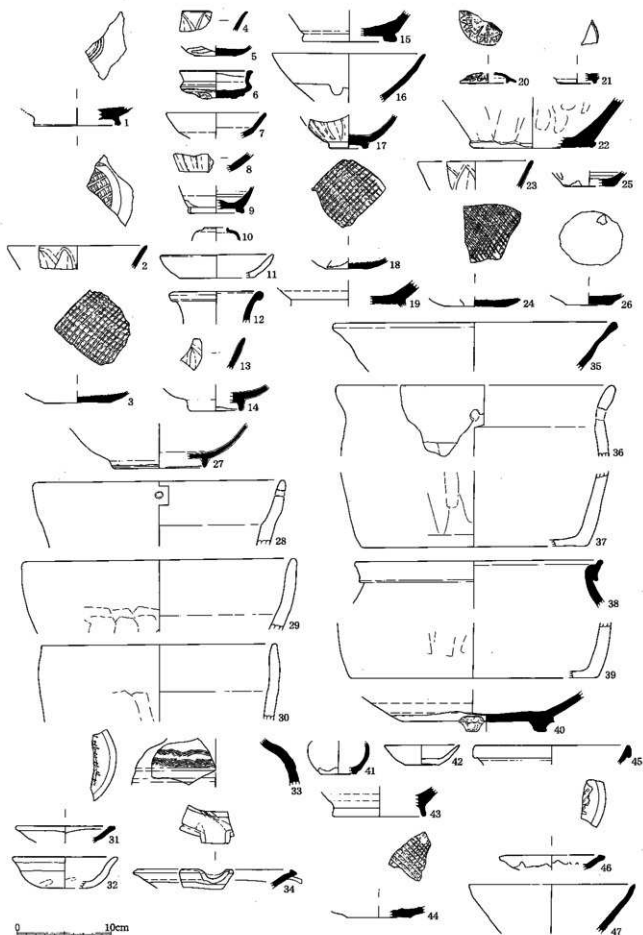
第94図 平安時代の土器・陶器 (31)



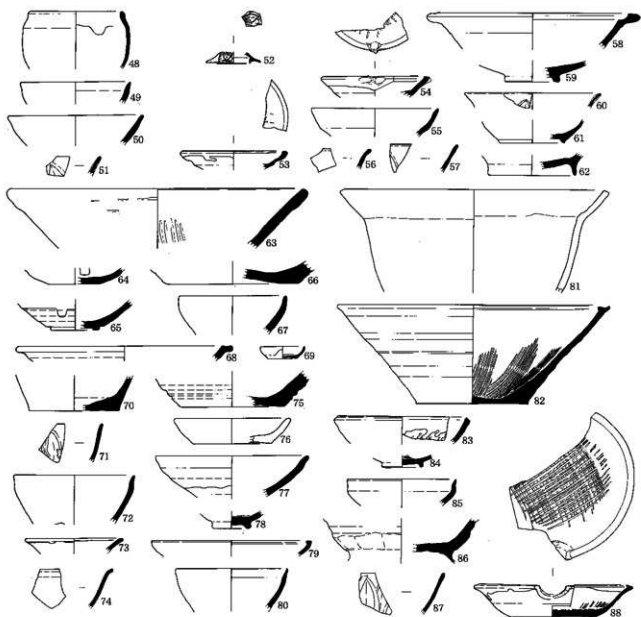
第95図 平安時代の土器・陶器(32)



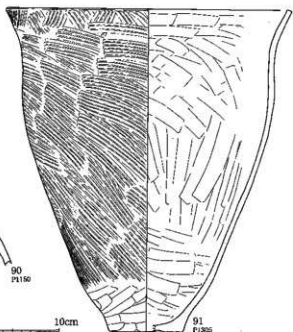
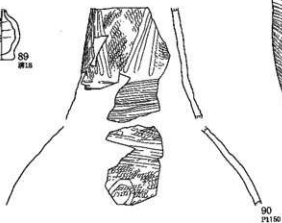
第96図 平安時代の土器・陶器(33)・土製品



第97図 中世の土器・陶磁器(1)



弥生土器 (89~91)



第98図 中世の土器・陶磁器(2)、弥生時代の土器(2)

2 石器 (第6～18表、第99・100図)

(1) 石器群の概要

川西開田遺跡第3次調査C区及び第4次調査B区では出土した石器型式から、縄紋時代中期、古代、中世に帰属すると推定される遺構が検出されているようである。遺構検出面、石器認定基準、及び石器回収基準は不明であるものの、恐らくは所謂定形的な石器を中心として、3C区石器群595点、4B区石器群240点、計835点の石器群が回収された(註1)。

三次元座標記録率は十数%にとまるものの、接合作業及び母岩識別作業を実施したところ、3C区石器群では母岩別資料6例23点(接合率3.3%、同一母岩率1.2%)、4B区石器群では母岩別資料3例6点(接合率1.1%、同一母岩率2.3%)を確認し得た。しかしながら、遺構間接合関係及び遺構間同一母岩関係は確認し得なかった(註2)。

【論記】

入稿後4B区石器群に石器1点が追加されたが、諸説の制約から本文及び表中には反映されていない。
ID:246 出土遺構1:SK2559 出土遺構2:- 器種:有孔石製品(Yk) 石材:粘板岩(Si) 重量:7.8g 単独資料

【補註】

- 註1 粗質石材素材剥離系石器群及び、炉や竈等の構築材を主体とすると考えられる粗質石材素材分割剥落系石器群の回収率が低い可能性がある。
註2 主要諸元一覧は石器群の回収精度、整理作業精度、及びその質量を最も簡潔に表示しようと試みたものである。しかしながらこれらはあくまでも遺物の属性であり、今後は遺跡及び遺構そのものの、質量及び調査精度の数値化が必要となるものと考えられる。

【主要引用参考文献】

- 太田圭都 2000 「石器」『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp93～pp122
太田圭都 2000 「石器」『百瀬遺跡Ⅳ』松本市教育委員会 pp44～pp49,57,58
太田圭都 2001 「石器」『関の宮遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp9～pp14,pp25～29

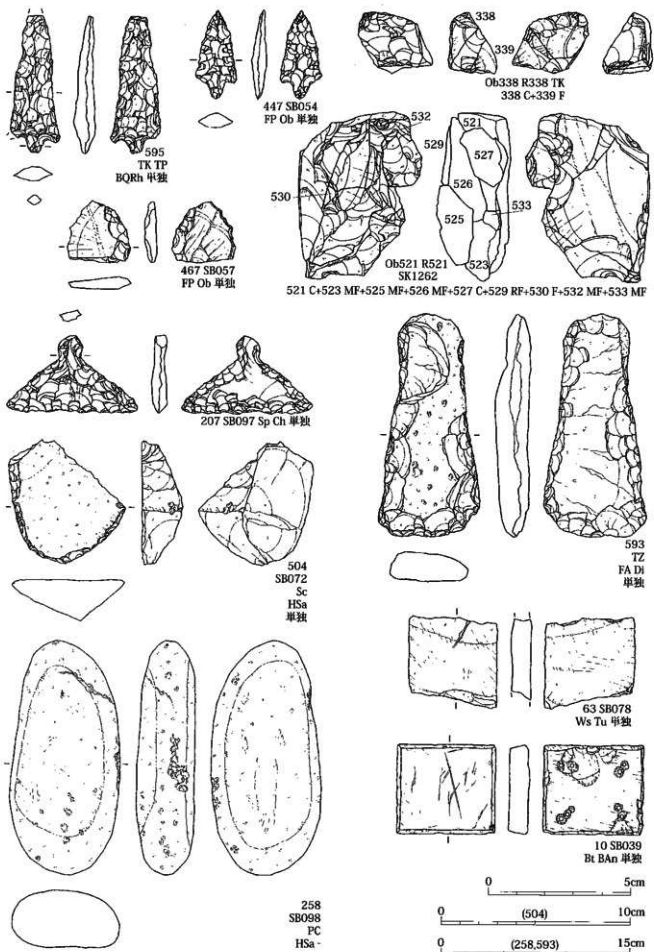
石器番号	石材名	遺構名	器種	器種名	器種	器種名	器種	器種名
IOB	黒曜岩	SB	住居跡	PT	罎片	Ws	磨石状石器	
BCRn	黒曜母石片質流紋岩	SD	竈穴遺構	PT1	罎片1層	S	磨石状石器	
BAn	黒曜燧石山岩	SB	住居跡	PT2	罎片2層	Su	磨石状石器	
As	安山岩	SC	溝状遺構	MP	磨石製鋸あも御片	Bl	押し止り磨石	
CAa	安山岩	SP	ピット	PA	打製片岩石器	Us	F形石器	
Di	燧石	TK	樋川	TP	磨製片岩石器	Lk	不明	
Qu	石英燧石	TY	溝	PA	打製片岩石器			
Se	燧石	ITZ	溝	TP	磨製片岩石器			
FCJ3a	新成砂岩	TY	溝	TP	磨製片岩石器			
H5a	砂岩	ITZ	溝	TP	磨製片岩石器			
SAa	砂岩	ITZ	溝	TP	磨製片岩石器			
Sc	黒曜岩							
Ta	黒曜岩							
Sa5	砂岩製板石	MS	墓	Sp	ヒ形石			
Mu5	磨石	C	石	Se	2.1x1.1cm-石片			
S	磨石	RZ	穴加工ある石	RZ	穴加工ある石			
Ch	チャート	BC	竈石柱	MP	磨石製鋸あも御片			
Ci5	燧石片岩	PF	打製片岩	PA	打製片岩石器			
On	内英	TP	磨製片岩	TP	磨製片岩石器			
Ita	溝	TP	磨製片岩	TP	磨製片岩石器			

第7表 遺構略号一覧		第8表 川西開田3C 主要諸元一覧		第9表 川西開田4B 主要諸元一覧	
略号	器種名	器種	器種名	器種	器種名
MS	墓	Sp	ヒ形石	PT	罎片
C	石	Se	2.1x1.1cm-石片	PT1	罎片1層
RZ	穴加工ある石	RZ	穴加工ある石	PT2	罎片2層
BC	竈石柱	MP	磨石製鋸あも御片	PTC	罎片複合
PF	打製片岩	PA	打製片岩石器	PTD	罎片複合
TP	磨製片岩	TP	磨製片岩石器	PC	磨石製鋸あも御片
TP	磨製片岩	TP	磨製片岩石器	PC	磨石製鋸あも御片

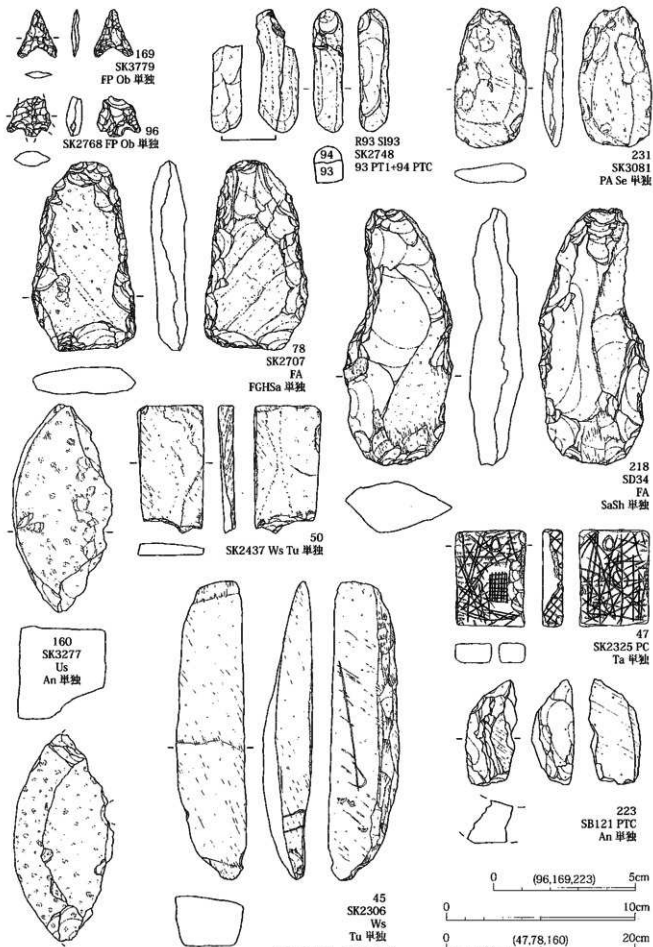
第6表 石材略号一覧		第10表 器種略号一覧	
母岩ID	母岩番号(接合番号)	器種ID(器種名)	器種略号
1Sa23	M23	(23) (53) (50)	
2H5a256	R266	266,267,268	
3H5a290	M280	(280) (281) (282)	
4Sa309	R309	309,310,311	
5Ob339	R338	338,339	
6Ob521	R521	521,523,525,526,527,528,530,532,533	

第11表 川西開田3C 母岩別資料一覧		第12表 川西開田4B 母岩別資料一覧	
器種ID	母岩番号(接合番号)	器種ID(器種名)	母岩番号(接合番号)
1H5a22	M82	(62) (83)	83(SK271) 83(SK271)
2SB3	R53	93,94	93(SA274) 94(SA274)
3PC3512	M12	(12) (12) (13)	212(SD29) 243(SD29)

器種ID	母岩番号(接合番号)	出土遺構・層序	接合関係数	保存率	記録率	分離順序
23SR067	SD53	SR075,SR50,SR068,層上	0	0	45.0	
266SB100	ピット2No.2	267SB100ピット2No.2	0	0	196.0	
268SB100	ピット2No.2		3	1/8	528.0	266→(267+268)
280SK1343	層上	281SK1343,層上,282SK1343,層上	0	0	35.1	
309SK305	層上	310SK305,層上,311SK305,層上	2	1/8	28.3	310→309→311
338TY339	層上		0	1/4	9.7	338→339
521SK1262	層上	523SK1262,層上,525SK1262,層上	0	0	507.0	
526SK1262	層上	527SK1262,層上,529SK1262,層上	2	1/4	626.0	526→529→527
530SK1262	層上	532SK1262,層上,533SK1262,層上	9	3/5	59.8	532→533→530



第99圖 石器(1)



第100图 石器(2)

3 金属製品

3C・4B区の遺構を中心に、590点の金属製遺物を得た。これらの内訳は鉄器309点、銭貨を含む銅製品135点、鍛冶関連資料の鉄滓146点である。時期的には3C区および4B区の住居址・溝状遺構出土品が平安時代、それ以外の4B区出土品が中世に帰属するとみられる。本報告では、これらのうち図化可能な134点を提示し、それ以外のものについては一覧表に記した。以下、図化したものを中心に概要を記す。

(1) 鉄器 (第19表・第101～104図)

309点中、器種の判明したものは112点である。その内訳は点数の多いものから釘(60点)、刀子(23点)、鎌(10点)、鎌(7点)、紡錘車(4点)、鍬鉄(3点)、楔(3点)、鋤先(1点)、鋤(1点)、弓引鉄(1点)、鈴(1点)、肘金具(1点)、門金具(1点)、和鉄(1点)である。

釘は46点を図示した。うち平安時代の遺構出土は8点のみで、他はすべて中世の土坑・ピットからである。平安時代の釘のうち頭部の残る3点を見ると、上端が丸みを帯びて曲げられるもの(2)と鉾のように丸い皿状を呈し、基部が細い角状を呈するもの(54・66)がある。中世の釘は上端を叩き延ばしてから折り曲げたものが大半で、他に基部の上端をそのまま折り曲げたもの(348)、先端が尖るもの(225)がある。

刀子は図示した23点のうち8点が中世の土坑出土、他は平安時代の遺構出土である。関および身部の形態にいくつかのあり方が認められる。まず刃側・棟側両関となるものに60・62・97・117・120・123・160・172・406がある。この中にも関の設け方に明瞭な屈曲のあるもの、不明瞭なものなどバラエティーがある。次に棟側が無関になるものに263がある。もう1種類刃側が無関になるものに14・59があり、この2点は棟側の関が緩く湾曲した形状を呈する。身部の形態は切先まで棟が直線を描くか反り気味なもの(59・60・69・87・160・172・210・263)と切先に向かって弧を描いて下がるもの(14・120・157)などがある。それぞれの中にもさらに刃側のあり方にも直線的なもの、湾曲するものなどいくつかの相違が見られる。

鎌は8点を図示した。いずれも平安時代の遺構出土である。その他不明品とした126も鎌の可能性はある。形態的には長三角形で逆刺を有し身部断面が両丸造りのものが主体(18・80・116・128・159)で、他に同形態で関が撥状を呈する46・211、これらより幅広の二等辺三角形を呈し逆刺を有する191が見られる。

鎌は5点を図示した。56・73・136は平安時代、それ以外は中世の土2601一括出土品である。56は唯一の完形品で、基部～刃部はさほど幅を変えず直状を呈する。刃部は内外ともに先端近くで屈曲している。折り返し部と基部の角度は鈍角である。73は幅広の刃部破片で、先端部を欠く。136は基部の破片で、折り返し部は欠く。刃部にかけて長く直線的で徐々に幅を増す。264は幅広の刃部先端である。288は基部から刃部にかけての破片で、刃部に向かい幅を減じる。

紡錘車は4点とも図示し得た。10・57・179は住居址出土、260は中世の土2555出土である。10・179・260は輪部で、260は2分の1を欠損する。いずれも大型の部類で断面形は凸レンズ状を呈するが、179のみ中央部が上方に突出する。軸孔も不明瞭で紡錘車でない可能性もある。57は紡軸で、頭部を欠いている。

鍬鉄はすべて中世の土坑出土で、2点を図示した(286・377)。山形の基部中央が透かしとなるもので、286は戴手状に装飾が施される。両裾は286が短くつまみ上げるのに対し、377は緩く湾曲させている。底部はほぼ直線的で両端は丸みが強い。

楔(196・237・410)は237のみ完形、他2点は先端部を欠く。いずれも基部は長方形の断面を呈し、頭部は使用により潰れが生じている。

鋤先(82)は62住の出土で完形品である。全体に縦長の形態で、刃部は先端が尖りV字形を呈する。2枚の鉄板を貼り合わせて製作されたものと推定され、袋部は両面均等に摺り断面V字状を呈する。

鋸(90)は67住から出土した刃部みの破片である。刃側は直線的で目立ては細かい。棟側も直線的で、先端部は丸みを帯びている。

芋引鉄(216)は中世の土2298出土品である。一方の肩を欠くため全体の大きさはわからないが、小型の部類と推定される。肩はやや丸みを帯びる。

鈴(412)は中世の土3836出土品で、完形である。上下に潰れた体部形態で、接合部は凹線をなす。吊金具は方形でしっかりした作りである。

肘金具(48)は39住出土で頭部先端を欠く。鉤は基部が方形、先端部が円形の断面をする。頭部はピン状を呈するものと推定される。

門金具(141)は93住出土で先端部のみ欠損する。

鉄(15)は37住出土で、和鉄の刃部破片である。棟側が直線を描くのに対し、刃側は緩く弧を描く。

(2) 銅製品 (第19表・第104図)

内訳は銅製品12点、銭貨123点である。銅製品のうち5点は平安時代、それ以外および銭貨はすべて中世のものである。

ア 平安時代の銅製品

最初に平安時代のものについて。35は円盤状を呈し、中心部および側縁の2分の1を欠く。表面に鍍金が施された金銅製品である。3は方形の薄板の中央を大きく切り抜いたもので、断面は反っている。表面に細密な毛彫りによる絵柄が施される。76は正方体の頭部に細い棒状部が取りつくもので、先端は細く尖る。115は円盤状を呈する。2次調査2A区において同様な形状のものが出土している。8は銅鏡の破片で、潰れ・歪みが大きく原形はわからない。口縁部は肥厚し面取りされる。

イ 中世の銅製品

次に中世のものについて。259は円筒状の用途不明製品で、両端は玉縁状に処理する。399は方形板状の製品で、一方を欠くため全形はわからない。中央部に小孔が穿たれる。307・420・441は刀装具である。420は薄板を切り抜いたもので、切羽である。307は鞘金具で潰れている。441も鞘の足金物で、表面には毛彫りにより唐草紋が描かれる優品である。446は身の浅い銅鏡あるいは承盤か。内屈する口縁部の破片である。

ウ 銭貨

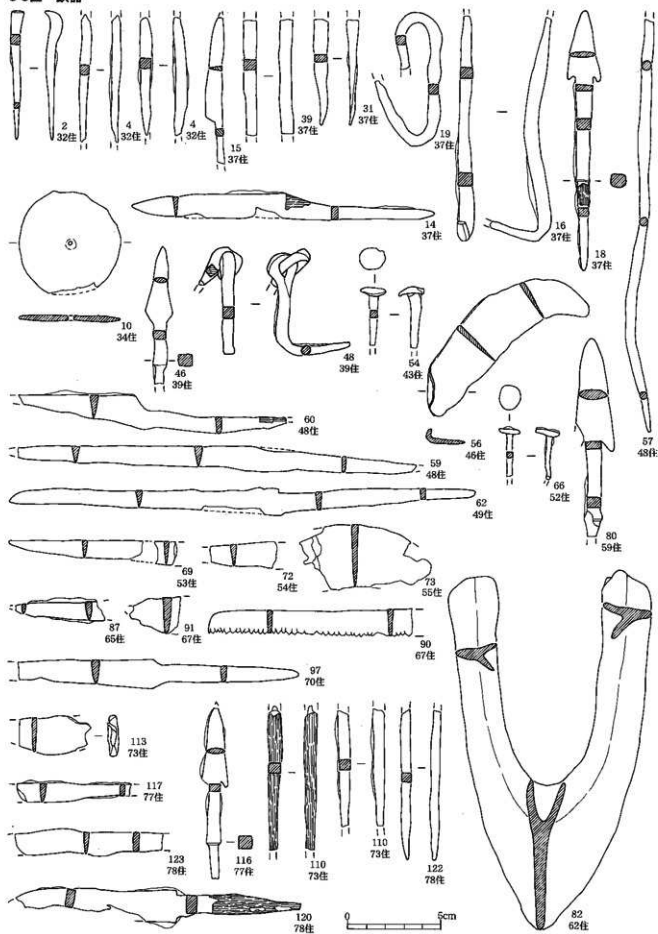
中世の土坑墓から123点が出土した。このうち銭種が特定できるものは99点ある。内訳は嘉祐通寶(北宋・1056) 5点、開元通寶(初鑄:唐・621年、以下同) 15点、乾元重寶(唐・759～) 1点、太平通寶(北宋・976) 1点、淳化元寶(北宋・990) 2点、至道元寶(北宋・995) 3点、景德元寶(北宋・1004) 1点、祥符通寶(北宋・1009) 3点、天禧通寶(北宋・1017) 1点、天聖元寶(北宋・1023) 6点、景祐元寶(北宋・1034) 2点、皇宋通寶(北宋・1039) 12点、至和元寶(北宋・1054) 1点、熙寧元寶(北宋・1068) 9点、元豐通寶(北宋・1078) 9点、元祐通寶(北宋・1086) 9点、紹聖元寶(北宋・1094) 6点、聖宋元寶(北宋・1101) 3点、大觀通寶(北宋・1107) 1点、政和通寶(北宋・1111) 6点、洪武通寶(明・1368) 1点、永樂通寶(明・1408) 1点である。

(3) 鉄滓 (第19表)

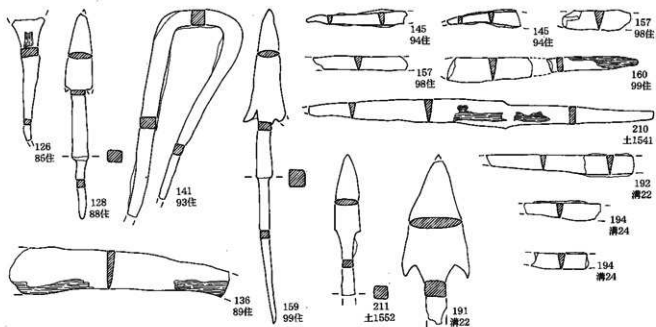
平安時代の住居址・土坑・ピット・溝から134点、中世の土坑から12点、合計146点の鉄滓が出土した。これらの重量は2gから955gのものまでである。出土遺構は大型住居址の37住に特に多い点が注意される。しかし、37住を含め調査範囲から明確な鍛冶遺構は見出されていない。4B区の中世土坑から出土した12点は平安時代のもので紛れ込んだ可能性もあろう。

品名	規格	材質	用途	数量	重量	長さ	幅	厚さ	寸法	単位	数量	重量	長さ	幅	厚さ	寸法	単位
472			鉄線														
473			鉄板														
474	3C	3ヶ	C	不削													
475		鉄土	B	棒		52											
476				棒		58											
477	4B			裏面通貫													
478	3C	495		不削													
479		鋼板	N2	不削													
480	4R	100個	P5	棒		19											
481	3C	土1457		不削													
482	4H	土399		不削													
483		土160		不削													
484		土2001		不削													
485	3C	鋼山面		不削													
486	4B			棒		27											
	○			釘		61.5	6.8	0.8									
		Hu004		不削													
		ha009		刀子		11.7	12.1	3.0									
	○			釘		61.2	6.2	0.5									
				不削													
				不削													
				棒													
				棒													
				刀子		38.8	8.1	2.6									
				棒													
				釘													
				刀子		49.9	7.1	4.2									
				刀子		47.8	7.9	3.2									
				不削													
				鋼													
				刀子		30.0	3.9	3.6									
				不削													
				不削													
				不削													
				釘													
				鋼板通貫													
	○			釘		68.1	7.3	5.6									
	○			不削		48.1	29.7	2.4									
				釘													
				鋼板通貫													
				不削													
				鋼板通貫													
				不削													
				不削													
				不削													
				不削													
				不削													
				不削													
				不削													
				鋼板通貫													
	○			釘		69.0	18.2	4.8									
	○			釘		14.4	14.3	5.3									
	○			釘		106.3	14.1	5.0									
				不削													
	○			釘		83.5	13.7	5.1									
				不削													
				不削													
				鋼板不削													
				刀子													
				不削													
				不削													
				不削													
				不削													
				鋼板通貫													
				先端通貫													
				先端通貫													
				釘													
				釘													
				釘													
				鋼板通貫													
				先端通貫													
				先端通貫													

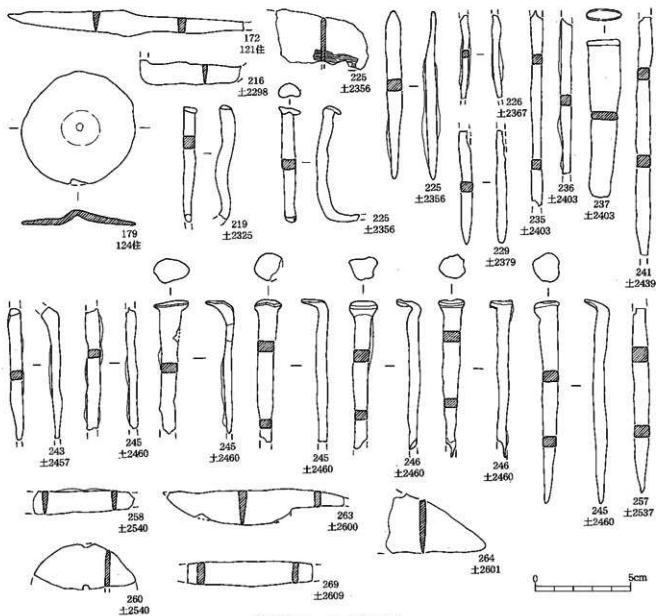
3C区 鉄器



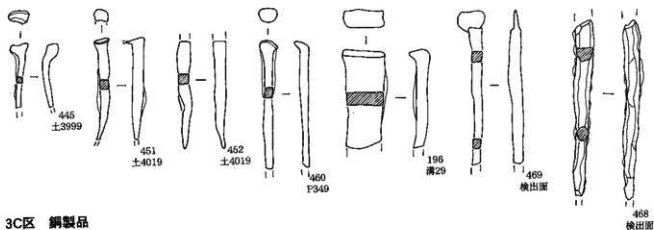
第101図 金属製品(1)



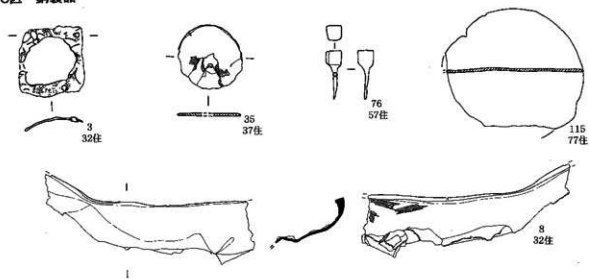
4B区 鉄器



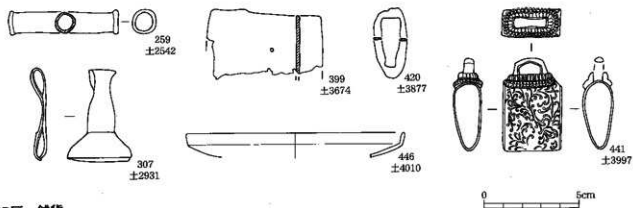
第102図 金属製品(2)



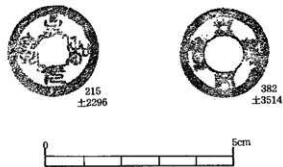
3C区 銅製品



4B区 銅製品



4B区 銭貨



 金属器断面
 金箔剥離部分

第104図 金属製品(4)

VI 調査のまとめ

今回の調査では平安時代、とりわけ9c中頃から11c末までの平安時代の集落址、および中世、12c～16c初頭の土坑墓群が得られた。ここでは調査のまとめに代えて、出土遺物や遺構の重複関係から判明した各遺構の帰属時期に基づいて、川西開田遺跡2A・3C・4B区を中心とした平安時代集落の動き、中世墓址群のあり方について概観しておきたい。

1 平安時代 7・8期(9c中葉～後葉)

38棟の竪穴住居址がこの時期のもので、掘立柱建物址の大半もこの時期だと考えられる。本段階は集落の形成期でありかつ頂点に達した時期といえる。居住域を囲む溝状遺構はこの段階の前半(7期)頃まで存在した可能性が高い。本遺跡に隣接する三間沢川左岸遺跡もこの頃より集落の形成が開始されている。

この段階の前半(7期)の居住域は北・西・南縁を溝状遺構で人為的に区画され、東側は居住地には適さない南北方向の礫層帯で画されている。堆積の状況から区画溝は同時に水路としての役目も果たしていたようである。

居住域の中において、本段階の遺構は中心域から東縁にかけて大型の住居址、建物址が集中する傾向が顕著に窺える。そのあり方は柱穴を伴う大型住居の67・68住を囲むようにその南・西・北側に3間×2間の建物址や中型の住居址が取り巻いている。さらに東～南東側には大型の78・65住があり、その周囲にも2間×2間の建物址や中型の住居址が存在する。これら中心部の遺構群は60m四方の範囲に集中し、その周囲は遺構の空白地帯となっている。

空白地帯を囲む居住域の外縁＝溝にそった北辺～西辺にかけては54住など中型の住居址が溝状遺構と一定の距離を置いて平行かつ直線的に分布している。ここにも掘立柱建物址が伴うが、規模の大きい3間×2間の建物は見当たらない。

区画溝の西外にも前半段階の2棟の住居址がある(123・124住)。これらは溝状遺構が埋没した後半(8期)段階で北側の121・122・125に移行した可能性がある。

本段階の遺構群における遺物のあり方を見ると、次段階に比較して量的には決して多くはないものの、中心域の住居址群と北縁部の住居址群からは銅製品や墨書土器が多く出土し、西縁部からはまったく見出されない傾向が窺える。前者ではとりわけ緑釉陶器5点と墨書土器を出土した65住や灰釉陶器印花紋蓋・瓿を伴った67住などが注目される。なお、溝24から出土した墨書土器に見られる「王」の文字は、三間沢を挟んで北接する三間沢川左岸遺跡で多量に出土しており、両集落の密接な関係を窺わせるものである。

2 平安時代 9・10期(10c前葉～中葉)

本段階は21棟の竪穴住居址が確認された。前段階に比べて集落が縮小している。

居住域を囲む溝状遺構はこの段階には消滅しているが、前段階に見られた空間構成はほぼ保たれている。

中心域は前段階ほどの顕著な空間構成はみられないが、柱穴を伴う大型住居の37住を中心に住居址が群生する。37住は前段階の35・36住から連続的に移行するもので、金銅製品、緑釉陶器11点、耳皿5点、墨書土器7点など特殊遺物が際立って多く、傑出した存在である。37住の東西には中型の住居址が分布し一群を形成している。これら中心域の住居址群の北には49住等3棟の住居址が新たに出現する。前段階で空白地帯だった地域である。

北辺部の住居址群は58住等4棟が東西に連なる。うち3棟は中心部の37住と同規模の柱穴を伴う大型住居

である。特に16住からは延喜通寶、円盤状銅製品、馬具が出土しており注意される。西辺部は中型住居址を中心に前段階から拡大し、その東縁を区切って溝22が現れる。この溝に関連して、溝22と平行に居住城南縁から中心域に至る溝17・19もこの段階のものと考えられる。

遺物のあり方は先に触れたもののほか全体的に緑釉陶器の保有量が多くなり、各領域の住居址から出土する。一方で墨書土器は数を減じるが、37住で大量に保有される則天文字「鳳」のあり方は注意される。同じ文字は同時期の32住出土品、11～12期の88住出土品の中にも見られる。37住の事例はこうした文字が記される事例としては新しい段階に位置付くものであろう。その他、中心域の32住からは銅製の破片、91住からは不明銅製品が出土している。

3 平安時代 11・12期(11c後葉～12c前葉)

この段階は集落の縮小が進み、住居址は15棟のみとなる。とりわけ後半段階(12期)で確実なのは41・66住の2棟のみとなる。特徴的な動きとしては、前段階からこの段階の初め頃にかけて柱穴を伴う超大型住居の39住が出現することである。

居住域の空間構成はその位置を変化させつつも、前段階までと同様、中心域と外縁部の住居址群から成り立っている。中心域は39住の北～東～南側に10棟の中型住居址が分布する。

北辺部は15住のみ、西辺部も数を減じ4棟のみとなる。特殊遺物のあり方は39住ほか中心域の住居址を中心に緑釉陶器、墨書土器が見られ、77住からは円盤状銅製品のほか6点の鉄器が出土した。しかし全般的にこれらの保有量は少なくなっている。

4 平安時代 13・14期(12c中葉～後葉)

この段階の住居址はわずか2棟のみとなり、後半(14期)をもって集落は消滅する。

この段階は前段階までのような空間構成はもはや窺えない。57住は前段階から本段階の初め頃にかけて、61住は後半段階の住居址で、それぞれ前段階までの中心域からは外れた位置にある。57住からは銅製品、緑釉陶器が出土しているが、61住からの特殊遺物の出土はない。

5 平安時代のまとめ

以上のように平安時代の集落は、その前段の奈良時代あるいは古墳時代に遡る遺構・遺物は何らなく、9c中葉に突如出現し、12cに入ると急速に衰退した集落ということができる。集落形態も大規模な溝で居住域が画され、内部の空間構成も大型住居址や掘立柱建物址などの分布に強い規則性が窺えるものであった。出土遺物においては大型住居を中心に銅製品や緑釉陶器の大量保有、特定の文字を記した墨書土器の保有など、他遺跡とは異なる際立った特徴を有している。こうしたあり方は集落の継続期間も含めて、三間沢川を挟んで対峙する三間沢川左岸遺跡と酷似しており、「王」の墨書土器の双方での出土にみるように、両者は密接に関連する集落であったと考えられる。

歴史的環境でも触れたとおり、両遺跡のある一帯は神林堰や和田堰等梓川からの本格的な導水が開始されるまで、水田耕作には向かない地域であった。弥生時代中期前半の疫病遺跡以降、居住域としては見放されたこの地に、わずか300年ほどの間に両遺跡で少なくとも350軒以上にも及ぶ巨大な集落を形成させた背景はいったい何であったのか。長距離に及ぶ計画的水路の造成や整然とした居住域の形成、希少遺物の大量保有等の状況は何を示しているのか。この問題については、これまで三間沢川左岸遺跡の調査成果において度々指摘を受けているとおり、当時の初期荘園との関わりの中で捉え、中央貴族との親密な関係を持ちながらこの地域の開発に精力的にあたった有力集団の存在を考えなくてはならない。近接する両集落それぞれのよ

うな役割を担い、どのように関連して機能していたのか、今後は遺構や出土遺物のあり方から、例えば彼らの生産基盤が何であったか。それに対し集落の初期段階で埋没した溝＝導水路をどう解釈するか？意外に少ない鉄製農具が何を示唆するのか等、より具体的な検討を進める必要がある。

6 中世(12c末～16c初頭)

12c末に至って平安時代の居住域の西側に墓域が形成される。この一帯は三間沢川ないしは鏡川の旧河川跡であり、平安時代には居住域としては土地利用が避けられた領域である。しかし中世の墓域群はあえてこの場所を選定しており、平安時代の居住域とはわずかに接するだけでほとんど重複していない。そこに何らかの意図があったかどうかは定かではないが、偶然とは思えないほどに整然と分かれている。

墓域群の詳細な解析は本報告の段階ではまだ実施していないので、ここでは全体的な傾向を概観するととどめる。墓域群の範囲は北辺および南辺に未調査部分を残すが、概ね南北は150m前後と目される。東西は三間沢川から4B区東端まで幅70～95mの範囲である。これらの空間構成を見ると、墓域が切り合って密集する部分がある一方で、まったく存在しない空間も見られる。特に墓域群の中央を南北に貫く狭長な空間は一目瞭然である。他にも北東部に見られる東西方向の空間、西半中央部の東西方向の空間などが目立つ。

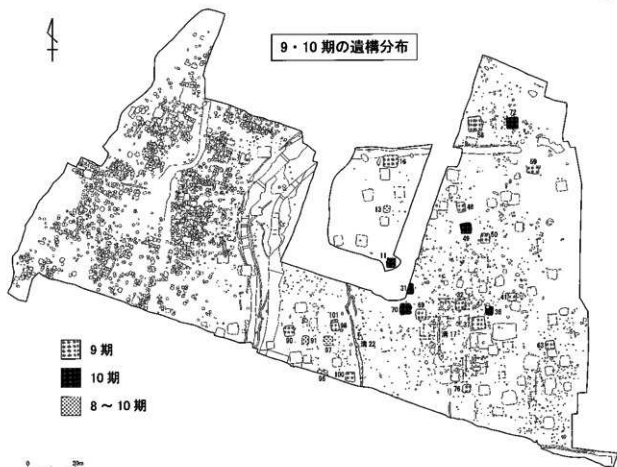
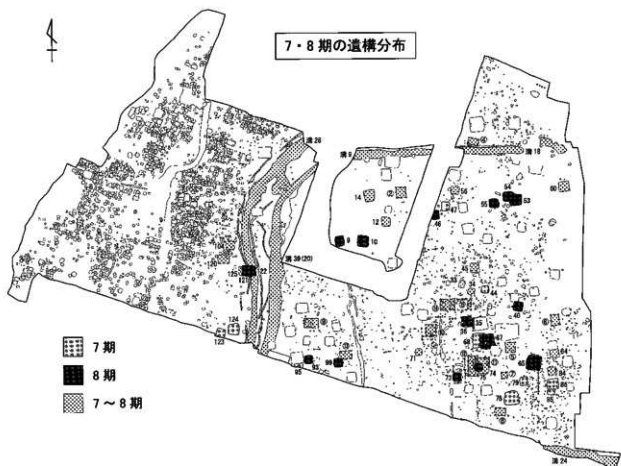
こうした直線的な空間で画された中では、さらに数基から10数基の墓域が重複して大小の群を形成している。そのあり方は数基が直線的に連なる場合や、それらが複合して方形に群集する場合が存在しそうである。いずれにしても、墓域の空間利用には強い規制が働いていたことが窺えよう。墓域の形態はほとんどが方ないし長方形の土坑墓であるが、火葬墓が東縁部に数基見られた。これも厳密に構築場所が分けられていたことを窺わせる。墓域には基本的に遺物がほとんど伴わない。被葬者の性格を窺わせる遺物に刀装具等があるが、こうした遺物はごくわずかである。他に六道銭としての銭貨や青磁を含む陶磁器類も出土しているが、陶磁器類においては明らかに副葬品として墓内におかれたと断定できる完形品は見当たらない。

墓域の中には堅穴建物も存在している。その明確な例は土3345であり、出入口部や床板と思しき炭化材、炭化種子が残存していた。中世の典型的な堅穴建物である。その他にも大型で方形プランの土2890なども堅穴建物の可能性を残す。こうした建物址が墓域の中でどのような役割をはたしたのか、今後検討すべき課題の一つと言える。

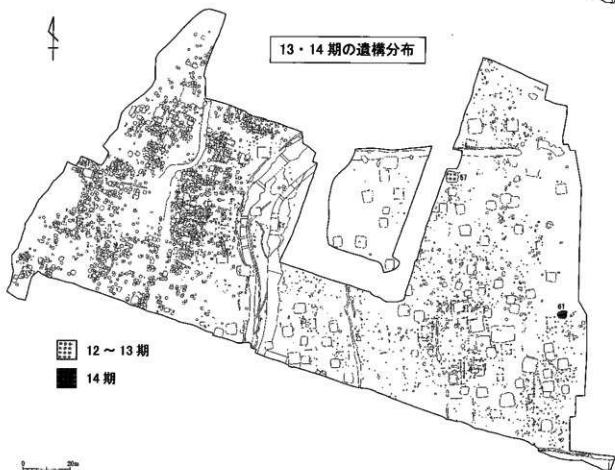
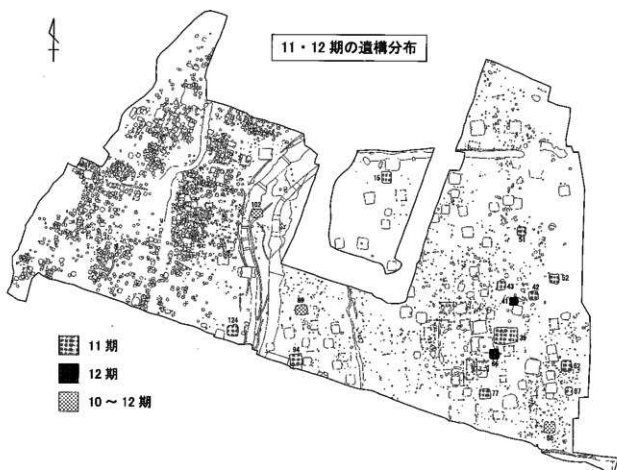
16c初頭、土3345ほかをもって中世の墓域としての調査範囲の土地利用は終焉を迎える。川西開田遺跡周辺は鏡川左岸の川西・太子堂まで古くから継続する集落は存在せず、ここに墓域を形成した集団の本拠がどこにあったのか、あるいはそれらの集落が母体なのか、現段階では不明である。本遺跡周辺における中世～近世初期の様相解明は今後の調査に託さなければならない。

最後に、平成7年の果園圃場整備事業に係る境塚遺跡および川西開田遺跡の第1・2次調査に始まり、平成10年より2年間にわたった新臨空産業団地造成にかかる川西開田遺跡第3・4次調査をもって三間沢川右岸における発掘調査はひとまず終了の運びとなった。特に後者、すなわち本書で報告した川西開田遺跡第3・4次調査については、対象範囲が広大なものとなり、上層の弥生・平安・中世面と下層の縄文面を合わせると面的調査に絞っても50,000㎡近くに達した。ここ最近の市内の発掘調査としては桁外れに規模の大きいものとなり、その成果をまとめるだけでも膨大な時間と労力を要した。従ってすべてを1冊の報告書にまとめることは不可能であり、3冊に分けて報告することとなった。今回、その第1冊である弥生・平安・中世編をここに刊行することができた。

調査の協議からここに至るまでの間、農作業と調査の調整にご尽力をいただいた神林土地改良区ならびに地元地権者の皆様、松本市商工課ほか関係機関各位に感謝を申し上げ、本書の締めくくりとしたい。



第105図 集落の変遷(1)



第106図 集落の変遷(2)

はじめに

川西開田遺跡4次調査B地点は長野県松本市に所在し、今回の発掘調査により、平安時代のものと思われる竪穴住居跡・溝、中世のものと思われる土坑、ピット、溝が検出されている。平安時代の遺構に伴い、土師器・須恵器・灰軸陶器・緑軸陶器などの遺物、中世の土坑群に伴い、土器・陶磁器・金属製品・炭化材・銭貨などの遺物が出土している。また、これらの土坑の一部からは、焼土・炭化物・炭化材・人骨と思われる火葬骨・銭貨が出土していることから、本調査地点の主体は中世の墳墓関連遺跡と考えられている。今回の分析調査では、これらの中世の土坑(13～16c代)から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を行い、各遺構の年代や当時の用材について情報を得る。

1 試料

試料は、本遺跡4次調査B地点で検出された、土坑3345の底面から採取した炭化材4点である。土坑3345は一辺4m弱の隅丸方形を呈し、その他の墓坑と推定される小型の土坑より際立って大きく、3基ほどの小形土坑と重複している。土坑の壁はほとんど垂直に掘りこまれ、深さは検出面から70cmである。土坑3345は土坑という名称で捉えたが、形態的には中世の半地下式建物の堀り方と思われる。土坑の東半分の底面には板状の炭化材が密集し、部分的には柱状の炭化材も遺存している。これらの炭化材は板壁か屋根または床などの板材が焼失・炭化したもので、一挙に埋没し遺存したものと思われる。

試料として、これらの板状炭化材の中から、土(土坑) 3345 Na1、土(土坑) 3345 Na7、土(土坑) 3345 Na12の3点を、柱状炭化材の中から、土(土坑) 3345 Na15の1点が採取された。

2 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。なお計算には、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。また、付記した誤差は β 線の計測値の標準偏差 σ に基づいて算出した年代で、標準偏差に相当する年代(真の値が66.7%の割合でこの範囲内にあるということ)である。

同位体比は、標準値からのずれをパーミルで表した年代である。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値である。表中の測定年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2)樹種同定

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3 結果

(1)放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。出土炭化材の年代値は、土(土坑)3345 Na1が約500年前、土(土坑)3345 Na7が約400年前、土(土坑) 3345 Na12が約900年前、土(土坑) 3345 Na15が約200年前の値を示す。

(2)樹種同定

炭化材のうち、土(土坑) 3345 Na12は、道管を有することから広葉樹材であるが、保存状態が悪いために

種類の同定には至らなかった。その他の3点は全て針葉樹のヒノキ属に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ属(*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1〜15細胞高。

第20表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	試料の質	樹種	測定年代BP	δ13C(‰)	Code No.
土(土坑) 3345 Na1	炭化材	ヒノキ属	530±70	-29.0	Gak-20672
土(土坑) 3345 Na7	炭化材	ヒノキ属	360±60	-30.8	Gak-20673
土(土坑) 3345 Na12	炭化材	不明	860±50	-19.1	Gak-20674
土(土坑) 3345 Na15	炭化材	ヒノキ属	170±60	-27.1	Gak-20675

(1) 年代値：1,950年を基点とした値

(2) δ13C：試料炭素の13C/12C原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した

4 考察

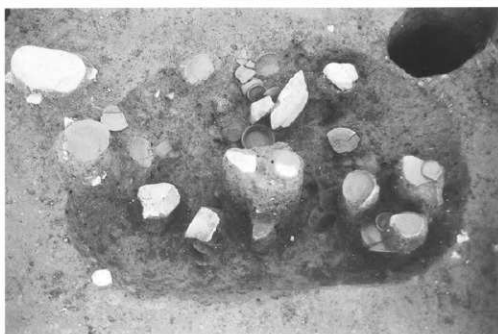
今回試料とした炭化材の年代値は、土(土坑) 3345 Na1と土(土坑) 3345 Na7が中世、土(土坑) 3345 Na12が平安時代末期、土(土坑) 3345 Na15が江戸時代初期に相当する値である。放射性炭素年代測定においては、測定法自体が持つ誤差や、時代による大気中の14C濃度の違いなどにより、測定年代値が暦年代とは一致しない。特に、放射性炭素年代と暦年代とのずれは、古くなるほど大きくなるのがいくつかの分析例で出されているが、例えば数千年前では500〜800年ほど放射性炭素年代の方が若い傾向を示し(中村2000)、同文献に掲載されているStuiver and Reimerの校正曲線では2000〜1700年前の間で、放射性炭素年代は暦年代に比べて最大100年程度古い方へずれている。さらに、東村(1990)にある放射性炭素年代・年輪年代校正値のデータでは、放射性炭素年代の約600年前頃を境として、それより以前は約2000年前までは放射性炭素年代の方が古く、以後は約100年前までは放射性炭素年代が新しい方へずれている。さらに、中村(2000)のAD1551-1955までの年輪の放射性炭素年代測定例を参考にすると、約360年前の放射性炭素年代値は暦年の16c前半、約170年前の放射性炭素年代値は暦年の17c後半から現代までの範囲に校正される可能性がある。これらのずれと、各試料が同一遺構から出土しており同時性が高いことを考慮すると、土(土坑) 3345出土炭化材のNa1とNa7の年代値は共に16c初頭頃と考えられ、この年代が遺構の構築時期を示す可能性がある。一方、土(土坑) 3345出土炭化材のNa12の年代値は10c後半〜12c後半頃と考えられ、Na1とNa7より約400年〜600年ほど古い年代値を示す。この年代値のずれは、古材の利用などにより、測定試料の年代値と遺構構築時期が一致しないことや、板材として利用する樹木の部位による年代のずれによるものと考えられる。また、土(土坑) 3345出土炭化材のNa15の年代値は、古く見積もっても17c後半に相当する。試料の出土位置を考慮すると、後世の炭化材が混入したものの可能性もある。

引用文献

- 東村武信(1990)改訂 考古学と物理化学、212p、学生社。
 中村俊夫(2000) 14C年代から暦年代への校正、日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」、p.21-40。



第39号住居址 全景
(上：西から 下：南から)



同上
カマド脇ピット内遺物出土状況



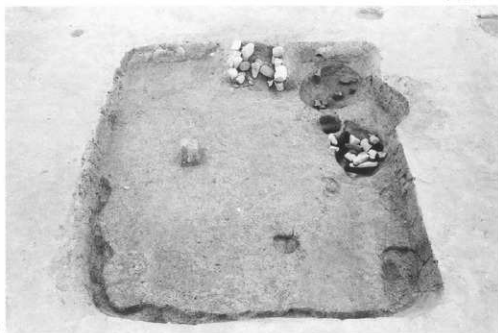
第37号住居址 全景(西から)



同上
遺物出土状況(西から)



第42号住居址 全景(南から)



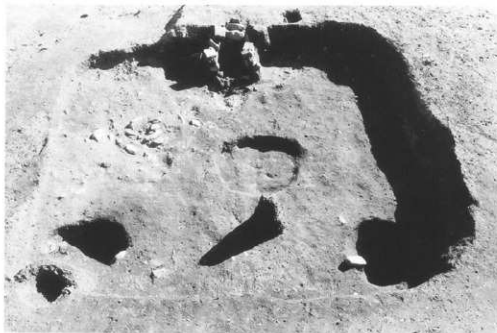
第47号住居址 全景(南から)



第57号住居址
遺物出土状況(西から)



第58号住居址 全景(東から)



第62号住居址 全景(西から)



第67号住居址 全景(西から)



第73号住居址
遺物出土状況(西から)



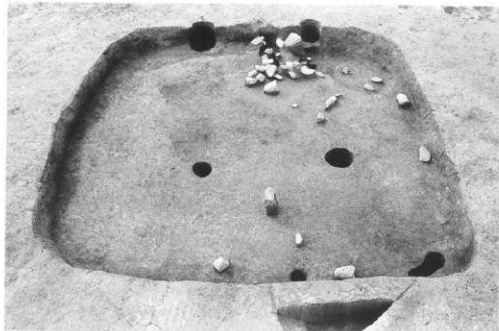
第77号住居址
遺物出土状況(東から)



第78号住居址
遺物出土状況(西から)



第88号住居址 全景(西から)



第90号住居址 全景(東から)



第97号住居址 全景(東から)



第107号住居址 全景(東から)

第99号住居址 全景(西から)



同上 遺物出土状況(西から)



同上 カマド

